



System Management Services (SMS)

1.2 リファレンスマニュアル

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No. 816-4671-10
2002 年 5 月, Revision A

コメントの宛先: docfeedback@sun.com

Copyright 2002 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054 U.S.A. All rights reserved.

本製品およびそれに関連する文書は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company Limited が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。本製品のフォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権法により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品は、株式会社モリサワからライセンス供与されたリュウミン L-KL (Ryumin-Light) および中ゴシック BBB (GothicBBB-Medium) のフォント・データを含んでいます。

本製品に含まれる HG 明朝 L と HG ゴシック B は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェイスマスタをもとに作成されたものです。平成明朝体 W3 は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会 文字フォント開発・普及センターからライセンス供与されたタイプフェイスマスタをもとに作成されたものです。また、HG 明朝 L と HG ゴシック B の補助漢字部分は、平成明朝体 W3 の補助漢字を使用しています。なお、フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun、Sun Microsystems、AnswerBook2、docs.sun.com は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。サンのロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

ATOK は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。ATOK8 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK8 にかかる著作権その他の権利は、すべて株式会社ジャストシステムに帰属します。ATOK Server/ATOK12 は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、ATOK Server/ATOK12 にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPENLOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

Federal Acquisitions: Commercial Software—Government Users Subject to Standard License Terms and Conditions.

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本書には、技術的な誤りまたは誤植の可能性があります。また、本書に記載された情報には、定期的に変更が行われ、かかる変更は本書の最新版に反映されます。さらに、米国サンまたは日本サンは、本書に記載された製品またはプログラムを、予告なく改良または変更することがあります。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法 (外為法) に定められる戦略物資等 (貨物または役務) に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典:	<i>System Management Services (SMS) 1.2 Reference Manual</i>
	Part No: 816-3268-10
	Revision A



Please
Recycle



Adobe PostScript

目次

Intro(1M)	1
addboard(1M)	5
addtag(1M)	13
cancelcmdsync(1M)	16
console(1M)	21
dca(1M)	26
deleteboard(1M)	28
deletetag(1M)	34
disablecomponent(1M)	36
dsmd(1M)	42
dxs(1M)	44
enablecomponent(1M)	46
esmd(1M)	52
flashupdate(1M)	55
fomd(1M)	61
frad(1M)	62
help(1M)	63
hpost(1M)	65
hwad(1M)	66

initcmdsync(1M) 67
kmd(1M) 72
mand(1M) 75
mld(1M) 77
moveboard(1M) 80
osd(1M) 89
pcd(1M) 90
poweroff(1M) 93
poweron(1M) 96
rcfgadm(1M) 99
reset(1M) 118
resetsc(1M) 121
runcmdsync(1M) 124
savecmdsync(1M) 126
setbus(1M) 131
setdatasync(1M) 135
setdate(1M) 139
setdefaults(1M) 142
setfailover(1M) 146
setkeyswitch(1M) 148
setobpparams(1M) 152
setupplatform(1M) 155
showboards(1M) 159
showbus(1M) 168
showcmdsync(1M) 171
showcomponent(1M) 173
showdatasync(1M) 179
showdate(1M) 182

showdevices(1M) 184
showenvironment(1M) 189
showfailover(1M) 198
showkeyswitch(1M) 201
showlogs(1M) 203
showobpparams(1M) 207
showplatform(1M) 209
showxirstate(1M) 217
smsbackup(1M) 222
smsconfig(1M) 225
smsconnectsc(1M) 238
smsrestore(1M) 241
smsversion(1M) 243
ssd(1M) 247
tmd(1M) 248

はじめに 概要

リファレンスマニュアルは、初めて SunOS を使用するユーザーやすでにある程度の知識を持っているユーザーのどちらでも対応できるように解説されています。このマニュアルを構成するマニュアルページは一般に参照マニュアルとして作られており、チュートリアルな要素は含んでいません。それぞれのコマンドを実行すると、どのような結果が得られるかについて、詳しく説明されています。

このマニュアルは、マニュアルページの内容によっていくつかのセクションに分かれています。各セクションについて以下に簡単に説明します。

- セクション 1 は、オペレーティングシステムで使えるコマンドを説明します。
- セクション 1M は、システム保守や管理用として主に使われるコマンドを説明します。
- セクション 2 は、すべてのシステムコールについて説明します。ほとんどのシステムコールに 1 つまたは複数のエラーがあります。エラーの場合、通常ありえない戻り値が返されます。
- セクション 3 は、さまざまなライブラリ中の関数について説明します。ただし、UNIX システムプリミティブを直接呼び出す関数については、セクション 2 で説明しています。
- セクション 4 は、各種ファイルの形式について説明します。また、ファイル形式を宣言する C 構造体を適用できる場合には随時説明しています。
- セクション 5 は、文字セットテーブルなど他のセクションには該当しないものについて説明します。
- セクション 6 は、オペレーティングシステムに標準で含まれるゲームとデモプログラムについて説明します。
- セクション 7 は、特殊なハードウェア周辺装置またはデバイスドライバに関するさまざまな特殊ファイルについて説明します。STREAMS ソフトウェアドライバ、モジュール、またはシステムコールの STREAMS 汎用セットについても説明します。

以下に、このマニュアルの項目を表記されている順に説明します。ほとんどのマニュアルページが下記の項目からなる共通の書式で書かれています。必要でない項目については省略されています。たとえば、記述すべきバグがコマンドにない場合などは、「使用上の留意点」という項目はありません。各マニュアルページの詳細は各セクションの intro を、マニュアルページの一般的な情報については man(1) を参照してください。

名前	コマンドや関数の名称と概略が示されています。
形式	<p>コマンドや関数の構文が示されています。標準パスにコマンドやファイルが存在しない場合は、フルパス名が示されます。字体は、コマンド、オプションなどの定数にはボールド体 (bold) を、引数、パラメタ、置換文字などの変数にはイタリック体 (<i>Italic</i>) または <日本語訳> を使用しています。オプションと引数の順番は、アルファベット順です。特別な指定が必要な場合を除いて、1文字の引数、引数のついたオプションの順に書かれています。</p> <p>以下の文字がそれぞれの項目で使われています。</p> <p>[] このかっこに囲まれたオプションや引数は省略できます。このかっこが付いていない場合には、引数を必ず指定する必要があります。</p> <p>... 省略符号。前の引数に変数を付けたり、引数を複数指定したりできることを意味します (例: 'filename...')。</p> <p> 区切り文字 (セパレータ)。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定できます。</p> <p>{ } この大かっこに囲まれた複数のオプションや引数は省略できます。かっこ内を 1 組として扱います。</p>
プロトコル	この項が使われているのは、プロトコルが記述されているファイルを示すサブセクション 3R だけです。パス名は常にボールド体 (bold) で示されています。
機能説明	コマンドの機能とその動作について説明します。実行時の詳細を説明していますが、オプションの説明や使用例はここでは示されていません。対話形式のコマンド、サブコマンド、リクエスト、マクロ、関数などに関しては「使用法」で説明します。

IOCTL	セクション7だけに使用される項です。ioctl(2) システムコールへのパラメタは ioctl と呼ばれ、適切なパラメタを持つデバイスクラスのマニュアルページだけに記載されています。特定のデバイスに関する ioctl は、(そのデバイスのマニュアルページに) アルファベット順に記述されています。デバイスの特定のクラスに関する ioctl は、mtio(7I) のように io で終わる名前が付いているデバイスクラスのマニュアルページに記載されています。
オプション	各オプションがどのように実行されるかを説明しています。「形式」で示されている順に記述されています。オプションの引数はこの項目で説明され、必要な場合はデフォルト値を示します。
オペランド	コマンドのオペランドを一覧表示し、各オペランドがコマンドの動作にどのように影響を及ぼすかを説明しています。
出力	コマンドによって生成される出力(標準出力、標準エラー、または出力ファイル)を説明しています。
戻り値	値を返す関数の場合、その値を示し、値が返される時の条件を説明しています。関数が 0 や -1 のような一定の値だけを返す場合は、値と説明の形で示され、その他の場合は各関数の戻り値について簡単に説明しています。void として宣言された関数はこの項では扱いません。
エラー	失敗の場合、ほとんどの関数はその理由を示すエラーコードを <i>errno</i> 変数の中に設定します。この項ではエラーコードをアルファベット順に記述し、各エラーの原因となる条件について説明します。同じエラーの原因となる条件が複数ある場合は、エラーコードの下にそれぞれの条件を別々のパラグラフで説明しています。
使用法	この項では、使用する際の手がかりとなる説明が示されています。特定の決まりや機能、詳しい説明の必要なコマンドなどが示されています。組み込み機能については、以下の小項目で説明しています。 <ul style="list-style-type: none"> • コマンド • 修飾子 • 変数 • 式 • 入力文法

使用例	コマンドや関数の使用例または使用方法を説明しています。できるだけ実際に入力するコマンド行とスクリーンに表示される内容を例にしています。例の中には必ず <code>example%</code> のプロンプトが出てきます。スーパーユーザーの場合は <code>example#</code> のプロンプトになります。例では、その説明、変数置換の方法、戻り値が示され、それらのほとんどが「形式」、「機能説明」、「オプション」、「使用法」の項からの実例となっています。
環境	コマンドや関数が影響を与える環境変数を記述し、その影響について簡単に説明しています。
終了ステータス	コマンドが呼び出しプログラムまたはシェルに返す値と、その状態を説明しています。通常、正常終了には <code>0</code> が返され、 <code>0</code> 以外の値はそれぞれのエラー状態を示します。
ファイル	マニュアルページが参照するファイル、関連ファイル、およびコマンドが作成または必要とするファイルを示し、各ファイルについて簡単に説明しています。
属性	属性タイプとその対応する値を定義することにより、コマンド、ユーティリティ、およびデバイスドライバの特性を一覧しています。詳細は <code>attributes(5)</code> を参照してください。
関連項目	関連するマニュアルページ、当社のマニュアル、および一般の出版物が示されています。
診断	エラーの発生状況と診断メッセージが示されています。メッセージはボールド体 (bold) で、変数はイタリック体 (<i>Italic</i>) または <日本語訳> で示されており、C ロケール時の表示形式です。
警告	作業に支障を与えるような現象について説明しています。診断メッセージではありません。
注意事項	それぞれの項に該当しない追加情報が示されています。マニュアルページの内容とは直接関係のない事柄も参照用に扱っています。ここでは重要な情報については説明していません。
使用上の留意点	すでに発見されているバグについて説明しています。可能な場合は対処法も示しています。

名前	Intro – SMS 管理																																
機能説明	この節では、システム管理ソフトウェアの環境で実行可能なコマンドについて説明します。																																
コマンド一覧	次にサポートされているコマンドを示します。																																
	<table border="0"> <tr> <td>addboard</td> <td>ドメインに対するボードの割り当て、接続、設定</td> </tr> <tr> <td>addtag</td> <td>ドメインに対するドメイン名 (タグ) の割り当て</td> </tr> <tr> <td>cancelcmdsync</td> <td>コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除</td> </tr> <tr> <td>console</td> <td>ドメインコンソールへのアクセス</td> </tr> <tr> <td>dca</td> <td>ドメイン構成エージェント</td> </tr> <tr> <td>deleteboard</td> <td>ドメインからシステムボードの設定を解除し、ドメインから切り離して割り当てを解除</td> </tr> <tr> <td>deletetag</td> <td>ドメインに関連付けられているドメイン名 (タグ) の削除</td> </tr> <tr> <td>disablecomponent</td> <td>特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから追加</td> </tr> <tr> <td>dsmd</td> <td>ドメインの状態監視デーモン</td> </tr> <tr> <td>dxs</td> <td>ドメイン X サーバー</td> </tr> <tr> <td>enablecomponent</td> <td>特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから削除</td> </tr> <tr> <td>esmd</td> <td>環境状態監視デーモン</td> </tr> <tr> <td>flashupdate</td> <td>PROM システムボードの更新</td> </tr> <tr> <td>fomd</td> <td>フェイルオーバー管理デーモン</td> </tr> <tr> <td>frad</td> <td>FRU アクセスデーモン</td> </tr> <tr> <td>help</td> <td>SMS コマンドのヘルプ情報を表示</td> </tr> </table>	addboard	ドメインに対するボードの割り当て、接続、設定	addtag	ドメインに対するドメイン名 (タグ) の割り当て	cancelcmdsync	コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除	console	ドメインコンソールへのアクセス	dca	ドメイン構成エージェント	deleteboard	ドメインからシステムボードの設定を解除し、ドメインから切り離して割り当てを解除	deletetag	ドメインに関連付けられているドメイン名 (タグ) の削除	disablecomponent	特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから追加	dsmd	ドメインの状態監視デーモン	dxs	ドメイン X サーバー	enablecomponent	特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから削除	esmd	環境状態監視デーモン	flashupdate	PROM システムボードの更新	fomd	フェイルオーバー管理デーモン	frad	FRU アクセスデーモン	help	SMS コマンドのヘルプ情報を表示
addboard	ドメインに対するボードの割り当て、接続、設定																																
addtag	ドメインに対するドメイン名 (タグ) の割り当て																																
cancelcmdsync	コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除																																
console	ドメインコンソールへのアクセス																																
dca	ドメイン構成エージェント																																
deleteboard	ドメインからシステムボードの設定を解除し、ドメインから切り離して割り当てを解除																																
deletetag	ドメインに関連付けられているドメイン名 (タグ) の削除																																
disablecomponent	特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから追加																																
dsmd	ドメインの状態監視デーモン																																
dxs	ドメイン X サーバー																																
enablecomponent	特定のコンポーネントを ASR ブラックリストから削除																																
esmd	環境状態監視デーモン																																
flashupdate	PROM システムボードの更新																																
fomd	フェイルオーバー管理デーモン																																
frad	FRU アクセスデーモン																																
help	SMS コマンドのヘルプ情報を表示																																

hpost	Sun Fire 15K の電源投入時自己診断 (POST) 制御系アプリケーション
hwad	ハードウェアアクセスデーモン
initcmdsync	回復するスクリプトを特定するための、コマンド同期記述子の作成
kmd	キー管理デーモン
mand	管理ネットワークデーモン
mld	メッセージロギングデーモン
moveboard	ドメイン間でのシステムボードの移動
osd	OpenBoot PROM サーバーデーモン
pcd	プラットフォーム構成データベースデーモン
poweroff	電源切断の制御
poweron	電源投入の制御
rcfgadm	遠隔構成管理
reset	指定されたドメインのすべてのポート (CPU または I/O) にリセットを送信
resetsc	スペア SC にリセットを送信
runcmdsync	フェイルオーバー後の回復のために、指定されたスクリプトを準備
savecmdsync	フェイルオーバーの後に、スクリプトを再開する場所の指定、およびマーカーの追加
setbus	ドメイン内のアクティブな拡張ボタンで動的バスの再構成を実行
setdatasync	データ同期で使用されるデータ適用リストの変更
setdate	システムコントローラ (SC) またはドメインの日付と時刻の設定

setdefaults	直前にアクティブであったドメインのすべてのインスタンスの削除
setfailover	SC フェイルオーバーメカニズムの状態の変更
setkeyswitch	仮想キースイッチ位置の変更
setobpparams	OpenBoot PROM 変数の設定
setupplatform	ドメインの使用可能構成要素リストの設定
showboards	システムボードの割り当て情報と状態の表示
showbus	アクティブドメイン内の拡張ボタンのバス構成を表示
showcmdsinc	現在のコマンド同期リストの表示
showcomponent	コンポーネントの ASR ブラックリスト状態の表示
showdatasync	フェイルオーバーに対する SMS データ同期状態の表示
showdate	システムコントローラまたはドメインの日付と時刻の表示
showdevices	システムボードデバイスおよび資源使用状況情報の表示
showenvironment	環境データの表示
showfailover	SC のフェイルオーバー状態の管理または表示
showkeyswitch	仮想キースイッチ位置の表示
showlogs	メッセージログファイルの表示
showobpparams	OpenBoot PROM 起動パラメタの表示
showplatform	各ドメインのボード使用可能構成要素リストおよびドメイン状態の表示
showxirstate	プロセッサにリセットパルスを送信後、CPU ダンプ情報を表示

Intro(1M)

smsbackup	SMS 環境のバックアップ
smsconfig	SMS 環境の設定
smsconnectsc	遠隔 SC コンソールへのアクセス
smsrestore	SMS 環境の復元
smsversion	SMS ソフトウェアのアクティブバージョンの表示
ssd	SMS 起動デーモン
tmd	タスク管理デーモン

名前	addboard - ドメインに対するボードの割り当て、接続、設定
形式	<pre>addboard -d domain_id domain_tag [-c function] [-r retry_count -t timeout]] [-q] [-f] [-y] [-n] location [location]... addboard -h</pre>
機能説明	<p>addboard(1M) は、ドメイン <i>domain_id domain_tag</i> に対して <i>location</i> の割り当て、接続、設定を行います。</p> <p>ボードは、追加されるドメインで <i>available</i> になっているか、またはそのドメインで <i>assigned</i> になっている必要があります。-c オプションは、現在の設定状態から新しい設定状態へ、ボードの切り替えを指定する場合に使用します。設定状態は、<i>assign</i>、<i>connect</i>、または <i>configure</i> のいずれかとなります。-c オプションが指定されない場合は、デフォルトの設定状態は <i>configure</i> になります。</p> <hr/> <p>注 - addboard はタスクを同期的に実行し、コマンドが完了するまでユーザーに制御を返しません。ボードの電源が入っていないか、またはテストされていない状態で、-c <i>connect configure</i> オプションを指定すると、このコマンドによってボードの電源が投入され、テストされます。</p> <hr/> <p>注 - 1つのボードのみが指定されており、それが自動システム回復 (ASR) ブラックリストファイルに定義されている場合は、addboard はエラーメッセージを表示して終了します。複数のボードが指定されている場合は、addboard は、ボードがスキップ中であることを示すメッセージを表示して次のボードへ進み、最後のボードの場合は、そこで終了します。</p>

オプション

次のオプションがサポートされています。

-c *function*

function の有効な値は、assign、connect、または configure です。このオプションは、設定状態の切り替えを制御する場合に使用します。それぞれの機能は、その前の状態に基づいて実行されます。たとえば、configure は最初に割り当てを行い、次に接続してから設定を行います。

注 - addboard コマンドの実行が失敗しても、対象のボードは実行前の状態には戻りません。dxs エラーメッセージ (または dca エラーメッセージ) がドメインのログに出力されます。発生したエラーが回復可能であれば、コマンドを再試行できます。回復不能な場合、対象のボードを使用するためには、当該ドメインを再起動する必要があります。

有効な切り替え状態とその意味は以下のとおりです。

assign

ボードを論理ドメインに割り当てます。この状態のボードには当該ドメインが独占的にアクセスしますが、ボード自体はアクティブではありません。割り当てが完了すると、setkeyswitch on を使用するか、あるいは connect オプションまたは configure オプションを使用することによって、ボードをドメインに接続または設定できます。

connect

ボードが論理ドメインに割り当てられていない場合は、割り当てます。

ボードを connected|unconfigured 状態に切り替えます。これで、システムボードは論理ドメインに割り当てられ、接続されている (active) 状態になります。この状態では、標準システムでボード上のハードウェア資源を使用することはできますが、ボードのハードウェア資源は標準の Solaris のデータ構造では表現されないため、Solaris の環境では使用できま

せん。ボード上で使用できる操作は、設定管理に限定されます。これは一時的な状態であり、ソフトウェアによるこの状態の実装は、現時点では存在しません。

configure

ボードが論理ドメインに割り当てられていない場合は、割り当てます。

ボードを `connected|configured` 状態に切り替えます。この状態では、ボードはドメインに割り当て、接続され、アクティブになっており、Solaris の環境用に設定されています。ボード上のハードウェア資源は、Solaris で使用することができます。

-d *domain_id*

ドメインの ID です。有効な *domain_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

-d *domain_tag*

`addtag(1M)` を使用してドメインに割り当てられる名前。

-f

指定された処理を強制的に実行します。通常、このオプションを指定すると、安全機能がハードウェア側で制御されます。状態の強制的な変更では、条件が `ok` や `unknown` でない占有装置のハードウェア資源を、ハードウェアに基づく安全チェック機能に従って使用できます。

-h

ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

-n

すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、-q オプションを使用するまで表示されます。

-q

非出力。プロンプトを含むすべての `stdout` へのメッセージを抑制します。

`-q` を単独で使用すると、すべてのプロンプトに対して `-n` オプションがデフォルトで定義されます。

`-q` オプションを `-y` または `-n` オプションとともに使用すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

-r *retry_count* -t *timeout*

これらのコマンド引数を使用すると、状態の切り替え中に障害が発生した場合に再試行する回数を指定することができます。 `-r retry_count` オプションは、ドメインによって設定状態の変更が再試行される回数を表示します。 `-t timeout` オプションは、次の再試行を行うまでにドメインが待機する時間 (秒) を表示します。このオプションは、必ず `retry_count` とともに使用します。デフォルト値は 0 で、これは要求がすぐに再試行されることを意味します。

-Y

すべてのプロンプトに対して自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、`-q` オプションを使用するまで表示されます。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

location ボード位置のリストで、スペースで区切ります。複数の *location* 引数を使用できます。

次の *location* 形式が使用できます。

SB(0...17)

IO(0...17)

注 - ボードタイプを使用する場合は、`showboards(1M)` を使用します。

拡張機能説明

必要なグループ特権

-c assign オプションは、プラットフォーム管理者特権を持つユーザーのみ、実行することができます。

ドメイン管理者または設定者特権を持っているユーザーは、自身のドメインについてのみ、このコマンドを実行できます。対象のドメインにボードが割り当てられていない場合は、ドメインの使用可能構成要素リストにボードを定義しておく必要があります。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。

使用例

使用例 1 – ドメイン C にボードを割り当てる

ドメイン C に 4 つのボードを割り当てる場合は、プラットフォーム特権またはドメイン特権が必要であり、さらにボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

```
sc0:SMS-user:> addboard -d C -c assign SB0 IO1 SB1 SB2
SB at SB0 assigned to domain: C
IO at IO1 assigned to domain: C
SB at SB1 assigned to domain: C
SB at SB2 assigned to domain: C
sc0:SMS-user:>
```

使用例 2 – ブラックリストに定義されているボードをドメイン C に割り当てる

ドメイン C に 4 つのボードを割り当てる場合は、プラットフォーム特権またはドメイン特権が必要であり、さらにボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

```
sc0:SMS-user:> addboard -d C -c assign SB0 IO2 SB1 SB2
SB at SB0 assigned to domain: C
IO at IO2 assigned to domain: C
Warning:IO at IO2 is blacklisted. You will not be able to connect or configure it.
SB at SB1 assigned to domain: C
SB at SB2 assigned to domain: C
sc0:SMS-user:>
```

使用例 3 – ドメイン A にボードを接続する

この例では、再試行の回数を 5 回、タイムアウトを 5 秒に設定し、ドメイン A に対して 3 つのボードを接続します。ドメイン A のドメイン特権が必要です。

```
sc0:sms-user:> addboard -d A -c connect -r 5 -t 5 IO3 IO4 IO5
```

使用例 4 – ボード (ASR ブラックリストに定義されているボードを含む) をドメイン C に接続する

ドメイン C のドメイン特権が必要です。ブラックリストに含まれるボードはスキップされます。

```
sc0:sms-user:> addboard -d C -c connect SB0
SB at SB0 is blacklisted.
Exiting. sc0:sms-user:>
```

使用例 5 – 複数のボードをドメイン A に設定する

ドメイン A のドメイン特権が必要です。

```
sc0:sms-user:> addboard -d A -c configure IO3 IO4 IO5
```

使用例 6 – ボード (ASR ブラックリストに定義されているボードを含む) をドメイン A に設定する

ドメイン A のドメイン特権が必要です。ブラックリストに含まれるボードはスキップされます。

```
sc0:sms-user:> addboard -d A -c configure IO7 IO8 IO9
Skipping IO at IO8.It is blacklisted.
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了
- 1 応答なし
- 2 サポートされていない
- 3 操作がサポートされていない
- 4 不正な特権
- 5 ビジー
- 6 システムビジー

- 7 データエラー
- 8 ライブラリエラー
- 9 ライブラリが存在しない
- 10 条件が不十分
- 11 不正
- 12 エラー
- 13 APID が存在しない
- 14 不正な属性
- 30 不正なボード ID タイプ
- 31 不正な特権
- 32 他のドメインに割り当てられている
- 33 特権を取得できない
- 34 ドメインボード情報を取得できない
- 35 アクティブなボード一覧を取得できない
- 36 割り当てられているボード一覧を取得できない
- 37 ブラックリストの取得に失敗
- 38 Solaris が稼働していない
- 56 DR のコマンド構文エラー
- 68 DR 操作の失敗

addboard(1M)

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist

esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。

注 - このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。ASR ブラックリストファイルから特定のコンポーネントを削除するには、enablecomponent(1M) を使用します。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、enablecomponent(1M)、esmd(1M)、showcomponent(1M)

名前	addtag - ドメインに対するドメイン名 (タグ) の割り当て
形式	addtag -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> [-q] [-y -n] <i>new_tag</i> addtag -h
機能説明	addtag(1M) は、指定されたドメインタグ名 (<i>new_tag</i>) をドメイン (<i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>) へ追加します。1 つのドメインには 1 つの名前タグしか割り当てできません。また、この名前はすべてのドメインで必ず一意になるようにします。addtag を使用して <i>domain_tag</i> を変更することもできます。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 <i>new_tag</i> ドメインに割り当てられる新しいタグ名。不正なドメイン名の説明については、「拡張機能説明」を参照してください。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
-n	すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されません。
-q	非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。 単独で使用すると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。 -y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。

addtag(1M)

	<p><code>-y</code> すべてのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、<code>-q</code> オプションとともに使用しない限り表示されません。</p>
オペランド	<p>次のオペランドがサポートされています。</p> <p><code>new_tag</code> ドメインに割り当てられる新しいタグ名。不正なドメイン名の説明については、「拡張機能説明」を参照してください。</p>
拡張機能説明	
ドメイン名 (タグ) の制約	<p>ドメイン名タグには、次の制約があります。</p> <ul style="list-style-type: none">■ 1 文字の名前は使用しない■ すべてのドメイン名タグは、同じセッション内のドメインで一意とする■ タグは、Solaris のノード名と同じ制約に準拠します。現在、ドメイン名の長さは 2 文字から 64 文字に制限されています。
必要なグループ特権	<p>このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。</p> <p>詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。</p>
使用例	<p>使用例 1 – プロンプトを表示してタグ <code>eng2</code> をドメイン A に割り当てる</p> <pre>sc0:sms-user:>addtag -d A eng2</pre> <p>このドメインのタグが終了する場合は、プロンプトが表示されます。</p> <p>使用例 2 – <code>-y</code> オプションを使用して、タグ「eng2」をドメイン A に割り当てる</p> <pre>sc0:sms-user:>addtag -d A -y eng2</pre> <p>プロンプトが表示され、自動的に「yes」と応答します。この応答によって、ドメインに対して (タグがすでに存在している場合でも) ドメインタグが設定されます。</p> <p>使用例 3 – <code>-n</code> オプションを使用してタグ <code>eng2</code> をドメイン A に割り当てる</p> <pre>sc0:sms-user:>addtag -d A -n eng2</pre>

プロンプトが表示され、自動的に「no」と応答されます。この応答によって、このドメインに対するタグがまだ設定されていない場合は、タグが設定されません。

使用例 4 — -qy オプションを使用してタグ eng2 をドメイン A に割り当てる

```
sc0:sms-user:>addtag -d A -qy eng2
```

プロンプトは表示されません。

使用例 5 — -qn オプションを使用してタグ eng2 をドメイン A に割り当てる

```
sc0:sms-user:>addtag -d A -qn eng2
```

この例では、まだ設定されていない場合にのみ、タグ eng2 をドメイン A に割り当てます。プロンプトは表示されません。

使用例 6 — -q オプションを使用してタグ eng2 をドメイン A に割り当てる

```
sc0:sms-user:>addtag -d A -q eng2
```

この例では、タグがまだ設定されていない場合に、タグ eng2 をドメイン A に割り当てます。タグが設定されている場合は、このコマンドを実行しても変更されません。プロンプトは表示されません。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

deletetag(1M)

cancelcmdsyc(1M)

名前	cancelcmdsyc - コマンド同期コマンド
形式	cancelcmdsyc <i>cmdsyc_descriptor</i> initcmdsyc <i>script_name</i> [<i>parameters</i>] savecmdsyc -M <i>identifier</i> <i>cmdsyc_descriptor</i> [cancel init save]cmdsyc -h
機能説明	<p>これらのコマンド同期コマンドはともに機能し、システムコントローラ (SC) のフェイルオーバーによって中断されたユーザー定義のスキプトの回復を制御します。コマンドを同期化するには、ユーザー定義のスキプトに次のコマンドを挿入します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ <code>initcmdsyc</code> は、回復するスキプトを特定するための、コマンド同期記述子を作成します。 この記述子は、コマンド同期リストの中に定義されます。このリストは、フェイルオーバーが発生した後で、新しいメインの SC で再起動するスキプトとコマンドを特定します。■ <code>savecmdsyc</code> は、フェイルオーバーが発生した後で、スキプト内のどの場所から処理を再開するかを特定するためのマーカーを追加します。■ <code>cancelcmdsyc</code> は、コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除します。これによって、スキプトは 1 度だけ実行され、それ以降のフェイルオーバーの後には実行されません。 <p>コマンド同期リストから記述子を削除するために、スキプトのすべての出力先には、必ず 1 つの <code>cancelcmdsyc</code> シーケンスを定義します。記述子が削除されていない場合にフェイルオーバーが発生すると、スキプトは、新しいメイン SC 上で実行されます。</p> <hr/> <p>注 - <code>initcmdsyc</code> と <code>cancelcmdsyc</code> のシーケンスは、コマンドが同期化されるように必ず 1 つのスキプトに定義します。<code>savecmdsyc</code> はオプションのコマンドで、スキプト内の場所をマークして処理を再開する場所を特定する場合のみ使用します。特別な再開ポイントが必要ない場合は、代わりに <code>runccmdsyc(1M)</code> を使用することもできます。</p> <hr/>

オプション

次のオプションがサポートされています。

<i>cmdsync_descriptor</i>	コマンド同期記述子 (ユーザー定義スクリプトを指定する記述子) を表します。この記述子は、 <code>initcmdsync</code> コマンドの標準の出力値として返されます。
<code>-h</code>	ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。`-h` に追加して指定されたオプションは無視されません。

<code>-M identifier</code>	フェイルオーバーの後に、スクリプトを再開する場所を指定します。この記述子は、正の整数とします。
<i>parameters</i>	ユーザー定義スクリプトに関連するオプションまたはパラメータを表します。これらのパラメータは、スเปア SC に格納されており、フェイルオーバーの後で指定されたスクリプトを再起動する際に使用します。
<i>script_name</i>	同期的に処理されるユーザー定義スクリプトの名前を表します。

cancelcmdsync(1M)

拡張機能説明

コマンド同期コマンドは、ユーザー定義スクリプト内の特定の論理ポイントに挿入します。

たとえば、**Korn** シェルスクリプトは、以下のようになります。

```
# MAIN CODE STARTS HERE
# Be sure to use a cleanup procedure to handle any
# interrupts.
# Use the cancelcmdsync to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command
# will get restarted on the new main SC.
#
clean_up () {
    cancelcmdsync $desc
    exit
}

# Declare the clean_up function to capture system signals
# and cleanup.
trap "clean_up" INT HUP TERM QUIT PWR URG
goto_label=1
# Process the arguments, capturing the -M marker point
# if provided
#
for arg in $*; do
    case $arg in
        -M )
            goto_label=$arg;;
        .
        .
        .
    esac
done
# Place this script and all its parameters in the command
# synchronization list, which indicates the commands to
# be restarted after an SC failover.
#
# NOTE: The script must be executable by the user defined
# in fomd.cf and reside in the same directory on both the
# main and the spare SC.
```

cancelcmdsync(1M)

```
# If the command is not part of the defined PATH for
# the user, the absolute filename must be passed with the
# initcmdsync command
#
initcmdsync script_name parameters
# The marker point is stored in the goto_label variable.
# Keep executing this script until all cases have been
# processed or an error is detected.
#
while (( $goto_label != 0 )) ; do
#
# Each case should represent a synchronization point
# in the script.
#
case $goto_label in
#
# Step 1: Do something
#
1 )          do_something
              .
              .
              .

# Execute the savecmdsync command with the script's
# descriptor and a unique marker to save the position.
# If a failover occurs here, the commands represented in
# the next goto_label (2) will be resumed.
#
              savecmdsync -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
              goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
              ;;

#
# Step 2: Do more things
#
2 )          do_more_things
              .
              .
              .
              savecmdsync -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
              goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
              ;;

#
# Step 3: Finish the last step and set the goto_label to 0
# so that the script ends.
3 )
              finish_last_step
              .
              .
              .
              goto_label=0
              ;;

        esac
done
# END OF MAIN CODE
# Remember to execute cancelcmdsync to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command will be restarted
# after the failover.
#
cancelcmdsync $desc
```

cancelcmdsync(1M)

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

注 - `initcmdsync` の標準出力には、コマンド同期記述子が含まれていません。(フェイルオーバーが終了した場合や、単一の SC 環境などでフェイルオーバーが使用できない場合は、同期コマンドが含まれているスクリプトでは、プラットフォームのログファイルに対してエラーメッセージを生成し、ゼロ以外の終了コードを返します。これらのメッセージは無視することもできます。

属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

`runcmdsync(1M)`, `showcmdsync(1M)`

注意事項

(同期コマンドを使用した) ユーザー定義スクリプトの例は、`/opt/SUNWSMS/examples/cmdsync` ディレクトリに保存されています。

名前	console - ドメインコンソールへのアクセス
形式	console -d <i>domain_id</i> \ <i>domain_tag</i> [[-f] [-l] [-g] [-r]] [-e <i>escapeChar</i>] console -h
機能説明	<p>console(1M) は、指定されたドメイン (<i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i>) に対するコマンドを実行するウィンドウ「コンソールウィンドウ」を作成して、ドメインの仮想コンソールドライバへ遠隔接続します。1つのドメインに対して複数の console コマンドを同時に接続することもできますが、書き込み権は1つの console のみが所有し、その他のコマンドは読み取り専用になります。書き込み権は、「ロック」または「ロック解除」のいずれかのモードになります。</p> <p>オプションを指定しないで console を呼び出すと、排他的な「ロックされた書き込み」モード (オプション -f) の状態になります。排他的なセッションでは、ドメイン仮想コンソールから他のセッションが強制的に切り離されます。</p> <p>ロックされた書き込みモードでは、安全性が高くなります。このモードは、console -f を使用して他のコンソールが開かれた場合、または実行中の他の console ウィンドウから ~* が入力された場合に解除されます。これらの2つの場合には、新しい console セッションが排他セッションになります。</p> <p>ロック解除された書き込み権は、ロックされた書き込みに比べて安全性が低くなります。このモードは、console -g、console -l または console -f、を使用して別の console コマンドが開始された場合、あるいは別のコンソールウィンドウから ~@、~& または ~* が入力された場合に解除されます。</p> <p>console は、IOSRAM、またはドメインに対するネットワークパスを使用して、ドメインコンソールと通信します。~= (チルドおよび等号記号) のコマンドを使用して、通信パスを手動で切り替えることができます。ネットワークが使用できなくなり、console セッションがハングしたと思われる場合は、通信パスを手動で切り替えると有効です。</p> <p>チルドコマンドは「拡張機能説明」で説明します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p>

- `-d domain_tag` addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。
- `-e escapeChar` デフォルトのエスケープ文字を設定します。エスケープ文字を「escapeCharacter」に変更します。デフォルトは~(チルド)です。

有効なエスケープ文字は次のものを除く任意の文字です。

```
# @ ^ & ? * = . |
```

「使用法」セクションの rlogin の「注意事項」を参照してください。

- `-f` 強制オプション (デフォルト)。ドメインコンソールウィンドウを「ロックされた書き込み」特権でオープンし、オープンしている他のセッションをすべて終了し、新しいセッションがオープンされないようにします。これにより、セッションが排他になります。このコマンドは、(専用にデバッグを行う場合など) コンソールを排他的に使用する場合のみ使用します。

多重セッションモードを復元するには、ロックを開放 (~^) するか、または、コンソールセッションを終了 (~.) します。

- `-g` グラブオプション。コンソールウィンドウを「ロック解除された書き込み」特権でオープンします。他のセッションが「ロック解除された書き込み」特権を持っている場合は、そのセッションは読み取り専用になります。他のセッションが「ロック」特権を持っている場合は、この要求は拒否され、コンソールウィンドウは読み取り専用でオープンします。

- `-h` ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。

- `-l` ロックオプション。コンソールウィンドウを「ロックされた書き込み」特権でオープンします。他のセッションが「ロック解除された書き込み」特権を持っている場合は、そのセッ

セッションは読み取り専用になります。他のセッションが「ロック」特権を持っている場合は、この要求は拒否され、コンソールウィンドウは読み取り専用でオープンします。

`-r` コンソールウィンドウを読み取り専用モードでオープンします。

拡張機能説明

使用法

ドメインコンソールウィンドウでは、行の先頭文字として現れるチルド (~) は、console が特別な処理を行うためのエスケープ記号とみなされます。具体的には、次のものがあります。

- ~? ステータスメッセージ
- ~.console セッションの切断
- ~# OpenBoot PROM または kadb ヘブレーク
- ~@ ロック解除された書き込み特権の取得 (-g を参照)
- ~^ 書き込み権を開放する
- ~= ネットワークと IOSRAM インタフェース間の通信パスを切り替えます。~= はプライベートモードでのみ使用できます (~* を参照)。
- ~& ロックされた書き込み特権を取得します (-l を参照)。この信号は、読み取り専用、またはロック解除された書き込みのセッションでのみ実行することができます。
- ~* ロックされた書き込み特権を取得し、オープンしている他のセッションをすべて終了して、新しいセッションがオープンしないようにします (-f を参照)。多重セッションモードを復元するには、ロックを開放するか、またはこのセッションを終了します。

注 - rlogin は、チルド が新しい行の先頭で使用されている場合でも、チルド・エスケープのシーケンスを処理します。行の先頭でチルドシーケンスを送信する必要があり、rlogin を使用する場合は、2つのチルド (最初のチルドはエスケープで、2番目は rlogin に対するチルド) を使用します。もうひとつの方法としては、rlogin の実行中に、行の先頭にチルドを入力しないようにします。

必要なグループ特権

注 - `kill -9` コマンドを使用してコンソールセッションを終了すると、コンソールコマンドが実行されたウィンドウまたは端末は、`raw` モードになり、ハングしたように見えます。このような状況を回避するには、`^j` と入力し、次に `stty sane`、さらに `^j` と入力します。

指定されたドメインについて、ドメイン管理者の特権を持っている必要があります。プラットフォームグループ特権のみを持つユーザーは、ドメインコンソールにアクセスすることはできません。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 - ドメインで、コンソールウィンドウをロックモードでオープンする

```
sc0:sms-user:> console -d a -l
```

注 - ドメインコンソールウィンドウでは、環境変数 `TERM` がコンソールウィンドウと同じ設定になっている場合のみ、`vi(1)` が正しく実行され、エスケープシーケンス (チルドコマンド) が正しく機能します。

たとえば、以下のようになります。

```
sc0:sms-user:> setenv TERM xterm
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、dxs(1M)、kill(1)、rlogin(1)、set(1)、stty(1)、vi(1)、xterm(1M)

dca(1M)

名前	dca - ドメイン構成エージェント
形式	dca -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> [-H <i>hostname</i>] dca -h
機能説明	<p>dca(1M) は、システムコントローラ上の dca と、指定されたドメインのドメイン構成サーバー (dcs) との通信メカニズムを提供します。dca には、遠隔の動的な再構成コマンドに関する通信サービスが用意されています。</p> <p>このエージェントは、ssd(1M) によって自動的に開始されるため、コマンド行から手動で開始しないでください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p>-h ヘルプ。指定した <i>hostname</i> について使用法の説明を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>
ファイル	<p>-H <i>hostname</i> dca に関連付けられているドメインの Solaris のホスト名。</p> <p>このコマンドでは、以下のファイルを使用します。</p> <pre>/var/opt/SUNWSMS/doors/<domain_id>/dca /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr0 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr1 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr2 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr3 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr4 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr5 /var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr6</pre>

```

/var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr7
/var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr8
/var/opt/SUNWSMS/pipes/<domain_id>/scdr9

```

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addboard(1M)、deleteboard(1M)、moveboard(1M)、rcfgadm(1M)

deleteboard(1M)

名前	deleteboard - ドメインからシステムボードの設定を解除し、ドメインから切り離して割り当てを解除
形式	deleteboard [-c <i>function</i>] [-r <i>retry_count</i> [-t <i>timeout</i>]] [-q] [-f] [-y -n] <i>location</i> [<i>location</i>]... deleteboard -h
機能説明	<p>deleteboard(1M) は、ドメインから、割り当てられてアクティブになっている <i>location</i> を削除します。 <i>location</i> のボードは、assigned か connected configured のいずれかの状態になっています。 -c オプションは、現在の設定状態から新しい設定状態へ、ボードの切り替えを指定する場合に使用します。</p> <p>設定状態は、unconfigure、disconnect、unassign のいずれかとなります。 -c オプションを指定しない場合は、デフォルトの設定状態 unassign が使用されます。</p> <p>ドメイン管理者は、ボードの unconfigure や disconnect を行うことができますが、ボードがドメインの使用可能構成要素リストに定義されていない場合は、ドメインからボードの割り当てを解除することはできません。 setupplatform(1M) を参照してください。これは、deleteboard の <i>location</i> フィールドが、ドメインの使用可能構成要素リストに定義されていないことを表しています。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-c <i>function</i></p> <p><i>function</i> の有効な値は、unconfigure、disconnect、または unassign です。 -c オプションは、設定状態の切り替えを制御する場合に使用します。それぞれの機能は、その前の状態に基づいて実行されます。たとえば、unassign は最初に unconfigure (構成解除) を行い、次に unassign (割り当て解除) してから disconnect (切断) を行います。</p>

注 - deleteboard コマンドの実行が失敗しても、対象のボードは実行前の状態には戻りません。dxs エラーメッセージ (または dca エラーメッセージ) がドメインのログに出力されます。発生したエラーが回復可能であれば、コマンドを再試行できます。回復不能な場合、対象のボードを使用するためには、当該ドメインを再起動する必要があります。

有効な切り替え状態とその意味は以下のとおりです。

unconfigure

ドメイン上で稼働している Solaris 環境からボードの構成を解除します。Solaris は、ボード上のすべてのハードウェア資源の使用を停止します。

ボードを connected|unconfigured 状態に切り替えます。これで、システムボードは論理ドメインに割り当てられており、接続されている (active) 状態になります。この状態では、標準のシステムでボード上のハードウェア資源を使用することはできますが、ボードのハードウェア資源は標準の Solaris のデータ構造では表現されないため、Solaris の環境では使用できません。ボード上で使用できる操作は、設定管理に限定されます。

disconnect

ドメイン上で稼働している Solaris 環境からボードの構成を解除します。上記の unconfigure を参照してください。

ボードを disconnected|unconfigured 状態に切り替えます。物理ドメインからボードを削除します。このステップで、ドメインによって UNCLAIM 要求が SC に送信されます。これで、システムボードは論理ドメインに割り当て (assigned) られ、切り離されている (disconnected) 状態になります。これは一時的な状態であり、ソフトウェアによるこの状態の実装は、現時点では存在しません。

unassign

ドメイン上で稼働している Solaris 環境からボードの構成を解除します。上記の `unconfigure` を参照してください。

ボードを切り離します。上記の `disconnect` を参照してください。

ボードの状態を**使用可能** (`available`) に切り替えて、論理ドメインからボードを移動させます。

-f

指定された処理を強制的に実行します。通常、このオプションを指定すると、安全機能がハードウェア側で制御されます。状態の強制的な変更では、条件が `ok` や `unknown` でない占有装置のハードウェア資源を、ハードウェアに基づく安全チェック機能に従って使用することができます。

-h

ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

-n

すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、-q オプションを使用するまで表示されます。

-q

非出力。プロンプトを含むすべての `stdout` へのメッセージを抑制します。

-q を単独で使用すると、すべてのプロンプトに対して -n オプションがデフォルトで定義されます。

-q オプションを -y または -n オプションとともに使用すると、ユーザプロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

`-r retry_count -t timeout`

これらのコマンド引数を使用すると、状態の切り替え中に障害が発生した場合に再試行する回数を指定することができます。 `-r retry_count` オプションは、ドメインによって設定状態の変更が再試行される回数を表します。 `-t timeout` オプションは、次の再試行を行うまでにドメインが待機する時間 (秒) を表します。このオプションは、必ず `retry_count` とともに使用します。デフォルト値は 0 で、これは要求がすぐに再試行されることを意味します。

`-y`

すべてのプロンプトに対して自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、`-q` オプションを使用するまで表示されます。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

`location` ボード位置のリストで、スペースで区切ります。複数の `location` 引数を使用できます。

次の `location` 形式が使用できます。

SB(0..17)

IO(0..17)

注 - ボードタイプを使用する場合は、`showboards(1M)` を使用します。

拡張機能説明

必要なグループ特権

ボードが **割り当て (assigned)** の状態 (つまり実行中のドメインで **アクティブ (active)** になっていない) の場合は、プラットフォーム管理者特権を持っているユーザーのみ `-c unassign` オプションを実行することができます。

ドメイン管理者または設定者特権を持っているユーザーは、自身のドメインについてのみ、このコマンドを実行することができます。ボードの割り当てを解除するには、そのボードがドメインの使用可能構成要素リストに含まれていることが前提になります。

詳細は、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 — ドメインからボードの割り当てを解除する

ドメインから4つのボードの割り当てを解除 (unassign) するには、ユーザーにプラットフォーム管理者特権、ドメイン管理者またはドメイン設定者の特権を付与して、ボードを、ドメイン使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

この例のドメインには、割り当てられている (assigned) 状態のボードがすべて定義されています。

```
sc0:sms-user:> deleteboard -c unassign SB0 IO1 SB1 SB2
```

使用例 2 — ドメインからボードを構成解除する

ドメインから3つのボードを構成解除 (unconfigure) するために、再試行の回数を5回、タイムアウトを3秒に設定します。

```
sc0:sms-user:> deleteboard -r5 -t3 IO3 IO4 IO5
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常終了
- 1 応答なし
- 2 サポートされていない
- 3 操作がサポートされていない
- 4 不正な特権
- 5 ビジー
- 6 システムビジー
- 7 データエラー
- 8 ライブラリエラー
- 9 ライブラリが存在しない
- 10 条件が不十分
- 11 不正
- 12 エラー

- 13 APID が存在しない
- 14 不正な属性
- 30 不正なボード ID タイプ
- 31 不正な特権
- 32 他のドメインに割り当てられている
- 33 特権を取得できない
- 34 ドメインボード情報を取得できない
- 35 アクティブなボード一覧を取得できない
- 36 割り当てられているボード一覧を取得できない
- 37 ブラックリストの取得に失敗
- 38 Solaris が稼働していない
- 56 DR のコマンド構文エラー
- 68 DR 操作の失敗

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addboard(1M)、moveboard(1M)

deletetag(1M)

名前	deletetag - ドメインに関連付けられているドメインタグ名の削除
形式	deletetag -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> [-q] [-y -n] deletetag -h
機能説明	deletetag(1M) は、ドメインに関連付けられているドメインタグを削除します。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
<hr/>	
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
<hr/>	
-n	すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されません。
-q	非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。 単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。 -y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。
-y	すべてのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されません。

拡張機能説明					
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。				
使用例	使用例 1 – 割り当てられているドメインから、タグ「eng2」を削除する sc0:sms-user:> deletetag -d eng2 -qy プロンプトは表示されません。				
終了ステータス	次の終了値が返されます。 0 正常に終了しました。 0 以外 エラーが発生しました。 <i>domain_id</i> にタグが定義されていない場合は、エラーは返されず、 deletetag(1M) は正常に処理されたとみなされます。				
属性	次の属性の説明については、 attributes(5) を参照してください。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	addtag(1M)				

disablecomponent(1M)

名前	disablecomponent - 特定のコンポーネントを指定したブラックリストファイルに追加
形式	disablecomponent [-d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>] [-i "reason"] <i>location</i> [<i>location</i>]... disablecomponent -h
機能説明	<p>disablecomponent(1M) は、ドメインまたはプラットフォームのブラックリストにコンポーネントを追加し、起動できないようにします。</p> <p><i>blacklist</i> は、POST が起動時に使用できないコンポーネントを一覧表示した内部ファイルです。POST はシステムを起動用に準備する前にブラックリストファイルを読み取り、OpenBoot PROM とともに正常にテストが完了したコンポーネントのみのリストを渡します。ブラックリストにあるファイルは除外されます。SMS は、ドメインボード、プラットフォームボード、内部の自動システム回復 (ASR) についての 3 つのブラックリストをサポートしています。</p> <p>オプションを指定せずに disablecomponent を使用して、プラットフォームのブラックリストファイルを編集します。</p> <p>disablecomponent は、ASR ブラックリストファイルで使用することはできません。esmd(1M) のみ、ASR ブラックリストファイルに書き込みすることができます。</p> <p>プラットフォームおよびドメインブラックリストの使用および編集に関する詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 7 章を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。ドメインブラックリストに追加するコンポーネントを指定します。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。ドメインブラックリストに追加するコンポーネントを指定します。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p>

注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。

-i "reason" コンポーネントがドメインブラックリストに追加された理由を簡潔に示します。単一引用符または二重引用符の記号で囲むか、または単一語で記述する必要があります。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

location コンポーネントの場所。次のいずれかの形式で、スラッシュで区切って指定します。

```
board_loc/proc/bank/logical_bank
board_loc/proc/bank/all_dimms_on_that_bank
board_loc/proc/bank/all_banks_on_that_proc
board_loc/proc/bank/all_banks_on_that_board
board_loc/proc
```

```
board_loc/procs
```

```
board_loc/cassette
```

```
board_loc/bus
```

```
board_loc/paroli_link
```

location 引数が複数の場合は、スペースで区切ります。

location 形式は、オプションであり、特定の位置にあるボード上の特定のコンポーネントを指定するために使用されます。

たとえば、*location* が SB5/P0/B1/L1 の場合、SB5 にあるプロセッサ 0 上のバンク 1 の論理バンク1 を示します。*location* が SB0/PP1 の場合、SB0 にあるプロセッサペア 1 を示します。*location* が CS0/ABUS1 の場合、CS0 にあるアドレスバス 1 を示します。

disablecomponent(1M)

次の *board_loc* 形式が使用できます。

SB(0...17)

IO(0...17)

CS(0|1)

EX(0...17)

プロセッサ位置は、単一のプロセッサまたはプロセッサペアを示します。

1 枚の CPU/メモリーボードでは、4 つのプロセッサが使用できます。ボード上のプロセッサペアは、procs 0 と 1、および procs 2 と 3 です。

MaxCPU には、procs 0 と 1、および 1 つのみの proc ペア (PP0) の 2 つのプロセッサがあります。このボードに PP1 を使用すると、disablecomponent が終了し、エラーメッセージが表示されます。

次の *proc* 形式が使用できます。

P(0...3) PP(0|1)

次の *bank* 形式が使用できます。

B(0|1)

次の *logical_bank* 形式が使用できます。

L(0|1)

次の *all_dimms_on_that_bank* 形式が使用できます。

D

次の *all_banks_on_that_proc* 形式が使用できます。

B

次の *all_banks_on_that_board* 形式が使用できます。

B

次の *paroli_link* 形式が使用できます。

PAR(0|1)

hsPCI アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

次の *hsPCI* 形式が使用できます。

C(3|5) V(0|1)

バス位置には、アドレス、データおよび応答の 3 つがあります。

次の *bus* 形式が使用できます。

ABUS|DBUS|RBUS (0|1)

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権、ドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権が必要です。プラットフォーム特権を持っている場合は、プラットフォームのコンポーネントに対してのみ、このコマンドを実行することができます。ドメイン特権を持っている場合は、特権を持っているドメインに対してのみこのコマンドを実行することができます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者ガイド』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 — システムボード 1 の CSB 0 とプロセッサ 2 をドメイン A ブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -dA CS0 SB1/P2
```

使用例 2 — システムボード 0 上のプロセッサ 0 にあるバンク 0 の論理バンク 0 をドメイン A のブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -dA SB0/P0/B0/L0
```

disablecomponent(1M)

使用例 3 – システムボード 3 上のプロセッサ 1 にあるバンク 0 のすべての DIMM をドメイン A のブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -dA SB3/P1/B0/D
```

使用例 4 – システムボード 1 上のプロセッサ 0 のすべてのバンクをドメイン B のブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -dB SB1/P0/B
```

使用例 5 – システムボード 0 上のすべてのバンクをドメイン D のブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -dD SB0/B
```

使用例 6 – プラットフォームブラックリストにシステムボード 3 のプロセッサペア 1 を追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent SB3/PP1
```

使用例 7 – IO ボード 6 の 5V スロット 0 内の hsPCI カセットをドメイン A ブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -dA IO6/C5V0
```

使用例 8 – wPCi ボード 7 上の Paroli Link 0 をプラットフォームブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent IO7/PAR0
```

使用例 9 – EX9 の データバス CS0 をドメイン A ブラックリストに追加する

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -dA EX9/DBUS0
```

使用例 10 – システムボード 1 の CSB 0 とプロセッサ 2 をドメイン A ブラックリストに追加する (アップグレードが予定されているため)

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -dA -i upgrade CS0 SB1/P2
```

使用例 11 – システムボード 3 のプロセッサペア 1 をプラットフォームブラックリストに追加する (サービスが必要なため)

```
sc0:sms-user:>disablecomponent -i "Needs service" SB3/PP1
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/etc/opt/SUNWSMS/config/platform/blacklist

除外されるプラットフォームコンポーネントの一覧。

/etc/opt/SUNWSMS/config/domain_id/blacklist

除外されるドメインコンポーネントの一覧。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addboard(1M)、enablecomponent(1M)、esmd(1M)、showcomponent(1M)

dsmd(1M)

名前	dsmd – ドメインの状態監視デーモン
形式	dsmd
機能説明	<p>dsmd(1M) は、最大 18 個のドメインの状態およびオペレーティングシステム (OS) のハートビートを監視します。</p> <p>dsmd はドメインを自動的に回復し、ドメインに関するハードウェアエラーを処理します。ドメインが停止すると、dsmd はドメインに対して <code>reset(1M)</code> を実行し、CPU レジスタとハードウェアの設定ダンプを収集し、2 つのファイルに保存します。</p> <p>ドメインの状態変化はすべて監視されており、メッセージレベルが INFO のものはドメイン特有のログファイルに記録されています。その他のメッセージレベルのものは、状態変化について記録されません。</p> <p>このデーモンは、<code>ssd(1M)</code> デーモンによって自動的に開始されます。コマンド行から手動で開始しないでください。</p>
拡張機能説明	<p>dsmd は以下のイベントを記録し、そのイベントが発生した場所からの回復を試行します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ ドメインの起動に失敗■ エラーのリセット■ Solaris のハング■ ドメインパニック■ ドメインのリセットまたは再起動■ DStop■ 起動/パニック/<code>error_reset_sync</code> タイムアウト <p>dsmd クライアントには、以下の内容が含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none">■ <code>dxs(1M)</code> — ドメイン X サーバーデーモン■ <code>efe</code> — Sun Management Center デーモン■ <code>osd(1M)</code> — OpenBoot PROM デーモン■ <code>pcd(1M)</code> — プラットフォームの設定データベースデーモン■ <code>esmd(1M)</code> — 環境状態の監視デーモン <p>dsmd は、以下のクライアントです。</p> <ul style="list-style-type: none">■ <code>hwad(1M)</code> — ハードウェアアクセスデーモン

■ setkeyswitch(1M) — 仮想キースイッチ制御コマンド

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』を参照してください。

ファイル

次のファイルがサポートされています。

/etc/opt/SUNWSMS/startup/ssd_start

ssd 用のデフォルトの起動

/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/

メッセージファイルと hpost ダンプファイルを格納する

/var/opt/SUNWSMS/SMS/adm/domain_id/post/

dstop およびハードウェア設定ダンプファイルを格納する

/export/home/sms-user/xir_dump/

すべてのドメインに関する xir ダンプファイルを格納する

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

dxs(1M)、esmd(1M)、hwad(1M)、osd(1M)、pcd(1M)、reset(1M)、setkeyswitch(1M)、ssd(1M)

dxs(1M)

名前	dxs - ドメイン X サーバー				
形式	dxs [-S] -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>				
機能説明	<p>dxs(1M) は、ドメインに対するソフトウェアサポートを提供します。具体的には、仮想コンソール機能、動的再構成メールボックスサポート、および PCI メールボックスサポートが含まれています。メールボックスサポートでは、ドメインドライバの要求とイベントを処理します。仮想コンソール機能によって、コンソールプログラムを実行している 1 人、または複数のユーザーが、ドメインの仮想コンソールにアクセスできるようになります。</p> <p>ドメインと Solaris が稼働中の場合は、dxs は、ドメインのコンソールおよびドライバ (cvcd) と、稼働中のコンソールウィンドウの中継として機能します。ドメインで Solaris が稼働していない場合は、dxs は、OpenBoot PROM と、実行中のコンソールウィンドウの中継として機能します。</p> <p>ドメイン X サーバーは、ssd(1M) デーモンによって、それぞれのアクティブなドメインに対して自動的に開始されます。コマンド行から手動で開始しないでください。ドメインが停止すると、ドメインの dxs は終了します。</p>				
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p>-S コンソールの出力ログを使用不可にします。デフォルトでは、ログは使用可能で、<code>/var/opt/SUNWSMS/adm/<i>domain_id</i>/console</code> ファイルに書き込まれます。</p>				
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				

dxs(1M)

関連項目

addtag(1M)、 console(1M)、 ssd(1M)

enablecomponent(1M)

名前	enablecomponent – 指定したブラックリストから特定のコンポーネントを削除
形式	enablecomponent [-a -d <i>domain_tag</i> <i>domain_id</i>] <i>location</i> [<i>location</i>]... enablecomponent -h
機能説明	<p>enablecomponent(1M) は、プラットフォーム、ドメイン、または ASR のブラックリストからコンポーネントを削除し、起動できるようにします。</p> <p><i>blacklist</i> は、POST が起動時に使用できないコンポーネントを一覧表示した内部ファイルです。POST はシステムを起動用に準備する前にブラックリストファイルを読み取り、OpenBoot PROM とともに正常にテストが完了したコンポーネントのみのリストを渡します。ブラックリストにあるファイルは除外されます。SMS は、ドメインボード、プラットフォームボード、内部の ASR についての 3 つのブラックリストをサポートしています。</p> <p>ASR <i>blacklist</i> は、環境の条件によって esmd がコンポーネントの電源を切断したときに、esmd で作成される内部ファイルです。電源ライブラリおよび SMS コマンドが不正なコンポーネントをオンに設定しないようにする場合にも、ASR ブラックリストを使用します。</p> <p>オプションを指定しないで enablecomponent を使用すると、プラットフォームブラックリストを編集することができます。</p> <p>特定のコンポーネントがブラックリストに定義されているかどうかを表示するには、showcomponent(1M) を使用します。</p> <p>プラットフォームとドメインのブラックリストの使用と編集に関する詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-a ASR ブラックリストから削除するコンポーネントを指定します。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID。有効な <i>domain_id</i> は A ~ R で、大文字と小文字は区別されません。ドメインブラックリストから削除するコンポーネントを指定します。</p>

- `-d domain_tag` addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。ドメインブラックリストから削除するコンポーネントを指定します。
- `-h` ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

location コンポーネントの場所。次のいずれかの形式で、スラッシュで区切って指定します。

board_loc/proc/bank/logical_bank
board_loc/proc/bank/all_dimms_on_that_bank
board_loc/proc/bank/all_banks_on_that_proc
board_loc/proc/bank/all_banks_on_that_board
board_loc/proc

board_loc/procs

board_loc/cassette

board_loc/bus

board_loc/paroli_link

location 引数が複数の場合は、スペースで区切ります。

location 形式は、オプションであり、特定の位置にあるボード上の特定のコンポーネントを指定するために使用されます。

たとえば、*location* が SB5/P0/B1/L1 の場合、SB5 にあるプロセッサ 0 上のバンク 1 の論理バンク 1 を示します。

location が SB0/PP1 の場合、SB0 にあるプロセッサペア 1 を示します。*location* が CS0/ABUS1 の場合、CS0 にあるアドレスバス 1 を示します。

enablecomponent(1M)

次の *board_loc* 形式が使用できます。

SB(0...17)

IO(0...17)

CS(0|1)

EX(0...17)

プロセッサ位置は、単一のプロセッサまたはプロセッサペアを示します。

1枚のCPU/メモリーボードでは、4つのプロセッサが使用できます。ボード上のプロセッサペアは、procs 0 と 1、および procs 2 と 3 です。

MaxCPU には、procs 0 と 1、および 1 つのみの proc ペア (PP0) の 2 つのプロセッサがあります。このボードに PP1 を使用すると、disablecomponent が終了し、エラーメッセージが表示されます。

次の *proc* 形式が使用できます。

P(0...3) PP(0|1)

次の *bank* 形式が使用できます。

B(0|1)

次の *logical_bank* 形式が使用できます。

L(0|1)

次の *all_dimms_on_that_bank* 形式が使用できます。

D

次の *all_banks_on_that_proc* 形式が使用できます。

B

`enablecomponent(1M)`

次の `all_banks_on_that_board` 形式が使用できます。

B

次の `paroli_link` の形式が使用できます。

PAR(0|1)

hsPCI アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

次の `hsPCI` 形式が使用できます。

C(3|5)V(0|1)

バス位置には、アドレス、データおよび応答の 3 つがあります。

次の `bus` 形式が使用できます。

ABUS|DBUS|RBUS (0|1)

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権、ドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権が必要です。プラットフォーム特権を持っている場合は、プラットフォームのコンポーネントに対してのみ、このコマンドを実行することができます。ドメイン特権を持っている場合は、特権を持っているドメインに対してのみこのコマンドを実行することができます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 – ASR ブラックリストから CSB0 を削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -a CS0
```

使用例 2 – システムボード 0 上のプロセッサ 0 にあるバンク 0 の論理バンク 0 をドメイン A のブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA SB0/P0/B0/L0
```

enablecomponent(1M)

使用例 3 –システムボード 3 上のプロセッサ 1 にあるバンク 0 のすべての DIMM をドメイン A のブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA SB3/P1/B0/D
```

使用例 4 –システムボード 1 上のプロセッサ 0 のすべてのバンクをドメイン B のブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dB SB1/P0/B
```

使用例 5 –システムボード 0 上のすべてのバンクをドメイン D のブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dD SB0/B
```

使用例 6 –プラットフォームブラックリストから入出力ボード 7 のプロセッサペア 0 を削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent IO7/PP0
```

使用例 7 –ドメイン A ブラックリストからシステムボード 3 のプロセッサ 1 を削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA SB3/P1
```

使用例 8 –ドメイン A ブラックリストから入出力ボード 6 の 3V スロット内の hsPCI カセットを削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA IO6/C3V0
```

使用例 9 –wPCi ボード 5 上の Paroli Link 0 をプラットフォームブラックリストから削除する

```
sc0:sms-user:> disablecomponent IO7/PAR0
```

使用例 10 –ドメイン A ブラックリストから EX7 のアドレスバス CS0 を削除する

```
sc0:sms-user:> enablecomponent -dA EX7/ABUS0
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist

esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。

注 - このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。

/etc/opt/SUNWSMS/config/platform/blacklist

除外されるプラットフォームコンポーネントの一覧。

/etc/opt/SUNWSMS/config/domain_id/blacklist

除外されるドメインコンポーネントの一覧。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addboard(1M)、disablecomponent(1M)、esmd(1M)、showcomponent(1M)

esmd(1M)

名前	esmd – 環境状態監視デーモン
形式	esmd
機能説明	<p>esmd(1M) は、システムキャビネットの環境条件 (電圧、温度、ファントレイ、電源装置など) を監視します。esmd は異常な条件を記録し、必要に応じて処置を行い、ハードウェアを保護します。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に開始されます。コマンド行から手動で開始しないでください。</p>
拡張機能説明	<p>esmd は、次のボードが条件の範囲外かどうかを監視します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ CPU ボード■ MaxCPU ボード■ HPCI ボード■ エキスパンダボード■ センタープレーンサポートボード■ SC 制御ボード■ SC I/O■ ファン制御ボード■ 電源装置 (バルク) <p>esmd は次のイベントを認識し、適切なクライアントまたはデーモンを警告します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ コンポーネントの挿入— あるポーリングサイクルから次のポーリングサイクルへ、コンポーネントの存在を通知します。クライアント (hwad(1M)、pcd(1M)、dsmd(1M) など) が特定のコンポーネントタイプに対する通知を要求すると、esmd は通知を送信します。■ コンポーネントの削除— あるポーリングサイクルから次のポーリングサイクルへ、コンポーネントの欠如を通知します。クライアント (hwad、pcd、dsmd など) が特定のコンポーネントタイプに対する通知を要求すると、esmd は通知を送信します。■ PCI カード挿入— PCI カードが PCI ボードに挿入された場合に通知します。■ PCI カードの削除— PCI ボードから PCI カードが削除された場合に通知します。■ ボードの電源切断— ボードの電源が切断された場合、または (以前はオンになっていた電源が) オフになった場合に通知します。

- ボードの電源投入— ボードの電源が投入された、または (以前はオフになっていた電源が) オンになった場合に通知します。
- ボードの温度変化— ボードの温度センサーが 2 度の差を記録した場合、または温度のしきい値に達した場合に通知します。
- ボードの電圧変化— 電圧センサーの値が変化して、範囲外のしきい値に近づいた場合、または新しい値が範囲外の場合に通知します。この場合には、esmd は、ドメインからボードを削除し、電源を切ります。
- ボードの電流変化— 監視されているボードの電流値が変化した場合に通知します。
- CSB の状態変化— 監視されている CBS ボードのプロパティが変化した場合に通知します。
- EXB 状態変化— 監視されている EXB ボードのプロパティが変化した場合に通知します。
- CPU 状態変化— 監視されている CPU ボードのプロパティが変化した場合に通知します。
- 大量電源状態変化— 大量電源装置のプロパティが変化した場合に通知します。
- ファントレイ状態変化—監視されているファントレイのプロパティが変化した場合に通知します。
- PCI カード状態変化—監視されている PCI カードのプロパティが変化した場合に通知します。

esmd クライアントには以下のものが含まれています。

- hwad — ハードウェアアクセスのデーモン
- pcd — プラットフォーム設定データベースのデーモン
- dsmd — ドメイン状態の監視デーモン

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』を参照してください。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

esmd(1M)

ファイル

次のファイルがサポートされています。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages`

メッセージファイルの格納

属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

`dsmd(1M)`、`hwad(1M)`、`pcd(1M)`、`ssd(1M)`

名前	flashupdate - CPU ボード、MaxCPU ボード、およびシステムコントローラ (SC) 上のフラッシュ PROM を更新
形式	<pre>flashupdate [-d domain_id domain_tag] -f path [-q] [-y -n]</pre> <pre>flashupdate [-f path] [-y -n] location [location...]</pre> <pre>flashupdate -h</pre>
機能説明	<p>flashupdate(1M) は、システムコントローラ (SC) のフラッシュ PROM を更新し、ドメインの CPU および MaxCPU ボード、特定のボード位置を更新します。</p> <p>システムコントローラのフラッシュ PROM を更新するには、更新する SC にログインし、フラッシュ PROM を更新するように指定します。それぞれのフラッシュ PROM には、関連付けられている固有のイメージファイルがあります。SC フラッシュ PROM の更新が完了した後、いったんシャットダウンして、SC をリセットする必要があります。後述する使用例 7 を参照してください。CPU のフラッシュ PROM の更新後に、SC をリセットする必要はありません。</p> <p>CPU のフラッシュ PROM を更新する場合、SMS が起動しており、かつ指定されたボードの電源が投入されている必要があります。SC フラッシュ PROM を更新する場合は、この必要はありません。ドメインの CPU または MaxCPU ボードで、secure 位置に仮想キースイッチの設定が定義されている場合は、フラッシュ PROM は更新されません。</p> <p>flashupdate は、更新の前に、現在のフラッシュ PROM およびフラッシュイメージファイルの情報を表示します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><code>-d domain_id</code> ドメインの ID です。有効な <code>domain_id</code> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><code>-d domain_tag</code> <code>addtag(1M)</code> を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p><code>-f path</code> フラッシュイメージファイルの名前。</p> <p><code>path</code> 引数は、イメージファイルの名前を指定します。これは、<code>location</code> 引数で指定されるフラッシュ PROM の更新で使用されます。</p>

-h ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま
す。

-n すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、
-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

-q 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制し
ます。

単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して
-n オプションを指定します。

-y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、
-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに
基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。

-y すべてのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、
-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

location フラッシュ PROM の位置。

フラッシュ PROM の位置は、スラッシュで区切られた形式の
board_loc/FlashPROM_id で構成されます。

FlashPROM_id は、CPU ボードおよびシステムコントローラ
(SC) 上の特定のフラッシュ PROM (FP0 または FP1) を更新す
る場合のみ指定します。

たとえば、SB4/FP0 という位置は、スロット 4 の CPU ボード
上のフラッシュ PROM 0 を表します。

次の *board_loc* 形式が使用できます。

SB(0..17)

IO(0..17)

SC(0-1)

FlashPROM_id を以下のような形式で 사용할 수 있습니다.

FP(0|1)

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権またはドメイン管理者特権が必要です。プラットフォーム管理者特権を持っている場合は、すべてのボードを更新することができます。ドメイン管理者の特権を持っている場合は、管理者のドメインでアクティブまたは使用可能になっているボードのみ更新できます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。

使用例

使用例 1 – システムコントローラ 0 のフラッシュ PROM を更新する
このコマンドの実行後、SC をリセットする必要があります。

```
sc0:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/firmware/SCOBPimg.di SC0/FP0
```

使用例 2 – システムコントローラ 0 のフラッシュ PROM 1 を更新する
このコマンドの実行後、SC をリセットする必要があります。

```
sc0:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/firmware/SSCPOST.di SC0/FP1
```

使用例 3 – システムコントローラ 1 のフラッシュ PROM 0 を更新する
このコマンドの実行後、SC をリセットする必要があります。

```
sc1:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/firmware/SCOBPimg.di SC1/FP0
```

使用例 4 – slot0 ボードのフラッシュ PROM 0 を更新する
SMS が起動しており、かつ SB0/FP0 ボードの電源が投入されている必要があります。

```
sc0:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/hostobjs/sgcpu.flash SB0/FP0
```

使用例 5 – CPU ボード 17 の両方のフラッシュ PROM を更新する
SMS が起動しており、かつ SB17 ボードの電源が投入されている必要があります。

```
sc0:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/hostobjs/sgcpu.flash SB17
```

使用例 6 – ドメイン A のフラッシュ PROM を更新する

SMS が起動しており、かつドメイン A の CPU ボードの電源が投入されている必要があります。

```
sc0:sms-user:>flashupdate -d A -f /opt/SUNWSMS/hostobjs/sgcpu.flash
```

使用例 7 – SC PROM 更新後に SC をリセットする

スーパーユーザーになり、SC をシャットダウンします。

```
sc0:sms-user:>su -
sc0:# shutdown -y -g0 -i0
...[システムメッセージ]
ok
```

新しいファームウェアを SC で有効にするには、ここで SC をリセットする必要があります。

次のコマンドを入力します。

```
ok reset-all
```

このコマンドを実行しても SC がリセットされない場合、SC をハードリセットする必要があります。

Sun Fire 15K の筐体を開いてシステムコントローラを見つけ、SC ボード上にある Abort ボタンを押し、続いて Reset ボタンを押してください。

SC をリセットすると、新しいバージョンのファームウェアがロードされたことを示す OpenBoot PROM メッセージが表示されます。

システムが ok プロンプトを表示した状態に戻れば、flashupdate が実行されています。次のコマンドを入力します。

```
ok show-dropins
```

```
Dropins for Flash device: /pci@1f,0/pci@1,1/ibus@1/flashprom@10,400000
-----
Dropin name      Size Checksum Date      Date      Version Vendor
                   created   flashed
-----
SSCOBP-dropins   90      c84e   11/13/2001 11/13/2001  1.2  SUNW,sscobp
....
....
```

ドロップインのバージョン番号 (1.2) を確認します。

新たにインストールした Solaris ソフトウェアを起動できます。次のコマンドを入力します。

```
ok boot new disk
```

プラットフォーム管理者としてログインし、次のコマンドを入力します。

```
sc1:sms-user:>flashupdate -f /opt/SUNWSMS/firmware/SCOBPimg.di SC0/FP0
```

```
Current SC FPRM Information
```

```
=====
```

```
SC at SC0, FPRM 0:
```

```
Name: SSCOBP-dropins, Version: 1.2
```

```
Size: 144, Check Sum: 51278
```

```
Date Flashed: 11/13/01
```

```
Date Created: 11/13/01
```

```
Do you wish to update the SC User FPRM (yes/no)? n
```

```
sc1:sms-user:
```

バージョン番号を比較します。バージョン番号が同じであれば、flashupdate は正常に実行されたこととなります。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

このコマンドでは、以下のファイルを使用します。

```
/opt/SUNWSMS/firmware/SCOBPimg.di
```

SC 上のフラッシュ PROM 0 を更新する場合に使用します。

```
/opt/SUNWSMS/firmware/SSCPOST.di
```

SC 上のフラッシュ PROM 1 を更新する場合に使用します。

```
/opt/SUNWSMS/hostobjs/sgcpu.flash
```

CPU および MaxCPU ボード上のフラッシュ PROM を更新する場合に使用します。

flashupdate(1M)

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

setkeyswitch(1M)

frad(1M)

名前	frad – FRU アクセスデーモン				
形式	frad				
機能説明	<p>frad(1M) はシステムコントローラ (SC) 上で稼働し、排他のメカニズムを提供します。デーモンなどの SMS プロセスは、このメカニズムによって、特定の Sun Fire 15K システムの FRU SEEPROM にアクセスします。また、frad は、FRU ID ソフトウェアツールで必要な、プラットフォーム固有のインタフェースを Sun Fire 15K SEEPROM に提供します。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に開始されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>				
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。</p> <table border="1" data-bbox="474 1020 954 1129"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	ssd(1M)				

名前	help – SMS コマンドのヘルプ情報を表示
形式	help [command_name] help -h
機能説明	引数を指定しないで help(1M) を使用すると、有効な SMS コマンドとその構文が表示されます。引数を指定すると、 <i>command_name</i> オペランドは、そのコマンドのマニュアルページを表示します。
オプション	-h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> 注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。 <hr/>
	-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。
オペランド	次のオペランドがサポートされています。 <i>command_name</i> help でマニュアルページを表示する対象となるコマンド。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、ドメイン設定者、またはスーパーユーザーの特権が必要です。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。
使用例	使用例 1 – ヘルプを使用する すべてのコマンドを表示します。 sc0:SMS-USER:>help addtag -d domain_id domain_tag -anew_tag [-q] [-y -n] addboard -d domain_id domain_tag [-c function] [-r retry_count [-t timeout]] [-q] [-y -n]location [location] tmd [-t number]

help(1M)

使用例 2 - コマンドのヘルプを使用する

man(1M) ページを表示します。

```
sc0:sms-user:>help addtag
```

```
Maintenance Commands addtag(1M)
```

NAME

addtag - assign a domain name (tag) to a domain

SYNOPSIS

```
addtag -d domain_id|domain_tag -anew_tag [-q ] [-y | -n] .....
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

man(1M)

名前	hpost – Sun Fire 15K の電源投入時自己診断 (POST) 制御系アプリケーション				
形式	hpost				
機能説明	<p>hpost(1M) は、Sun Fire 15K ドメインのハードウェアをプローブ、テスト、設定し、OpenBoot PROM および Solaris の環境で使用するための準備を行います。代替モードでは、動的再構成 (DR) を使用して、シングルボードを実行中のドメインに接続する準備を行います。また、システムコントローラ (SC) 上にハードウェアの状態ダンプファイルを作成し、重大度の低いエラー状態を消去して、関連する Sun Fire 15K ハードウェアの操作を実行します。</p> <hr/> <p>注 - このアプリケーションは、SMS の他のアプリケーションまたはデーモンでのみ実行することを前提としています。このアプリケーションをコマンド行から直接起動すると、実行中のドメインに障害が発生する可能性があります、このような障害はサポートの対象外となります。</p> <hr/> <p>hpost のクライアントには、以下のものが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ dsmd(1M) ■ dxs(1M) ■ setkeyswitch(1M) <p>hpost は、以下のクライアントです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ hwad(1M) ■ pcd(1M) <p>hpost では、SUNWSMS1p パッケージで提供されているフラッシュ PROM イメージ、およびダウンロード可能なローカル POST 実行可能ファイルが必要です。</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。</p> <table border="1" data-bbox="500 1549 977 1656"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSpo</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSpo
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSpo				
関連項目	dsmd(1M)、hwad(1M)、pcd(1M)、setkeyswitch(1M)、dxs(1M)				

hwad(1M)

名前	hwad - ハードウェアアクセスデーモン				
形式	hwad				
機能説明	<p>hwad(1M) は、排他のメカニズムを提供します。このメカニズムによって、デーモンなどの SMS のプロセスは、ハードウェアのアクセス、制御、監視、および設定を行います。</p> <p>hwad は、メインモードまたはスペアモードで稼働し、フェイルオーバーデーモン (fomd(1M)) に対して、デーモンが発生した際にシステムコントローラ (SC) が果たす役割を要求します。</p> <p>hwad は、起動時にすべてのドライバ (sbbc、echip、gchip、console bus) をオープンし、ioctl1 呼び出しを使用して、これらのドライバとインタフェースをとります。hwad は、デバイスプレゼンスレジスタの内容を読み込んでシステム内にボードが存在することを確認し、クライアントがボードにアクセスできるようにします。</p> <p>hwad には IOSRAM と Mbox のインタフェースも用意されています。これらのインタフェースは、SC とドメイン間の通信をサポートします。動的再構成 (DR) では、hwad は、新しい IOSRAM (トンネルスイッチ) と通信するよう指示します。darb 割り込みでは、hwad は dsmd(1M) に、dstop または rstop があるかどうかを通知します。また、発生した Mbox 割り込みのタイプによって、関連する SMS デーモンを通知します。</p> <p>hwad は、console バスおよび JTAG エラーを検出し、回復します。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。</p> <table border="1"><thead><tr><th>属性タイプ</th><th>属性値</th></tr></thead><tbody><tr><td>Availability</td><td>SUNWSMSop</td></tr></tbody></table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	dsmd(1M)、ssd(1M)				

名前	initcmdsyc - コマンド同期コマンド
形式	<pre>cancelcmdsyc cmdsyc_descriptor initcmdsyc script_name [parameters] savecmdsyc -M identifier cmdsyc_descriptor [cancel init save]cmdsyc -h</pre>
機能説明	<p>これらのコマンド同期コマンドはともに機能し、システムコントローラ (SC) のフェイルオーバーによって中断されたユーザー定義のスキプトの回復を制御します。コマンドを同期化するには、ユーザー定義のスキプトに次のコマンドを挿入します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ <code>initcmdsyc</code> は、回復するスキプトを特定するための、コマンド同期記述子を作成します。 この記述子は、コマンド同期リストの中に定義されます。このリストは、フェイルオーバーが発生した後で、新しいメインの SC で再起動するスキプトとコマンドを特定します。 ■ <code>savecmdsyc</code> は、フェイルオーバーが発生した後で、スキプト内のどの場所から処理を再開するかを特定するためのマーカーを追加します。 ■ <code>cancelcmdsyc</code> は、コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除します。これによって、スキプトは 1 度だけ実行され、それ以降のフェイルオーバーの後には実行されません。 <p>コマンド同期リストから記述子を削除するために、スキプトのすべての出力先には、必ず 1 つの <code>cancelcmdsyc</code> シーケンスを定義します。記述子が削除されていない場合にフェイルオーバーが発生すると、スキプトは、新しいメイン SC 上で実行されます。</p> <hr/> <p>注 - <code>initcmdsyc</code> と <code>cancelcmdsyc</code> のシーケンスは、コマンドが同期化されるように必ず 1 つのスキプトに定義します。<code>savecmdsyc</code> はオプションのコマンドで、スキプト内の場所をマークして処理を再開する場所を特定する場合のみ使用します。特別な再開ポイントが必要ない場合は、代わりに <code>runcmdsync(1M)</code> を使用することもできます。</p> <hr/>

initcmdsyc(1M)

オプション

次のオプションがサポートされています。

- | | |
|--------------------------|--|
| <i>cmdsyc_descriptor</i> | コマンド同期記述子 (ユーザー定義スクリプトを指定する記述子) を表します。この記述子は、 <code>initcmdsyc</code> コマンドの標準の出力値として返されます。 |
| <code>-h</code> | ヘルプ。使用方法を表示します。 |

注 - 単一で使用します。 `-h` に追加して指定されたオプションは無視されません。

- | | |
|----------------------------|---|
| <code>-M identifier</code> | フェイルオーバーの後に、スクリプトを再開する場所を指定します。この記述子は、正の整数とします。 |
| <i>parameters</i> | ユーザー定義スクリプトに関連するオプションまたはパラメータを表します。これらのパラメータは、スペア SC に格納されており、フェイルオーバーの後に指定されたスクリプトを再起動する際に使用します。 |
| <i>script_name</i> | 同期的に処理されるユーザー定義スクリプトの名前を表します。 |

拡張機能説明

コマンド同期コマンドは、ユーザー定義スクリプト内の特定の論理ポイントに挿入します。

たとえば、**Korn** シェルスクリプトは、以下のようになります。

```
# MAIN CODE STARTS HERE
# Be sure to use a cleanup procedure to handle any
# interrupts.
# Use the cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command
# will get restarted on the new main SC.
#
clean_up () {
    cancelcmdsyc $desc
    exit
}

# Declare the clean_up function to capture system signals
# and cleanup.
trap "clean_up" INT HUP TERM QUIT PWR URG
goto_label=1
# Process the arguments, capturing the -M marker point
# if provided
#
for arg in $*; do
    case $arg in
        -M )
            goto_label=$arg;;
        .
        .
        esac
    done
# Place this script and all its parameters in the command
# synchronization list, which indicates the commands to
# be restarted after an SC failover.
#
# NOTE: The script must be executable by the user defined
# in fomd.cf and reside in the same directory on both the
# main and the spare SC.
```

initcmdsyc(1M)

```
# If the command is not part of the defined PATH for
# the user, the absolute filename must be passed with the
# initcmdsyc command
#
initcmdsyc script_name parameters
# The marker point is stored in the goto_label variable.
# Keep executing this script until all cases have been
# processed or an error is detected.
#
while (( $goto_label != 0 )) ; do
#
# Each case should represent a synchronization point
# in the script.
#
case $goto_label in
#
# Step 1: Do something
#
1 )          do_something
            .
            .
            .

# Execute the savecmdsyc command with the script's
# descriptor and a unique marker to save the position.
# If a failover occurs here, the commands represented in
# the next goto_label (2) will be resumed.
#
            savecmdsyc -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
            goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
            ;;

#
# Step 2: Do more things
#
2 )          do_more_things
            .
            .
            .
            savecmdsyc -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
            goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
            ;;

#
# Step 3: Finish the last step and set the goto_label to 0
# so that the script ends.
3 )
            finish_last_step
            .
            .
            .
            goto_label=0
            ;;

        esac
done
# END OF MAIN CODE
# Remember to execute cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command will be restarted
# after the failover.
#
cancelcmdsyc $desc
```

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

注 - `initcmdsyc` の標準出力には、コマンド同期記述子が含まれていません。(フェイルオーバーが終了した場合や、単一の SC 環境などでフェイルオーバーが使用できない場合は、同期コマンドが含まれているスクリプトでは、プラットフォームのログファイルに対してエラーメッセージを生成し、ゼロ以外の終了コードを返します。これらのメッセージは無視することもできます。

属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

`runcmdsync(1M)`, `showcmdsync(1M)`

注意事項

(同期コマンドを使用した) ユーザー定義スクリプトの例は、`/opt/SUNWSMS/examples/cmdsync` ディレクトリに保存されています。

kmd(1M)

名前	kmd – SMS キー管理デーモン
形式	kmd
機能説明	<p>kmd(1M) は、システムコントローラ (SC) とドメイン上で稼働しているサーバーとの通信を保証するために必要な IPSec セキュリティー関連付け (SA) を管理します。kmd は、SC 上のクライアントが開始したドメイン上のサーバーへの接続について、ソケットごとのポリシーを管理します。kmd は、ドメイン上のクライアントが開始した SC 上のサーバーへの接続について、共有ポリシーを管理します。</p> <p>現在のデフォルト設定には、ドメイン上の dcs (1M) および cvcd(1M) サーバーに接続する、SC 上の dca(1M) および dxs(1M) クライアントについての認証ポリシーが含まれています。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p> <hr/> <p>注 – kmd は必ず root プロセスとして実行し、IPSec に対する pf_key インタフェースを使用できるようにします。</p> <hr/>
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>
ファイル	<p>kmd の設定では以下のファイルを使用します。</p> <p>/etc/opt/SUNWSMS/config/kmd_policy.cf</p> <p>kmd_policy.cf は、kmd で管理される共有ポリシーとソケットごとのポリシーを設定します。</p> <p>ポリシーの変更は、SC の kmd_policy.cf ファイルを編集して行います。影響を受けるドメインで、対応する変更を反映させる必要があります。</p>

`kmd_policy.cf` の形式は、パイプ ('|') 文字で区切られた 8 つのフィールドから構成されるテーブルです。フィールドは、以下のようになります。

```
dir | d_port | protocol | sa_type | auth_alg | encr_alg | domain | login
```

フィールドの定義は以下のとおりです。

dir — 接続の方向。有効値は `sctodom` と `domtosc` です。

d_port — 宛先ポート。

protocol — ソケットのプロトコル。有効値は `tcp`、`udp` です。

sa_type — セキュリティー関連付けのタイプ。有効値は `ah`、`esp` です。

auth_alg — 認証のアルゴリズム。有効値は `none`、`md5`、`sha1` です。

encr_alg — 暗号化のアルゴリズム。有効値は、`none`、`des`、`3des` です。

domain — ドメイン ID。有効値は、整数と空白文字です。ドメイン ID を空白にすると、すべてのドメインに適用されるポリシーを定義します。すべてのドメインに適用されるポリシーよりも、特定ドメインのポリシーが優先されます。

login — ログイン名。有効な任意のログイン名を使用できます。

`kmd_policy.cf` ファイルのデフォルトのポリシーは、以下のようになります。

```
sctodom|665|tcp|ah|md5|none| |sms-dca|
sctodom|442|tcp|ah|md5|none| |sms-dxs|
```

ドメインに関するポリシーの設定は、標準 IPsec の構成ファイル (`/etc/inet/ipsecconf.init`) に保存されています。

デフォルトのポリシーは、以下のようになります。

```
{ dport sun-dr } permit { auth_alg md5 }
{ sport sun-dr } apply {auth_alg md5 sa unique }
{ dport cvc_hostd } permit { auth_alg md5 }
{ sport cvc_hostd } apply {auth_alg md5 sa unique }
```

kmd(1M)

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSr, SUNWSMSop

関連項目

ssd(1M)、sckmd(1M)、ipsecconf(1M)、pf_key(1M)、ipsec(1M)、
dca(1M)、dxs(1M)、dcs(1M)、cvcd(1M)

名前	mand – 管理ネットワークデーモン
形式	mand
機能説明	<p>mand(1M) は、必要なネットワーク構成を提供することによって、管理ネットワーク (MAN) ドライバおよびフェイルオーバー管理デーモン (fomd(1M)) をサポートします。この構成情報には、ホスト名、IP アドレス、およびネットワークマスクが含まれています。mand は、プラットフォーム構成データベース (pcd(1M)) デーモンの各フィールド、およびシステムコントローラ (SC) の MAN ドライバを初期化・更新することもできます。</p> <p>mand は、メイン SC とスペア SC の両方で実行される SMS デーモンです。mand の役割は fomd によって設定されます。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>
拡張機能説明	<p>SC-to-Domain および Domain-to-SC Internal Network (I1) データには、以下のものが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークマスク ■ SC ホスト名 ■ SC IP アドレス ■ ドメイン [A-R] IP ホスト名 ■ ドメイン [A-R] IP アドレス <p>SC-to-SC internal Network (I2) データには、以下のものが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワークマスク ■ SC 0 ホスト名 ■ SC 0 IP アドレス ■ SC 1 ホスト名 ■ SC 1 IP アドレス <p>SC External Community (C) データには、以下のものが含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ コミュニティーフェイルオーバー IP アドレス ■ コミュニティー物理インタフェース名

mand(1M)

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

シグナル

次のシグナルが使用されています。

SIGHUP MAN.cf ファイルを再読み取りし、外部コミュニティー、およびpcdのネットワークフィールドを再構成します。

ファイル

以下の構成ファイルが必要です。

/etc/opt/SUNWSMS/config/MAN.cf

このファイルには、domain-to-SC、SC-to-domain、SC-to-SCの管理ネットワークデータ、およびSCへ外部アクセスするためのコミュニティーデータが含まれています。

MAN.cf ファイルは手動で変更しないでください。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

fomd(1M)、pcd(1M)、smsconfig(1M)、ssd(1M)

名前	mld - メッセージロギングデーモン
形式	mld [-f <i>config_file</i>] [-t]
機能説明	<p>mld(1M) は、SMS のすべてのデーモンに対するロギングサービスを提供します。mld は、ssd(1M) によって開始される SMS の最初のデーモンで、SMS の他のすべてのデーモンの出力を取得し、それらの起動フェーズで処理を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ プラットフォームログメッセージは、以下の場所に格納されています。 <ul style="list-style-type: none"> <code>/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages</code> <p>形式は以下のとおりです。</p> <p><i>time host program [pid]:[msg_id hrtime_t level file_line] message</i></p> <p><i>file_line</i> はオプションで、冗長モードの場合のみ示されます。</p> <p>たとえば、以下のようになります。</p> <pre>Feb 2 26 09:16:10 2002 sun15 mld[904]:[209 2345678901 INFO MLDLOGGER.cc 141] Platform messages file created.</pre> ■ ドメインログメッセージは、以下の場所に格納されています。 <ul style="list-style-type: none"> <code>/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/messages</code> <p>形式は、プラットフォームメッセージと同様ですが、pid の後に <i>domain_id domain_tag</i> が付加されています。</p> <p><i>time host program [pid]domain_id domain_tag:[msg_id hrtime_t level file_line] message</i></p> <p>たとえば、以下のようになります。</p> <pre>Feb 2 09:18:55 2002 sun15 mld[904]-B (eng2): [314 2345678902 ERR LogManager.cc 424] message queue limit exceeded, messages will be dropped.</pre>

オプション

- ドメインシスログメッセージは、以下の場所に格納されています。

```
/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/syslog
```

形式は、受信した形式と同様です。

次のオプションがサポートされています。

- f *config_file* 代替の遠隔メッセージ受信構成ファイルに対する絶対パスを表します。
- t (ドメイン *syslog* メッセージなどの) 遠隔メッセージ受信を無効にします。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/var/opt/SUNWSMS/adm/.logger
```

メッセージロギングデーモンの構成ファイル。

このファイルは、次の 3 つの指示をサポートしています。

FILE — メッセージの出力先を表します。デフォルトは `msgdaemon` で、この値は変更できません。

LEVEL — メッセージを記録するために `mld` で必要な最低限のレベルを表します。サポートしているレベルは、`debug`、`info`、`notice`、`warning`、`err`、`crit`、`alert`、および `emerg` です。デフォルトは `notice` です。

MODE — メッセージの冗長性を表します。 `verbose` モードと `terse` モードを使用することができます。デフォルトは `verbose` モードです。

注 - すべての引数では、大文字・小文字は区別されません。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

ssd(1M)

moveboard(1M)

名前	moveboard - ドメイン間でのボードの移動
形式	moveboard -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> [-c <i>function</i>] [-r <i>retry_count</i>] [-t <i>timeout</i>]] [-q] [-f] [-y -n] <i>location</i> moveboard -h
機能説明	<p>moveboard(1M) は、ドメインから、現在割り当てられてアクティブになっている <i>location</i> を最初に unconfigure、disconnect、unassign にします。次に、ドメイン <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> に対して <i>location</i> を assign、connect、configure します。</p> <p>-c <i>function</i> コマンドは、現在の設定状態から新しい設定状態へ、ボードの切り替えを指定する場合に使用します。設定状態は、assign、connect、または configure のいずれかとなります。-c オプションを指定しない場合は、デフォルトの設定状態は configure になります。</p> <hr/> <p>注 - moveboard は、タスクを同期的に実行し、コマンドが完了するまで制御をユーザーに戻しません。ボードの電源が入っていないか、またはテストされていない状態で、-c connect configure オプションを指定すると、このコマンドによってボードの電源が投入され、テストされます。</p> <hr/> <p>注 - 指定されたボードが自動システム回復 (ASR) ブラックリストファイルに定義されている場合は、moveboard は、ボードの割り当て時にエラーメッセージを表示して、処理を続行します。connect または configure 機能を使用している場合は、moveboard はエラーメッセージを表示して終了します。</p> <hr/>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-c <i>function</i></p> <p><i>function</i> の有効な値は、assign、connect、または configure です。この値は、設定状態の切り替えを制御する場合に使用します。</p>

注 - moveboard コマンドの実行が失敗しても、対象のボードは実行前の状態には戻りません。dxs エラーメッセージ (または dca エラーメッセージ) がドメインのログに出力されます。発生したエラーが回復可能であれば、コマンドを再試行できます。回復不能な場合、対象のボードを使用するためには、当該ドメインを再起動する必要があります。

有効な切り替え状態とその意味は以下のとおりです。

assign

ドメイン上で稼働している Solaris 環境からボードの構成を解除します。Solaris は、ボード上のすべてのハードウェア資源の使用を停止します。(deleteboard -c unconfigure を参照してください)。

ボードを切り離します。ボードを disconnected|unconfigured 状態に切り替えます。(deleteboard -c disconnect を参照してください)。

現在のドメインからボードの割り当てを解除します。(deleteboard -c unassign を参照してください)。

状態を**使用可能** (available) に変更して、論理ドメインからボードを移動します。

ボードを新しい論理ドメインに割り当てます。この状態のボードには当該ドメインが独占的にアクセスしますが、ボード自体はアクティブではありません。割り当てが完了すると、setkeyswitch on を使用するか、あるいは connect オプションまたは configure オプションを使用することによって、ボードをドメインに接続または設定できます。

connect

ドメイン上で稼働している Solaris 環境からボードの構成を解除します。Solaris は、ボード上のすべてのハードウェア資源の使用を停止します。(deleteboard -c unconfigure を参照してください)。

ボードを切り離します。ボードを disconnected|unconfigured 状態に切り替えます。(deleteboard -c disconnect を参照してください)。

現在のドメインからボードの割り当てを解除します。(deleteboard -c unassign を参照してください)。

状態を**使用可能** (available) に変更して、論理ドメインからボードを移動します。ボードを新しい論理ドメインに割り当てます。(上記の assign、および addboard(1M) -c assign を参照してください)。

ボードを connected|unconfigured 状態に切り替えます。これで、ボードは論理ドメインに**割り当て** (assigned) されており、**接続** (connected) されている (アクティブになっている) 状態になります。この状態では、標準システムでボード上のハードウェア資源を使用することができます。ただし、ボードのハードウェア資源は標準の Solaris のデータ構造では表現されないため、Solaris の環境では使用できません。ボード上で使用できる操作は、設定管理に限定されます (addboard -c connect も参照してください)。これは一時的な状態であり、ソフトウェアによるこの状態の実装は、現時点では存在しません。

configure

ドメイン上で稼働している Solaris 環境からボードの構成を解除します。Solaris は、ボード上のすべてのハードウェア資源の使用を停止します。(deleteboard -c unconfigure を参照してください)。

ボードを切り離します。ボードを disconnected|unconfigured 状態に切り替えます。(deleteboard -c disconnect を参照してください)。

現在のドメインからボードの割り当てを解除します。(deleteboard -c unassign を参照してください)。

状態を**使用可能** (available) に変更して、論理ドメインからボードを移動します。ボードを新しい論理ドメインに割り当てます。(上記の `assign`、および `addboard -c assign` も参照してください)。

ボードを `connected|unconfigured` 状態に切り替えます。これで、ボードは論理ドメインに**割り当て** (assigned) られており、**接続** (connected) されている (アクティブになっている) 状態になります。この状態では、標準システムでボード上のハードウェア資源を使用することができます。ただし、ボードのハードウェア資源は標準の Solaris のデータ構造では表現されないため、Solaris の環境では使用できません。ボード上で使用できる操作は、設定管理に限定されます(上記の `connect`、および `addboard -c connect` も参照してください)。

ボードを `connected|configured` 状態に切り替えます。この状態では、ボードはドメインに**割り当て** (assigned) および**接続** (connected) されているだけでなく、Solaris の環境用に**設定** (configured) されています。ボード上のハードウェア資源は、Solaris で使用することができます (`addboard -c configure` も参照してください)。

`-d domain_id`

ドメインの ID です。有効な `domain_id` は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。これは、ボードの移動先となるドメインです。

`-d domain_tag`

`addtag (1M)` を使用してドメインに割り当てられる名前です。これは、ボードの移動先となるドメインです。

`-f`

指定された処理を強制的に実行します。通常、このオプションを指定すると、安全機能がハードウェア側で制御されます。状態の強制的な変更では、条件が `ok` や `unknown` でない占有装置のハードウェア資源を、ハードウェアに基づく安全チェック機能に従って使用できます。

-h

ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視され
ます。

-n

すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、
-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

-q

非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制し
ます。

-q を単独で使用すると、すべてのプロンプトに対して -n オプションが
デフォルトで定義されます。

-q オプションを -y または -n オプションとともに使用すると、ユー
ザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づい
て「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

-r *retry_count* -t *timeout*

これらのコマンド引数を使用すると、状態の切り替え中に障害が発生
した場合に再試行する回数を指定することができます。-r *retry_count*
オプションは、ドメインによって設定状態の変更が再試行される回数
を表します。-t *timeout* オプションは、次の再試行を行うまでにドメ
インが待機する時間 (秒) を表します。このオプションは、必ず
retry_count とともに使用します。デフォルト値は 0 で、これは要求が
すぐに再試行されることを意味します。

-y

すべてのプロンプトに対して自動的に「yes」と応答します。プロンプ
トは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

location ボード位置で、スペースで区切ります。複数の *location* 引数は、許可されません。

次の *location* 形式が使用できます。

SB(0..17)

IO(0..17)

注 - ボードタイプを使用する場合は、showboards(1M) を使用します。

拡張機能説明

必要なグループ特権

ボードが assigned の状態 (つまり実行中のドメインで active になっていない) 場合は、プラットフォーム管理者特権を持っているユーザーのみ `-c assign` オプションを実行することができます。

ドメイン管理者または設定者特権を持っているユーザーは、自身のドメインについてのみ、このコマンドを実行することができます。ユーザーは、影響を受ける 2 つのドメイングループに属していることが必要です。また、ボードをこれらの 2 つのドメインの使用可能構成要素リストにボードを定義しておく必要があります。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

すべての例で、ボードが他のドメインでアクティブになっている場合は、そのドメインに対するドメイン管理者特権を持っていないなりません。また、現在のドメインからボードを **割り当て解除** (unassigned) するには、プラットフォーム管理者特権を持っているか、またはボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

システムボードを新しいドメインに **割り当てる** (assign) には、プラットフォーム特権を持っているか、またはそのボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。ドメイン内でボードを **接続** (connect) または **設定** (configure) するには、新しいドメインのドメイン特権を持っている必要があります。

使用例 1 – SB4 の CPU ボードをドメイン A に割り当てる

```
sc0:sms-user:>moveboard -d A -c assign SB4
SB at SB4 assigned to domain: A
```

使用例 2 – SB4 のブラックリストに定義されている CPU ボードをドメイン A に割り当てる

```
sc0:sms-user:>moveboard -d A -c assign SB4
SB at SB4 assigned to domain: A
Warning:CPU at SB4 is blacklisted.You will not be able to
connect or configure it.
sc0:sms-user:>
```

使用例 3 – IO ボードをドメイン A に設定する

注意事項: デフォルトの機能は configure です。

```
sc0:sms-user:> moveboard -d A IO2
IO2 unassigned from domain:B
IO2 assigned to domain:A
assign IO2
assign IO2 done
poweron IO2
poweron IO2 done
test IO2
test IO2 done
connect IO2
connect IO2 done
configure IO2
configure IO2 done
notify online /devices/pci@5d,700000
notify online /devices/pci@5d,600000
notify online /devices/pci@5c,700000
notify online /devices/pci@5c,600000
notify add capacity IO2 done
```

使用例 4 – IO17 の IO ボードをドメイン R に接続する

プラットフォーム特権を持っているか、またはボードをドメインの使用可能構成要素リストに定義しておく必要があります。

```
sc0:sms-user:> moveboard -d R -c connect IO17
```

使用例 5 – ブラックリストに定義されているボードをドメイン C に接続する

```
sc0:sms-user:> moveboard -d C -c connect SB0
SB at SB0 is blacklisted. Exiting.
sc0:sms-user:>
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- | | |
|----|------------------|
| 0 | 正常に終了 |
| 1 | 応答なし |
| 2 | サポートされていない |
| 3 | 操作がサポートされていない |
| 4 | 不正な特権 |
| 5 | ビジー |
| 6 | システムビジー |
| 7 | データエラー |
| 8 | ライブラリエラー |
| 9 | ライブラリが存在しない |
| 10 | 条件が不十分 |
| 11 | 不正 |
| 12 | エラー |
| 13 | APID が存在しない |
| 14 | 不正な属性 |
| 30 | 不正なボード ID タイプ |
| 31 | 不正な特権 |
| 32 | 他のドメインに割り当てられている |
| 33 | 特権を取得できない |
| 34 | ドメインボード情報を取得できない |

moveboard(1M)

- 35 アクティブなボード一覧を取得できない
- 36 割り当てられているボード一覧を取得できない
- 37 ブラックリストの取得に失敗
- 38 Solaris が稼働していない
- 56 DR のコマンド構文エラー
- 68 DR 操作の失敗

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist
```

esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。

注 - このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。ASR ブラックリストファイルから特定のコンポーネントを削除するには、enablecomponent(1M) を使用します。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、addboard(1M)、deleteboard(1M)、enablecomponent(1M)、esmd(1M)、showcomponent(1M)

名前	osd – OpenBoot PROM サーバーデーモン				
形式	osd				
機能説明	<p>osd(1M) は、OpenBoot PROM に対するソフトウェアサポートを提供します。osd は、setkeyswitch(1M) に SMS イベントベースのインタフェースを提供します。これは、ドメインが示される前に IDPROM、NVRAM および REBOOTARGS 情報を定義するためのものです。</p> <p>osd は、OpenBoot PROM からメールボックスコマンドも受け取ります。これらのメールボックスコマンドは処置され、結果は OpenBoot PROM に返されます。コマンドには、get-time-of-day、set-time-of-day、get-idprom、get-nvram-data、set-nvram-data、get-reboot-args、set-reboot-args、do-tunnel-switch があります。システムコントローラ (SC) 上には、すべてのドメインで共有している、osd の 1 つのインスタンスがあります。</p> <p>このデーモンは <code>ssd(1M)</code> によって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>				
拡張機能説明					
必要なグループ特権	osd は、 <code>sms-osd</code> ユーザーとして実行されます。				
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、<code>attributes(5)</code> を参照してください。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	setkeyswitch(1M)				

pcd(1M)

名前	pcd - プラットフォーム構成データベースデーモン
形式	pcd
機能説明	<p>pcd(1M) は、プラットフォーム、ドメイン、およびシステムボードの構成データを使用できるようにして、その仕組みを管理します。pcd は、システムコントローラ (SC) 上で実行される SMS デーモンで、SMS 構成の主要なコンポーネントです。システム管理アプリケーションは、すべて pcd デーモンを使用してデータベース情報を使用します。</p> <p>pcd はプラットフォーム構成データを管理するだけでなく、対象のデータベースで変更が発生したことを、登録されているシステム管理アプリケーションに通知します。これらの通知はイベントとして登録され、ユーザーに認識されません。</p> <p>このデーモンは、ssd(1M) デーモンによって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>
拡張機能説明	<p>プラットフォームデータには、以下のものが含まれています。</p> <hr/> <p>Platform type Platform name, Rack ID Cacheable Memory Address Slice Map System clock frequency System clock type SC IP address SC0 to SC1 IP address SC1 to SC0 IP address SC to SC IP netmask</p> <hr/> <p>ドメインデータには、以下のものが含まれています。</p> <hr/> <p>Domain ID/Tag OS version (not used) OS type (not used) Available component list Assigned board list Active board list Golden IOSRAM I/O board Virtual keyswitch setting</p>

Active Ethernet I/O board
 Domain creation time
 Domain dump state
 Domain bring up priority
 IP host address
 Host name
 Host netmask
 Host broadcast address

システムボードデータには、以下のものも含まれています。

Expander Position
 Slot position
 Board type
 Board state
 Domain assignment of the board
 Available component list state
 Board test status
 Board test level
 Memory cleared state

シグナル

SIGHUP データベースファイルを読み取り、情報を再キャッシュします。

ファイル

注 - これらのファイルは手動で変更しないでください。

次のファイルがサポートされています。

/var/opt/SUNWSMS/.pcd/platform_info

プラットフォームデータベース情報が含まれています。

/var/opt/SUNWSMS/.pcd/domain_info

ドメインデータベース情報が含まれています。

/var/opt/SUNWSMS/.pcd/sysboard_info

システムボードデータベース情報が含まれています。

pcd(1M)

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

ssd(1M)

名前	poweroff – 電源切断の制御
形式	poweroff [-q] [-y -n] [location]
機能説明	<p>poweroff -h</p> <p>poweroff(1M) は、指定されたデュアル 48V 電源装置、ファントレー、またはボードの電源を切断します。プラットフォーム管理者特権を持っている場合に、引数を指定しないでこのコマンドを使用すると、システム全体 (ただし大容量電源装置、ファントレー、予備のシステムコントローラ (SC) は除く) の電源が切断されます。電源が切断されるコンポーネントを使用しているアクティブなドメインがある場合は、それらのドメインが表示され、デフォルトで「Are you sure?」というプロンプトが示されます。</p> <p>プラットフォーム管理者特権を持っていない場合は、[location] コマンドのオペランドを必ず指定し、自身がドメイン管理者または設定者の特権を持っているドメインに、ボードを割り当てておく必要があります。</p>
オプション	<hr/> <p>注 - このコマンドは、仮想キースイッチの位置には作用しません。</p> <hr/> <p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/> <p>-n すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。</p> <p>-q 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。</p> <p>単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。</p> <p>-q オプションを -y または -n オプションとともに使用すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。</p>

poweroff(1M)

	<p>-y 全てのプロンプトに対して自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。</p>
オペランド	<p>次のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>location</i> コンポーネントの位置で、空白文字で区切ります。複数の <i>location</i> を指定することはできません。</p> <p>次の <i>location</i> 形式が使用できます。</p> <p>SB(0...17) IO(0...17) CS(0 1) FT(0...7) PS(0...5) EX(0...17) SC(0 1) [スベア SC のみ電源切断することができます。]</p>
拡張機能説明	
必要なグループ特権	<p>このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、ドメイン管理者または設計者の特権が必要です。</p> <p>ドメイン特権を持っている場合は、[<i>location</i>] オペランドも指定する必要があります。また、[<i>location</i>] は、自分が特権を持っているドメインに割り当て (assigned) られているドメイン構成単位 (DCU) に定義しておく必要があります。</p> <p>詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。</p>
使用例	<p>使用例 1 – 拡張ボタン位置 0 の CPU ボードの電源を切断する</p> <p>この例では、poweroff コマンドによって、ボードの電源が強制的に切断されます。stdout にメッセージは表示されず、すべてのプロンプトに対して自動的に「yes」で応答します。</p> <pre>sc0:sms-user:> poweroff -qy SB0</pre>

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

poweron(1M)

poweron(1M)

名前	poweron – 電源投入の制御
形式	poweron [-q] [-y -n] [location] poweron -h
機能説明	<p>poweron(1M) は、指定されたデュアル 48V 電源装置、ファントレイ、またはボードの電源を投入します。プラットフォーム管理者特権を持っている場合に、引数を指定しないでこのコマンドを使用すると、(新しい電源装置をサポートするために追加の 48V 電源装置モジュールの電源を投入するの必要がなければ)、システム全体の電源が投入されます。</p> <p>プラットフォーム管理者特権を持っていない場合は、[location] コマンドのオペランドを必ず指定し、自身がドメイン管理者または設定者の特権を持っているドメインに、ボードを割り当て (assigned) ておく必要があります。対象のボードについて必要な電源・冷却が利用できない場合は、poweron の処理は失敗します。完全に設定されているシステムの電源を投入するには、48V の電源装置モジュール (4 KW モジュール) が 5 つ以上必要です。従って、N+1 の冗長性を考慮すると、6 つの電源装置モジュールが使用されます。あるコンポーネントの電源を投入する際に、他のコンポーネントの電源投入が必要な場合 (ボードで 48V の電源装置モジュールが必要な場合など) は、poweron は失敗します。</p> <p>指定されたコンポーネントが自動システム回復 (ASR) ブラックリストファイルに定義されている場合は、エラーメッセージが表示されます。プラットフォーム管理者特権を持っている場合は、処理を続行するメッセージが表示されます。この特権を持っていない場合は、poweron は終了します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/> <p>-n すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。</p> <p>-q 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。</p>

単独で使用されると、`-q` はデフォルトですべてのプロンプトに対して `-n` オプションを指定します。

`-q` オプションを `-y` または `-n` オプションとともに使用すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

`-y` すべてのプロンプトに対して自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、`-q` オプションとともに使用しない限り表示されます。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

location コンポーネントの位置で、空白文字で区切ります。複数の *location* を指定することはできません。

次の *location* 形式が使用できます。

SB(0...17)

IO(0...17)

CS(0|1)

FI(0...7)

PS(0...5)

EX(0...17)

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、ドメイン管理者または設計者の特権が必要です。

ドメイン特権を持っている場合は、*[location]* オペランドも指定する必要があります。また、*[location]* は、自身が特権を持っているドメインに割り当て (assigned) られているドメイン構成単位 (DCU) に定義しておく必要があります。

ASR ブラックリストファイルに定義されているボードの電源を投入するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。

poweron(1M)

使用例

使用例 1 – デュアル 48V 電源装置の電源を投入する

電源装置は、バンク位置 0 の正面にあります。

```
sc0:sms-user:> poweron PS0
```

使用例 2 – ASR ブラックリストファイル内の CPU の電源を投入する

プラットフォーム管理者特権を持っている必要があります。この特権を持っていない場合に poweron コマンドを実行すると、エラーが発生して終了します。

```
sc0:sms-user:> poweron SB0
```

```
Component SB0 is in the ASR blacklist.
```

```
Are you sure you want to continue the power ON (yes/no)? Y
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist
```

esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。

注 – このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

esmd(1M)、poweroff(1M)

名前	rcfgadm – 遠隔構成管理
形式	<pre>rcfgadm -d domain_id domain_tag [-f] [-y -n] [-v] [-o hardware_options] -c function [-r retry_count [-T timeout]] ap_id... rcfgadm -d domain_id domain_tag [-f] [-y -n] [-v] [-o hardware_options] -x hardware_function ap_id... rcfgadm -d domain_id domain_tag [-v] [-a] [-s listing_options] [-o hardware_options] [-l [ap_id ap_type]...] rcfgadm -d domain_id domain_tag [-v] [-o hardware_options] -t ap_id... rcfgadm -d domain_id domain_tag [-v] [-o hardware_options] -h [ap_id ap_type]</pre>
機能説明	<p>rcfgadm(1M) は、動的に再構成可能なハードウェア資源に関する遠隔構成管理を操作します。rcfgadm コマンドを使用して、指定したドメインの構成管理をシステムコントローラから操作することができます。これらの操作には、状態の表示 (-l)、テストの開始 (-t)、設定状態の変更の呼び出し (-c)、ハードウェア特有の機能の呼び出し (-x)、および構成管理のヘルプメッセージの取得 (-h) が含まれています。</p> <p>rcfgadm は、接続点の構成を管理します。この接続点は、Solaris を継続して使用する際に、システムのソフトウェアがハードウェア資源の動的再構成をサポートする場所です。</p> <p>構成管理によって、システムの物理的ハードウェア資源と Solaris 環境で構成された表示可能なハードウェア資源を区別します。構成管理の機能はハードウェア特有のもので、ハードウェア固有のライブラリを呼び出すことによって実行されます。</p> <p>構成管理は、接続点で行います。接続点にあるハードウェア資源は、システムを使用する際に物理的に交換できる場合も、できない場合もありますが、構成管理インタフェースによって、動的に再構成することができます。</p> <p>接続点では、2 つの固有の要素を定義しますが、これらの要素は、接続点の範囲外にあるハードウェア資源と区別されます。接続点の 2 つの要素は、受容体と占有装置です。ハードウェア資源の物理的な挿入と取り外しは接続点で行わ</p>

れ、具体的には受容体と占有装置を接続したり、切り離したりします。構成管理では、物理的な挿入と取り外しの操作、および接続点におけるその他の構成管理機能をサポートします。

接続点には、関連する状態および条件の情報が定義されています。構成管理インタフェースには、接続点状態の切り替えに対する制御が用意されています。受容体の状態は、empty、disconnected、または connected のいずれかの状態となり、占有装置の状態は、configured または unconfigured のいずれかの状態となります。

接続点に占有装置がない場合は、受容体の通常の状態は empty になります。通常システムの使用で、占有装置から受容体を切り離すことができる disconnected 状態になります。通常は、占有装置の資源がシステムで完全に利用できるようになる前に、ハードウェア特有のさまざまなテストを行う場合、または占有装置の物理的な切り離したり、再構成の準備ステップとして、この状態が使用されます。disconnected 状態の受容体では、(ハードウェアで可能な場合に) システムから占有装置が切り離されていますが、テストと設定のために使用することは可能です。受容体は、connected 状態を提供する必要があります。この状態では、占有装置が含まれているハードウェア資源に対して、通常に使用することができます。受容体に占有装置が含まれており、構成管理の操作が行われている場合には、その受容体の通常の状態は connected になります。

unconfigured の状態の占有装置が含まれているハードウェア資源は、標準の Solaris のデータ構造では表現されないため、Solaris の環境では使用できません。unconfigured の状態の占有装置では、構成管理の操作のみ行うことができます。configured 状態のハードウェア資源は、標準の Solaris データ構造で表現されるため、これらのハードウェアの任意の部分を、Solaris 環境で使用することができます。すべての占有装置には、configured および unconfigured の状態があります。

接続点の条件は、unknown、OK、failing、failed、または unusable のいずれかとなります。接続点は、(揮発性レコードが存在しない場合に) 電源投入テストの結果に従って、システムをいずれかの条件に設定します。

configured 状態の占有装置を持つ接続点は、unknown、OK、failing、failed のいずれかの条件となります。failing または failed 以外の条件の場合には、接続点は、ハードウェア特有の回復可能なエラーしきい値を超え

たときに、操作の途中で `failing` に変更することができます。 `failed` 以外の条件の場合には、接続点は、回復不可能なエラーの結果として、操作中に `failed` に変更することができます。

`unconfigured` 状態の占有装置を持つ接続点は、定義されているいずれの条件に設定することもできます。 `unconfigured` されている占有装置を持つ接続点の条件は、システム特有の時間のしきい値を超えると、OKから `unknown` に変わります。テスト機能を開始すると、接続点の条件は、テストの結果に従って、OK、`failing`、または `failed` のいずれかに変わります。テスト機能が用意されていない接続点は、`unknown` の条件のままにしておくことが可能です。テストで割り込みが発生すると、接続点の条件は、前の条件 (`unknown` または `failed`) に設定することができます。 `unknown`、OK、`failing`、または `failed` の条件の接続点は、再テストすることができます。

接続点の条件が `unusable` になる場合には、受容体の電源・冷却が十分でない、占有装置が使用できないかサポートができない、または完全に設定されていない、などの理由があります。 `unusable` の条件の接続点は、システムで使用できません。この条件は、物理的な原因が解消されるまで、そのままになります。

接続点では、(条件が変化している、または再評価中であることを表す) `busy` 情報も管理します。

接続点は、システムデバイス階層における接続点のタイプおよび位置に関連する、ハードウェア特有の識別子 (`ap_id`) を使用して参照されます。 `ap_id` は、必ず1つの接続点を特定できるようにします。 `ap_id` の仕様では、「物理」および「論理」の2つのタイプをサポートしています。物理的な `ap_id` には、完全指定されたパス名が含まれ、論理的な `ap_id` には、接続点をわかりやすく表すための簡単な説明が含まれています。

たとえば、システムボード6を表す接続点の物理的な `ap_id` は `/devices/pseudo/dr@0:SB6` となり、論理的な `ap_id` は `SB6` となります。

接続点は、動的に作成することもできます。動的な接続点は、システム内のベースの接続点に対して相対的に名前が定義されます。動的な接続点の `ap_ids` は、ベースのコンポーネントの後に2つのコロン (::) を記述し、その後動的

なコンポーネントを記述する、という形式で構成されます。ベースコンポーネントは、ベースの接続点 *ap_id* です。動的なコンポーネントはハードウェア特有のもので、対応するハードウェア固有のライブラリから生成されます。

たとえば、システムボードを表すベースの接続点の物理的な *ap_id* が `/devices/pseudo/dr@0:SB16` で、論理的な *ap_id* が SB16 であるとし、このシステムボードに割り当てられている CPU は、論理的な *ap_id* が `SB16::cpu2` の動的な接続点として表すことができます。SB16 はベースのコンポーネントで、cpu2 はハードウェア特有の動的コンポーネントです。同様に、この動的な接続点の物理的な *ap_id* は、以下のようになります。

```
/devices/pseudo/dr@0:SB16::cpu2
```

ap_type は論理的な *ap_id* の一部であり、特定の接続点を表すことはできません。*ap_type* は論理的な *ap_id* の部分文字列で、*ap_id* と同じになる場合もありますが、コロン(:)の区切り文字は含まれません。たとえば、pci の *ap_type* は、論理的な *ap_ids* で先頭文字が pci の接続点をすべて表します。

ap_type の使用は、推奨しません。-s オプションの新しい選択サブオプションを使用すると、より汎用的で柔軟性のある方法で接続点を選択することができます。「オプション」を参照してください。

rcfgadm は、ハードウェア固有のライブラリに含まれているハードウェア特有の機能と、最初に対話します。このため、rcfgadm の動作はハードウェアによって異なります。

それぞれの構成管理の操作では、サービスの割り込みが必要になる場合もあります。操作で、ユーザーと対話するための明確なサービスの割り込みが必要な場合は、操作が開始される前に確認が行われます。標準的な入力の確認するために、標準のエラー出力についてプロンプトが示されます。-y または -n オプションを使用して、常に yes、または no と応答するように、確認を変更することもできます。-o オプションを使用すると、*test level* などのハードウェア特有のオプションがサブオプションとして提供されます。

システム設定の状態を変更する操作は、システムログデーモン `syslogd(1M)` で検査されます。

オプション

このコマンドの引数は、getopt(3C) と getsubopt(3C) の構文規則に準拠しています。

詳細については、『Sun Fire 15K Dynamic Reconfiguration ユーザーマニュアル』を参照してください。

次のオプションがサポートされています。

-a

-1 オプションで動的接続点を表示する必要があることを指定します。

-c *function*

ap_id で指定された接続点で、状態の変更を行います。

disconnect、connect、configure、または**unconfigure** の関数のいずれかを指定します。これらの関数によって、特定ハードウェア用のライブラリルーチンが呼び出され、接続点の状態が変化します。

注 - rcfgadm コマンドの実行が失敗しても、対象のボードは実行前の状態には戻りません。dxs エラーメッセージ (または dca エラーメッセージ) がドメインのログに出力されます。発生したエラーが回復可能であれば、コマンドを再試行できます。回復不能な場合、対象のボードを使用するためには、当該ドメインを再起動する必要があります。

有効な関数とその意味は次のとおりです。

■ **disconnect**

受容体が disconnected 状態に変わります。

占有装置が configured 状態の場合は、disconnect の機能は、最初に占有装置を unconfigure しようとします。デフォルトでは、disconnect 機能はボードの電源を切断します。このようにすると、スロットの対象ポイントでボードを取り外せるようになります。-o nopoweroff オプションは、電源切断のステップを行わずに、ボードの電源をそのままの状態にしておくよう指定します。デフォルトでは、ボードはドメインに割り当てられたままになります。-o unassign オプションは、ボードがいったん disconnected になると、ド

メインからボードの所有権を削除するように指示します。ボードが `unassigned` になると、他のドメインが自身に `assigned` になっているボードを持っている可能性があるため、`cfgadm` はボードにアクセスできなくなります。

■ connect

ハードウェア特有の操作を実行して、受容体を `connected` 状態にします。これで、受容体を介して占有装置を通常に操作することができます。

■ configure

ハードウェア特有の操作を実行して、占有装置のハードウェア資源を `Solaris` で使用できるようにします。設定済の占有装置はシステム構成の一部となり、`Solaris` ソフトウェアデバイスの操作保守コマンド (`psradm(1M)`、`mount(1M)`、`ifconfig(1M)` など) で操作できるようになります。

■ unconfigure

ハードウェア特有の操作 (占有装置のハードウェア資源をシステムから削除する操作) を実行します。占有装置は `connected` になっている状態で、占有装置のハードウェア資源は、`Solaris` の環境で使用されていないことを確認します。

状態の切り替え機能は、接続点の条件、またはその他のハードウェアに依存した事項によって、失敗する場合があります。資源を追加する指示 (`connect` および `configure`) において状態を切り替える機能はすべて、接続点が `OK` または `unknown` の条件の場合に、ハードウェア特有のライブラリへ渡されます。その他の条件の場合は、すべて強制 (`-f`) オプションを使用して、これらの機能をハードウェア固有のライブラリに渡す必要があります。どのような接続点の条件であっても、システムからハードウェア資源を削除 (`disconnect` および `unconfigure`) する際に、ハードウェア固有のライブラリが呼び出されます。接続点の条件が `unknown` の場合は、ハードウェア固有のライブラリで状態の変更機能を拒否する場合があります。

接続点の条件は、状態の変更機能によって変更される場合だけではなく、状態の変更操作で発生したエラーによって、変更される場合もあります。強制オプション (-f) を指定すると、条件の変更を試行して、(通常の実行では失敗する場合に) 条件を強制的に変更することができます。ハードウェア特有の安全性および完全性のチェックを行うと、強制オプションを実行しても何も処理されません。

-d *domain_id*

ドメインの ID。有効な *domain_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。

-d *domain_tag*

addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。

-f

指定された処理を強制的に実行します。通常は、この処理は安全性よりも優先されるハードウェア特有の機能です。強制的に状態を変更すると、条件が OK または unknown 以外の占有装置のハードウェア資源を、ハードウェア固有の安全性チェックに基づいて使用できるようになります。

-h [*ap_id* | *ap_type*]

ヘルプメッセージテキストを出力します。*ap_id* または *ap_type* が指定された場合は、引数によって示された接続点に対するハードウェア固有ライブラリのヘルプルーチンが呼び出されます。

-l [*ap_id* | *ap_type*]

指定された接続点の状態および条件を表示します。-s オプションおよび選択サブオプションを使用して、接続点をフィルタすることができます。処理オプションを指定しないで rcfgadm を呼び出すと、引数を指定しないで -l を呼び出した場合と同じになります。一覧表示の形式は、-v および -s オプションによって制御されます。-a オプションを指定すると、接続点が動的に拡張されます。

- -o parsable

空白文字で区切られた "name=value" のセットとして、情報を返します。すべての文字列は二重引用符で囲まれます。文字列内の二重引用符と "\" は、\" でエスケープされます。
parsable オプションは、cfgadm の -s オプションと合わせて使用することを前提としています。

- n

すべてのプロンプトに対して、自動的に「no」と応答します。

- o hardware_options

メインのコマンドオプションに対してハードウェア特有のオプションを提供します。

hardware_options の有効値は以下のとおりです。

- parsable

-l オプションが使用される場合のみ適用されます。
parsable サブオプションは、"name=value" のセットとして情報が返されることを表します。

- unassign

-c 切断オプションが使用される場合のみ適用されます。
unassign サブオプションは、ボードの所有権を削除するよう指定します。

- nopoweroff

-c 切断オプションが使用される場合のみ適用されます。
nopoweroff サブオプションは、ボードが切り離された後に電源切断されないように指定します。

- r retry_count

ドメインで、動的再構成 (DR) 要求が再試行される回数を指定します。デフォルトはゼロです。

-s listing_options

一覧 (-l) コマンドに対する一覧表示オプションを提供します。
listing_options は、`getsubopt(3C)` の構文規則に準拠しています。サブオプションを使用して、接続点の選択基準 (`select=select_string`)、対象の照合タイプ (`match=match_type`)、一覧表示の順序 (`sort=field_spec`)、表示対象のデータ (`cols=field_spec` および `cols2=field_spec`)、列の区切り文字 (`delim=string`)、および列見出しの非表示 (`noheadings`) を指定します。

選択サブオプションを指定すると、指定された基準と一致する接続点のみが表示されます。選択サブオプションの構文は以下のとおりです。

```
rcfgadm -s select=attr1(value1):attr2(value2)...
```

`attr` は、*ap_id*、*class*、または *type* のいずれかとなります。*ap_id* は論理的な *ap_id* フィールドを表します。*class* は接続点のクラスを、*type* はタイプフィールドを表します。*value1*、*value2* などは照合する値に対応します。照合のタイプは、以下の照合サブオプションで指定することができます。

```
rcfgadm -s match=match_type,select=attr1(value1)...
```

match_type は `exact` または `partial` のいずれかとなります。デフォルトの値は `exact` です。

サブオプションには特殊文字を指定することもできますが、これは、`rcfgadm` サブオプションの一部としては解釈されません。たとえばコマンドには、サブオプションとして使用できる丸括弧を指定することができますが、これは、コマンド行に入力する際には特殊文字として解釈されます。選択サブオプションに対する引数は、UNIX C シェルで解釈されないように、引用符で囲むことができます。

field_spec は、`data-field:data-field:data-field` のようにコロンの (`:`) を使用して連結された 1 つ、または複数のデータフィールドです。`data-field` は *ap_id*、*physid*、*r_state*、*o_state*、*condition*、*type*、*busy*、*status_time*、*status_time_p*、*info* のいずれかとなります。*ap_id* フィールドの出力は、接続点の論理名で、*physid* フィールドには物理

名が含まれます。 *r_state* フィールドは、 *empty*、 *disconnected*、 または *connected* のいずれかとなります。 *o_state* フィールドは *configured* または *unconfigured* となります。 *busy* フィールドは、接続点が *ビジー* の場合は *y*、それ以外の場合は *n* となります。 *type* および *info* フィールドはハードウェアによって異なります。

status_time_p フィールドは、 *status_time* フィールドの解析可能なバージョンです。接続点がクラスに関連付けられている場合は、 *class* フィールドにクラス名が表示されます。

field_spec のフィールドの順序は重要です。ソートサブオプションでは、最初のフィールドが第一ソートキーとなります。 *cols* および *cols2* サブオプションでは、要求された順序でフィールドが出力されます。ソートサブオプションでは、 *field_spec* でデータフィールド名の前にマイナス (-) を指定すると、データフィールドのソート順が逆になります。ソートのデフォルト値は *ap_id* です。 *cols* および *cols2* のデフォルト値は、 *-v* オプションが指定されたかどうかによって異なります。このオプションが指定されない場合は、 *cols* は *ap_id:r_state:o_state:condition* で、 *cols2* は設定されません。 *-v* を指定すると、 *cols* は *ap_id:r_state:o_state:condition:info* となり、 *cols2* は *status_time:type:busy:physid* となります。 *delim* のデフォルト値は単一の空白文字です。 *delim* の値には、任意の長さの文字列を使用することができます。区切り文字には、コンマ (,) は使用できません (*getsubopt(3C)* を参照してください)。これらの一覧表示オプションは、解析可能な出力を作成する際に使用します。

-T timeout

再試行を行う際の時間間隔 (秒) を指定します。このオプションは、必ず *-r retry_count* オプションとともに使用します。デフォルト値は 0 で、これは DR 要求がすぐに再試行されることを意味します。

-t

1 つまたは複数の接続点のテストを実行します。このテスト機能は、接続点の条件を再評価する際に使用します。

テストの結果を使用して、障害が検出されない場合は特定の占有装置の条件を OK に変更し、回復可能な障害が検出された場合は *failing* に変更し、回復不可能な障害が検出された場合は *failed* に変更します。

テストが割り込みされた場合は、接続点の条件を以前の値に戻すことができます。エラーが検出されなかった場合は *unknown* に設定され、回復可能なエラーのみが検出された場合は *failing* に設定され、回復不可能なエラーが検出された場合は *failed* に設定されます。エラーなしでテストが正常終了した場合は、接続点の条件は必ず OK に設定されます。

-v

冗長モードで実行します。-c、-t、および -x オプションでは、実行したそれぞれの操作の結果を表すメッセージが出力されます。-h オプションの場合は、詳細なヘルプ情報が出力されます。-l オプションの場合は、それぞれの接続点について詳細な情報が出力されます。

-x *hardware_function*

ハードウェア特有の機能を実行します。

hardware_function の有効値は以下のとおりです。

- *assign ap_id*
ドメインにボードを割り当てます。
- *unassign ap_id*
ドメインに対するボードの割り当てを解除します。
- *poweron ap_id*
ボードの電源を投入します。
- *poweroff ap_id*
ボードの電源を切断します。

-y

すべてのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。プロンプトは表示されます。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

ap_id

接続点は、システムデバイス階層における接続点のタイプおよび位置に関連する、ハードウェア特有の識別子 (*ap_id*) を使用して参照されます。*ap_id* は、必ず 1 つの接続点を特定できるようにします。*ap_id* の仕様では、「物理」および「論理」の 2 つのタイプをサポートしています。物理的な *ap_id* には、完全指定されたパス名が含まれ、論理的な *ap_id* には、接続点をわかりやすく表すための簡単な説明が含まれています。

物理的 *ap_ids*

```
/devices/pseudo/dr@0:IO4
/devices/pseudo/dr@0:IO6
/devices/pseudo/dr@0:IO14
/devices/pseudo/dr@0:SB4
/devices/pseudo/dr@0:SB6
```

論理的 *ap_ids*

```
IO4
IO6
IO14
SB4
SB6
```

ap_type

ap_type は論理的 *ap_id* の一部であり、特定の接続点を表すことはできません。*ap_type* は論理的 *ap_id* の部分文字列で、*ap_id* と同じになる場合もありますが、コロン (:) の区切り文字は含まれません。たとえば、*pci* の *ap_type* は、論理的 *ap_id* で先頭文字が *pci* の接続点をすべて表します。ここでは 2 種類の *ap_type*、すなわち静的 *ap_type* と動的 *ap_type* を示しています。

拡張機能説明
必要なグループ特権

静的 *ap_types* :

HPCI
CPU
MCP
pci-pci/hp

動的 *ap_types* :

cpu
mem
io

このコマンドを使用するために必要な特権は、実行する操作によって異なります。rcfgadm は、ドメインに connected になっていないボードを assign または unassign にすることができます。ボードの assign または unassign を実行するには、プラットフォーム管理者特権、またはドメイン管理者・設定者の特権を持っており、ボードがドメインの使用可能構成要素リストに定義されている必要があります。詳細は、setupplatform(1M) および showplatform(1M) を参照してください。

assign および unassign の操作は、専用ハードウェア特有の操作です。rcfgadm -x assign *ap_id* を使用して、ボードを assign します。rcfgadm -x unassign *ap_id* を使用して、ボードの unassign にします。assign および unassign で使用する *ap_id* は、SB0 や IO2 のように論理的 *ap_id* として指定する必要があります。

テスト、状態変更、またはハードウェア特有の操作を行うには、ドメイン管理者またはドメイン設定者の特権が必要です。

対象のドメインについて、ドメイン管理者または設定者の特権を持っている必要があります。あるいは、プラットフォーム管理者特権を持っている必要があります。

操作を一覧表示するには、特権は必要ありません。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 - ドメイン A のデバイスツリー内の接続点を一覧表示する

以下の例では、(動的接続点を除く) すべての接続点が一覧表示されています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a
```

Ap_Id	Type	Receptacle	Occupant	Condition
IO4	PCI	connected	configured	ok
IO6	MCPU	disconnected	unconfigured	unknown
IO14	PCI	connected	configured	ok
SB4	CPU	disconnected	unconfigured	unknown
SB6	CPU	connected	configured	ok
SB16	CPU	connected	configured	ok

使用例 2 - ドメイン A の構成可能なハードウェア情報をすべて一覧表示する

以下の例では、構成可能なハードウェア情報がすべて (動的接続点の情報も含めて) 一覧表示されています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -al
```

Ap_Id	Type	Receptacle	Occupant	Condition
IO4	PCI	connected	configured	ok
IO4::pci0	io	connected	configured	ok
IO4::pci1	io	connected	configured	ok
IO4::pci2	io	connected	configured	ok
IO4::pci3	io	connected	configured	ok
IO6	MCPU	disconnected	unconfigured	unknown
IO14	PCI	connected	configured	ok
IO14::pci0	io	connected	configured	ok
IO14::pci1	io	connected	configured	ok
IO14::pci2	io	connected	configured	ok
IO14::pci3	io	connected	configured	ok
SB4	CPU	disconnected	unconfigured	unknown
SB6	CPU	connected	configured	ok
SB6::cpu0	cpu	connected	configured	ok
SB6::cpu1	cpu	connected	configured	ok
SB6::cpu2	cpu	connected	configured	ok
SB6::cpu3	cpu	connected	configured	ok
SB6::memory	memory	connected	configured	ok
SB16	CPU	connected	configured	ok
SB16::cpu0	cpu	connected	configured	ok
SB16::cpu1	cpu	connected	configured	ok

```
SB16::cpu2      cpu      connected  configured  ok
SB16::cpu3      cpu      connected  configured  ok
SB16::memory    memory   connected  configured  ok
```

使用例 3 — ドメイン A の接続点属性に基づいて選択的に表示する

以下の例では、*location* が SB6 で、*type* が *cpu* の接続点がすべて一覧表示されています。-s オプションの引数は引用符で囲み、シェルで解釈されないようにします。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -s match=partial,select="type(cpu)" -la SB6
```

```
Ap_Id          Type      Receptacle  Occupant    Condition
SB6::cpu0      cpu      connected   configured  ok
SB6::cpu1      cpu      connected   configured  ok
SB6::cpu2      cpu      connected   configured  ok
SB6::cpu3      cpu      connected   configured  ok
```

使用例 4 — ドメイン A に対する現行の構成可能なハードウェア情報を冗長モードで一覧表示する

以下の例では、現行の構成可能なハードウェア情報が冗長モードで一覧表示されています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -v -l SB16
```

```
Ap_Id  Receptacle  Occupant  Condition  Information
SB16   connected   configured  ok         powered-on, assigned
```

```
When          Type  Busy  Phys_Id
Mar 6 13:30   CPU   n     /devices/pseudo/dr@0:SB16
```

使用例 5 — ドメイン A の強制オプション

以下の例では、強制オプションを使用して、失敗状態の占有装置をシステムを設定します。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -f -c configure SB6
```

使用例 6 — ドメイン A でシステムから占有装置を構成解除する

以下の例では、システムから占有装置が構成解除されています。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -c unconfigure IO14
```

使用例 7 — 接続点で占有装置を構成する

以下に、占有装置を構成する例を示します。

```
sc0:sms-user:> rcfgadm -d a -c configure SB6
```

環境変数

command_name の実行に影響を与える以下の環境変数 LC_TIME、LC_MESSAGES、TZ の説明は、environ(5) を参照してください。

LC_MESSAGES	rcfgadm で列見出しとエラーメッセージをどのように表示するかを定義します。この変数を設定しても、出力データの表示は影響を受けません。
LC_TIME	rcfgadm で、人間が読み取れる形式の「状態が変更された時刻」 (<i>status_time</i>) をどのように表示するかを定義します。
TZ	状態が変化した時刻を変換する際のタイムゾーンを指定します。このタイムゾーンは、人間が読み取れる形式 (<i>status_time</i>) および解析可能な形式 (<i>status_time_p</i>) の両方に適用されます。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0	正常に終了
1	応答なし
2	サポートされていない
3	操作がサポートされていない
4	不正な特権
5	ビジー
6	システムビジー
7	データエラー

- 8 ライブラリエラー
- 9 ライブラリが存在しない
- 10 条件が不十分
- 11 不正
- 12 エラー
- 13 APID が存在しない
- 14 不正な属性
- 30 不正なボード ID タイプ
- 31 不正な特権
- 32 他のドメインに割り当てられている
- 33 特権を取得できない
- 34 ドメインボード情報を取得できない
- 35 アクティブなボード一覧を取得できない
- 36 割り当てられているボード一覧を取得できない
- 37 ブラックリストの取得に失敗
- 38 Solaris が稼働していない
- 56 DR のコマンド構文エラー
- 68 DR 操作の失敗

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、cfgadm_sbd(1M)、setupplatform(1M)、
showplatform(1M)

診断

標準のエラー出力では、診断メッセージが表示されます。このユーティリティーでは、オプションおよび使用エラー以外に、以下の診断メッセージが作成されます。

rcfgadm: Configuration administration not supported on *ap_id*

rcfgadm: No library found for *ap_id*

rcfgadm: *ap_id* is ambiguous

rcfgadm: Operation:Insufficient privileges

rcfgadm: Attachment point is busy, try again

rcfgadm: No attachment points with specified attributes found

rcfgadm: System is busy, try again

rcfgadm: Operation:Operation requires a service interruption

rcfgadm: Operation:Data error:error_text

rcfgadm: Operation:Hardware specific failure:error_text

rcfgadm: Attachment point not found

rcfgadm: Configuration operation succeeded

rcfgadm: Configuration operation cancelled

rcfgadm: Configuration operation invalid

rcfgadm: Configuration operation not supported

rcfgadm: Library error

rcfgadm: Insufficient condition

rcfgadm: SCDR/DCA door failure

rcfgadm: DCA/DCS communication error

rcfgadm: DCA internal failure

rcfgadm: PCD event failure

rcfgadm: Callback function failure

rcfgadm: SCDR library internal error

rcfgadm: Board is already assigned to another domain

rcfgadm: Unable to get active or assigned domain info

rcfgadm: Unable to get privileges

rcfgadm: DRCMD library invalid parameter

エラーメッセージに関する詳細は、config_admin(3CFGADM) を参照してください。

reset(1M)

名前	reset - 指定されたドメインのすべての CPU ポートにリセットを送信
形式	reset [-d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>] [-d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>] [-q] [-y -n] [-x] reset -h
機能説明	reset(1M) は、1 つまたは複数のドメインをリセットします。具体的には、ハードウェアをリセットしてクリーンな状態にする方法と、外部で開始されたリセット (XIR) シグナルを送信する方法があります。デフォルトでは、ハードウェアをクリーンな状態にする方法が使用されます。仮想キー 스위치가安全な位置にある場合は、エラーが示されます。オプションの確認プロンプトが、デフォルトで表示されます。詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 6 章を参照してください。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
<hr/>	
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
<hr/>	
-n	すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されません。
-q	非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。 単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。

拡張機能説明
必要なグループ特権

-q オプションを -y または -n オプションとともに使用すると、ユーザープロンプトがすべて非表示になり、選択したオプションに基づいて「y」または「n」のいずれかで自動的に応答します。

-x 指定されたドメインのプロセッサに、XIR シグナルを送信します。

-y すべてのプロンプトに対して自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

使用例

このコマンドを実行するには、ドメイン管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例 1 – ドメイン C のリセット

```
sc0:sms-user:>reset -d C
Do you want to send RESET to domain C?[y|n]:y
RESET to port SB4/P0 initiated.
RESET to port SB4/P1 initiated.
RESET initiated to all ports for domain: C
```

使用例 2 – ドメイン C のXIR リセット

```
sc0:sms-user:>reset -d C -x
Do you want to send XIR to domain C?[y|n]:y
XIR to processor SB3/P0 initiated
XIR to processor SB3/P1 initiated
XIR to processor SB3/P2 initiated
XIR to processor SB3/P3 initiated
XIR initiated to all processors for domain: C
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

reset(1M)

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)

名前	resetsc – 他 ^の システムコントローラ (SC) のリセット
形式	resetsc [-q] [-y -n] resetsc -h
機能説明	resetsc(1M) は、他 ^の SC をリセットします。この操作は通常、フェイルオーバーの後で行われます。このコマンドは、メイン SC から実行してスペア SC をリセットするか、またはスペア SC から実行してメイン SC をリセットします。SC は自身をリセットすることはできません。選択した SC の電源が投入されていない場合は、resetsc は、電源を投入するようユーザーにメッセージを表示します。選択した SC の電源が投入されていない場合は、resetsc はエラーで終了します。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま す。
-n	すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、 -q オプションとともに使用しない限り表示されます。
-q	非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制し ます。 単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。 -y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、 -q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに 基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。
-y	すべてのプロンプトに対して自動的に「yes」と応答します。プロンプ トは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

resetsc(1M)

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 – プロンプトを使用して他の SC をリセットする

```
sc0:sms-user:>resetsc
>About to reset other SC.
Are you sure you want to continue? (y or [n])"
```

使用例 2 – 他の SC が電源切断されている場合に、他の SC をリセットする

```
sc0:sms-user:>resetsc
The other SC is not powered on.
Do you want to try to power it on? (y or [n])
```

使用例 3 – すべてのプロンプトに「yes」と応答して他の SC をリセットする

```
sc0:sms-user:>resetsc -y
>About to reset other SC.
Are you sure you want to continue? [y]
```

使用例 4 – すべてのプロンプトを非表示にして他の SC をリセットする

```
sc0:sms-user:>resetsc -q
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 ユーザーが有効なアクセス権を持っていません。
- 2 記憶域の割り当てに失敗
- 3 他の SC の存在を特定できない
- 4 他の SC が存在しない
- 5 他の SC の電源状態を特定できない
- 6 他の SC の電源を投入できない
- 7 他の SC をリセットできない
- 8 フラグの登録に失敗
- 9 不正なコマンド行引数

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

runcmdsync(1M)

名前	runcmdsync – フェイルオーバー後の回復のために、指定されたスクリプトを準備
形式	runcmdsync <i>script_name</i> [<i>parameters</i>] runcmdsync -h
機能説明	<p>runcmdsync(1M) コマンドは、フェイルオーバー後に自動的に同期をとる (回復を行う) ために、指定されたスクリプトを準備します。runcmdsync は、回復するスクリプトを特定するコマンド同期記述子を作成します。この記述子は、コマンド同期リストに追加されます。このリストは、フェイルオーバーの後で回復するスクリプトを特定するリストです。また、runcmdsync コマンドは、スクリプトが終了すると、コマンド同期リストからこの記述子を削除します。</p> <p>スクリプト内で再起動ポイントを指定するには、initcmdsync(1M)、および同期コマンド群を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。</p> <hr/>
	<p><i>script_name</i> コマンドを同期化するために準備するスクリプトを表します。</p> <p><i>parameters</i> 指定されたスクリプトに関するオプションまたはパラメタを指定します。これらのパラメタはスペアシステムコントローラ (SC) に格納されており、自動フェイルオーバーの後で指定されたコマンドまたはスクリプトを再起動する際に使用します。</p>

拡張機能説明	このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。
必要なグループ特権	詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。
終了ステータス	次の終了値が返されます。 0 正常に終了しました。 0 以外 エラーが発生しました。
属性	次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。
関連項目	cancelcmdsync(1M)、initcmdsync(1M)、savecmdsync(1M)、および showcmdsync(1M)

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

savecmdsyc(1M)

名前	savecmdsyc - コマンド同期コマンド
形式	<pre>cancelcmdsyc <i>cmdsyc_descriptor</i> initcmdsyc <i>script_name</i> [<i>parameters</i>] savecmdsyc -M <i>identifier</i> <i>cmdsyc_descriptor</i> [<i>cancel init save</i>]cmdsyc -h</pre>
機能説明	<p>これらのコマンド同期コマンドはともに機能し、システムコントローラ (SC) のフェイルオーバーによって中断されたユーザー定義のスキプトの回復を制御します。コマンドを同期化するには、ユーザー定義のスキプトに次のコマンドを挿入します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ <code>initcmdsyc</code> は、回復するスキプトを特定するための、コマンド同期記述子を作成します。 この記述子は、コマンド同期リストの中に定義されます。このリストは、フェイルオーバーが発生した後で、新しいメインの SC で再起動するスキプトとコマンドを特定します。■ <code>savecmdsyc</code> は、フェイルオーバーが発生した後で、スキプト内のどの場所から処理を再開するかを特定するためのマーカーを追加します。■ <code>cancelcmdsyc</code> は、コマンド同期リストからコマンド同期記述子を削除します。これによって、スキプトは 1 度だけ実行され、それ以降のフェイルオーバーの後には実行されません。 <p>コマンド同期リストから記述子を削除するために、スキプトのすべての出力先には、必ず 1 つの <code>cancelcmdsyc</code> シーケンスを定義します。記述子が削除されていない場合にフェイルオーバーが発生すると、スキプトは、新しいメイン SC 上で実行されます。</p> <hr/> <p>注 - <code>initcmdsyc</code> と <code>cancelcmdsyc</code> のシーケンスは、コマンドが同期化されるように必ず 1 つのスキプトに定義します。<code>savecmdsyc</code> はオプションのコマンドで、スキプト内の場所をマークして処理を再開する場所を特定する場合のみ使用します。特別な再開ポイントが必要ない場合は、代わりに <code>runccmdsyc(1M)</code> を使用することもできます。</p> <hr/>

オプション

次のオプションがサポートされています。

- cmdsync_descriptor* コマンド同期記述子 (ユーザー定義スクリプトを指定する記述子) を表します。この記述子は、`initcmdsync` コマンドの標準の出力値として返されます。
- `-h` ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。`-h` に追加して指定されたオプションは無視されません。

- `-M identifier` フェイルオーバーの後に、スクリプトを再開する場所を指定します。この記述子は、正の整数とします。
- parameters* ユーザー定義スクリプトに関連するオプションまたはパラメータを表します。これらのパラメータは、スペースに格納されており、フェイルオーバーの後で指定されたスクリプトを再起動する際に使用します。
- script_name* 同期的に処理されるユーザー定義スクリプトの名前を表します。

拡張機能説明

コマンド同期コマンドは、ユーザー定義スクリプト内の特定の論理ポイントに挿入します。

たとえば、**Korn** シェルスクリプトは、以下のようになります。

```
# MAIN CODE STARTS HERE
# Be sure to use a cleanup procedure to handle any
# interrupts.
# Use the cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command
# will get restarted on the new main SC.
#
clean_up () {
    cancelcmdsyc $desc
    exit
}

# Declare the clean_up function to capture system signals
# and cleanup.
trap "clean_up" INT HUP TERM QUIT PWR URG
goto_label=1
# Process the arguments, capturing the -M marker point
# if provided
#
for arg in $*; do
    case $arg in
        -M )
            goto_label=$arg;;
        .
        .
        .
    esac
done
# Place this script and all its parameters in the command
# synchronization list, which indicates the commands to
# be restarted after an SC failover.
#
# NOTE: The script must be executable by the user defined
# in fomd.cf and reside in the same directory on both the
# main and the spare SC.
```

```

# If the command is not part of the defined PATH for
# the user, the absolute filename must be passed with the
# initcmdsyc command
#
initcmdsyc script_name parameters
# The marker point is stored in the goto_label variable.
# Keep executing this script until all cases have been
# processed or an error is detected.
#
while (( $goto_label != 0 )) ; do
#
# Each case should represent a synchronization point
# in the script.
#
case $goto_label in
#
# Step 1: Do something
#
1 )          do_something
              .
              .
              .

# Execute the savecmdsyc command with the script's
# descriptor and a unique marker to save the position.
# If a failover occurs here, the commands represented in
# the next goto_label (2) will be resumed.
#
              savecmdsyc -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
              goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
              ;;

#
# Step 2: Do more things
#
2 )          do_more_things
              .
              .
              .
              savecmdsyc -M $(( $goto_label + 1 )) $desc
              goto_label=$(( $goto_label + 1 ))
              ;;

#
# Step 3: Finish the last step and set the goto_label to 0
# so that the script ends.
3 )
              finish_last_step
              .
              .
              .
              goto_label=0
              ;;

        esac
done
# END OF MAIN CODE
# Remember to execute cancelcmdsyc to remove the script from the
# command synchronization list. Otherwise, the command will be restarted
# after the failover.
#
cancelcmdsyc $desc

```

savecmdsyc(1M)

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

注 - `initcmdsyc` の標準出力には、コマンド同期記述子が含まれていません。(フェイルオーバーが終了した場合や、単一の SC 環境などでフェイルオーバーが使用できない場合は、同期コマンドが含まれているスクリプトでは、プラットフォームのログファイルに対してエラーメッセージを生成し、ゼロ以外の終了コードを返します。これらのメッセージは無視することもできます。

属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

`runcmdsync(1M)`, `showcmdsyc(1M)`

注意事項

(同期コマンドを使用した) ユーザー定義スクリプトの例は、`/opt/SUNWSMS/examples/cmdsync` ディレクトリに保存されています。

名前	setbus - ドメイン内のアクティブな拡張ボタンで動的バスの再構成を実行
形式	setbus [-q] [-y -n] -c CS0 CS1 CS0,CS1 [-b buses] [location...]
機能説明	<p>setbus -h</p> <p>setbus(1M) は、ドメイン内で動的拡張ボタン上のバストラフィックを動的に再構成してセンタープレーンサポートボード (CSB) を使用します。両方の CSB を使用するのとは <code>noema1</code> モードです。1 つの CSB を使用するのとは <code>degraded</code> モードです。</p> <p>この機能を使用すると、システムの電源を切ることなく CSB を交換できます。</p>
オプション	<hr/> <p>注 - <code>-y</code> および <code>-n</code> は、setbus(1M) コマンドに対するオプションの引数です。オプションの引数の 1 つが指定されていない場合は、setbus によって確認メッセージが表示されます。</p> <hr/>
	<hr/> <p>注 - 選択した拡張ボタンの構成を変更する場合は、追加の拡張ボタンの構成を変更することが必要です。setbus によって次のメッセージが表示されます。</p> <hr/>
	<hr/> <p>The expander board in position <i>location</i> communicates with expanders not already listed, and will be added to the list of boards to reconfigure.</p> <hr/>
	<p>次のオプションがサポートされています。</p>
	<p><code>-b buses</code> 構成するバスを指定します。構成するバスは 3 つあります。有効なバスは、次のとおりです。</p> <p> a — アドレスバスを構成する</p> <p> d — データバスを構成する</p> <p> r — 応答バスを構成する</p> <p> デフォルトでは 3 つすべてのバスを構成します。</p>

setbus(1M)

- c CS0|CS1|CS0,CS1** 使用する CSB を指定します。
- CS0— CS0 を使用するようハードウェアを構成する (degraded モード)
- CS1— CS1 を使用するようハードウェアを構成する (degraded モード)
- CS0,CS1— 両方の CSB を使用するようハードウェアを構成する (normal モード)
- h** ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま
す。

- n** すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは -q オプションとともに使用しない限り表示されます。
- q** 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。
- 単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。
- y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。
- y** すべてのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されます。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

- location* 構成する拡張ボタンスロットを指定します。デフォルトではすべてのスロットを構成します。*location* が複数の場合は、スペースで区切ります。

有効な *location* は、次のとおりです。

EX0-EX17

拡張機能説明

必要なグループ特権

システム内の通信拡張ボタン (SOCX) のセットを再構成するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

ドメイン管理者または構成者が再構成できるのは、自身が特権を持っているドメインに割り当てられている SOCX のみです。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 — すべてのアクティブドメイン上のすべてのバスで CS0 を使用する

```
sc0:sms-user:>setbus -c CS0
```

使用例 2 — すべてのアクティブドメイン上のすべてのバスで両方の CSB を使用する

```
sc0:sms-user:>setbus -c CS0,CS1
```

使用例 3 — すべてのアクティブドメイン上のアドレスバスで CS0 を使用する

```
sc0:sms-user:>setbus -c CS0 -b a
```

使用例 4 — アクティブな EX1 上のアドレスバスおよびデータバスで CS1 を使用する

```
sc0:sms-user:>setbus -c CS1 -b ad EX1
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

setbus(1M)

関連項目

showbus(1M)

名前	setdatasync - データ同期で使用されるデータ伝達リストの変更
形式	<pre>setdatasync [-i interval] -schedule filename setdatasync cancel filename setdatasync push filename setdatasync backup setdatasync -h</pre>
機能説明	<p>setdatasync では、ユーザー作成ファイルのデータ伝達リストへの追加またはリストからの削除を指定できます。データ伝達リストは、メインシステムコントローラからスペアシステムコントローラ (SC) に自動フェイルオーバー用のデータ同期の一部としてコピーするファイルを識別します。指定されたユーザーファイルおよびファイルが存在するディレクトリは、両方の SC のユーザーに対する読み取り書き込み特権を持っている必要があります。</p>
<hr/> <p>注 - データ同期では、/var/opt/SUNWSMS ディレクトリの下にある利用可能ディスク容量を使用してメイン SC からスペア SC にファイルをコピーします。コピーするファイルが /var/opt/SUNWSMS ディレクトリよりも大きい場合は、ファイルを伝達することはできません。たとえば、データ同期バックアップファイル (ds_backup.cpio) が /var/opt/SUNWSMS 内の利用可能容量よりも大きくなった場合は、データ伝達の前にバックアップファイルのサイズを削減する必要があります。sms_backup.cpio ファイルのサイズは、データ同期バックアップファイルのサイズを示します。次のファイルを削除して利用可能ディスク容量を増やすことができます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ /var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages.x ■ /var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/messages.x ■ /var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/post/files <p>x は、ファイルのアーカイブ番号です。これらのファイルはフェイルオーバー後に新しいメイン SC からスペア SC に伝達されているので、メイン SC およびスペア SC の両方からファイルを削除してください。</p> <hr/>	

setdatasync(1M)

データ同期プロセスでは、メイン SC 上のユーザー作成ファイルが変更されているかどうかチェックされます。メイン SC 上のユーザー作成ファイルが最後の伝達以降に変更されている場合は、スペア SC にも再伝達されています。データ同期プロセスで、デフォルトでは、指定したファイルは 60 分ごとにチェックされます。ただし、setdatasync を使用してユーザーファイルの変更をチェックする頻度を指定することができます。

注 - ファイルがメイン SC からスペア SC に伝達された後、ファイルはメイン SC 上のファイルが更新されたときのみスペア SC に再伝達されます。伝達されたファイルをスペア SC から削除すると、そのファイルはメイン SC 上の対応するファイルが更新されるまで自動的に再伝達されません。

setdatasync を使用すると、次のことができます。

- 指定したファイルをデータ伝達リストに追加することなくスペア SC に伝達することができます。
- メイン SC およびスペア SC 上の SC 構成ファイルを再同期することができます。

オプション

次のオプションがサポートされています。

backup	smsbackup(1M) を使用してメイン SC をバックアップし、バックアップデータをメイン SC からスペア SC に移動してスペア SC 上でバックアップデータを復元します。詳細については、smsbackup(1M) を参照してください。
cancel <i>filename</i>	指定したファイルをデータ伝達リストから削除(取り消し)します。指定したファイルはスペア SC には適用されなくなります。このオプションでは指定したファイルが実際にスペア SC から削除されることはありません。ファイル名には絶対パスを含める必要があり、別のファイルへのシンボリックリンクであってはなりません。
-h	ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使⽤します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま
す。

-i interval 指定したファイルが変更されたかどうかをチェックする頻度を示します。デフォルトの間隔は 60 分です。指定できる間隔は、1 から 1440 分 (24 時間) です。

push filename 指定したファイルをデータ伝達リストに追加することなくスベア SC に伝達 (プッシュ) します。ファイル名には絶対パスを含める必要があり、別のファイルへのシンボリックリンクであってはなりません。

schedule filename 指定したファイルをデータ伝達リストに追加します。ファイル名には絶対パスを含める必要があり、別のファイルへのシンボリックリンクであってはなりません。データ同期時には、ファイルはスベア SC の同じ絶対パスへ伝達されます。

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 - ユーザーファイルをメインからスベアに 30 分ごとに適用する

ユーザー指定ファイルへのパスは絶対パスであることが必要であり、シンボリックリンクを含んではなりません。

```
sc0:sms-user:>setdatasync -i 30 schedule /path/filename
```

使用例 2 - データ適用リストからのファイル名の削除

ユーザー指定ファイルへのパスは絶対パスであることが必要であり、シンボリックリンクを含んではなりません。

```
sc0:sms-user:>setdatasync cancel /path/filename
```

setdatasync(1M)

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

showdatasync(1M), smsbackup(1M)

名前	setdate - システムコントローラ (SC) またはドメインの日付と時刻の設定
形式	setdate [-d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>] [-u] [-q] [<i>mmdd</i>]HHMM <i>mmdd</i> HHMM[<i>cc</i>][<i>yy</i>]. <i>SS</i>
機能説明	setdate(1M) を使用すると、SC プラットフォーム管理者は SC またはオプションでドメインの日付と時刻値を設定できます。ドメイン管理者は、これらのドメインに対して日付と時刻を設定することができます。日付と時刻を設定すると、setdate(1M) は現在の日付と時刻を表示します。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 ドメインのキースイッチが OFF または STANDBY の位置にあるときにドメインの時刻 (TOD) を設定します。このオプションは setdate の主な使用方法ではありません。通常、setdate はこのオプションなしで SC の TOD の設定に使用されます。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 ドメインのキースイッチが OFF または STANDBY の位置にあるときにドメインの時刻 (TOD) を設定します。このオプションは setdate の主な使用方法ではありません。通常、setdate はこのオプションなしで SC の TOD の設定に使用されます。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
-q	新しい値を設定した後は現在の日付と時刻を表示しません。
-u	グリニッジ標準時刻 (GMT) を使用して時刻を表示します。デフォルトでは該当地域のタイムゾーンが使用されます。

setdate(1M)

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

[mmd]HHMM[.SS] 日付と時刻のフォーマット。mm は月 (1-12)、dd は日 (1-31)、HH は時 (0-23)、MM は分 (0-59)、SS は秒 (0-59) です。

mmddHHMM[cc]yy[.SS] 日付と時刻のフォーマット。mm は月 (1-12)、dd は日 (1-31)、HH は時 (0-23)、MM は分 (0-59)、cc は世紀から 1 を引いた値、yy は年を 2 桁で表したものの、SS は秒 (0-59) です。

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権またはドメイン管理者特権が必要です。プラットフォーム管理者特権を持っている場合は、自身のドメインに対してのみこのコマンドを実行することができます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 – 太平洋標準時での日付設定

```
sc0:sms-user:>setdate 020210302002.00
System Controller:Sat Feb 2 10:30:00 PST 2002
```

使用例 2 – GMT を使用した日付設定

```
sc0:sms-user:>setdate -u 020218302002.00
System Controller:Sat Feb 2 18:30:00 GMT 2002
```

使用例 3 – ドメイン A の太平洋標準時での日付設定

```
sc0:sms-user:>setdate -u 020218302002.00
Domain a:Sat Feb 2 10:30:00 PST 2002
```

使用例 4 – ドメイン A の GMT を使用した日付設定

```
sc0:sms-user:>setdate -d a -u 020218302002.00
Domain a:Sat Feb 2 18:30:00 GMT 2002
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、setkeyswitch(1M)、showdate(1M)

setdefaults(1M)

名前	setdefaults – 直前にアクティブであったドメインのすべてのインスタンスの削除
形式	setdefaults -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> [-p] [-y] setdefaults -h
機能説明	<p>setdefaults(1M) は、直前にアクティブであったドメインのすべてのインスタンスを削除します。ドメインインスタンスには、ネットワーク情報を除くすべての <i>pcd</i> エントリ、すべてのメッセージ、コンソール、シスログファイルと、オプションですべての <i>NVRAM</i> および起動パラメタが含まれます。<i>pcd</i> エントリと <i>NVRAM</i> および起動パラメタはシステムのデフォルト設定に戻ります。IDPROM データは影響を受けません。</p> <p>一度に処理できるのは 1 つのドメインのみです。ドメインはアクティブにしないで、仮想キースイッチは <i>off</i> に設定する必要があります。それ以外の場合は、setdefaults がエラーとともに終了します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/> <p>-n すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。</p> <p>-p <i>NVRAM</i> および起動パラメタデータを保持します。デフォルトでは、<i>NVRAM</i> および起動パラメタデータを削除するかどうか尋ねられます。-p オプションが使用されている場合は、プロンプトは表示されずにデータが保持されます。</p> <p>-y すべてのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。</p>

拡張機能説明	このコマンドを実行するには、指定されたドメインに対するプラットフォーム管理者特権またはドメイン管理者特権が必要です。
必要なグループ特権	詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。
使用例	<p>使用例 1 – ドメイン A に対するドメイン、NVRAM および起動パラメタのプロンプト付きデフォルトの設定</p> <pre>sc0:sms-user:>setdefaults -d a Are you sure you want to remove domain info? y Do you want to remove NVRAM and boot parameter data? y</pre>
	<p>使用例 2 – ドメイン A に対するプロンプトなしで NVRAM および起動パラメタデータを保持するデフォルトの設定</p> <pre>sc0:sms-user:>setdefaults -d a -p -y</pre>
	<p>使用例 3 – ドメイン A に対するプロンプトなしで NVRAM および起動パラメタデータを保持しないデフォルトの設定</p> <pre>sc0:sms-user:>setdefaults -d a -y</pre>
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> 0 正常に終了しました。 1 無効なドメインが指定されました。 2 無効なオプションが入力されました。 3 ドメインがないか、または複数のドメインが指定されました。 4 ユーザーが有効なアクセス権を持っていません。 5 キースイッチが無効な位置にあります。 6 ドメインが現在アクティブです。 7 pcd への接続中にエラーが発生しました。 8 m1d への接続中にエラーが発生しました。

setdefaults(1M)

ファイル

9 osd への接続中にエラーが発生しました。

10 内部エラーが発生しました。

11 ユーザーが操作を取り消しました。

このコマンドでは次のファイルが影響を受けます。

`/var/opt/SUNWSMS/.pcd/domain_info`

ドメイン pcd 情報ファイル。

`/var/opt/SUNWSMS/.pcd/sysboard_info`

プラットフォーム pcd 情報ファイル。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/console`

ドメインコンソールログファイル。最大 10 までのメッセージファイルを一度にシステム上に格納できます (console.0 から console.9)。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/messages`

ドメインログファイル。最大 10 までのメッセージファイルを一度にシステム上に格納できます (message.0 から message.9)。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/syslog`

ドメインシスログファイル。最大 10 までのメッセージファイルを一度にシステム上に格納できます (syslog.0 から syslog.9)。

`/var/opt/SUNWSMS/data/domain_id/bootparamdata`

ドメイン起動パラメタ情報ファイル。

`/var/opt/SUNWSMS/data/domain_id/nvramdata`

ドメイン nvram 情報ファイル。

setdefaults(1M)

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、mld(1M)、osd(1M)、pcd(1M)、setobpparams(1M)
showobpparams(1M)

setfailover(1M)

名前	setfailover - システムコントローラ (SC) フェイルオーバーメカニズムの状態の変更
形式	setfailover on off force setfailover -h
機能説明	setfailover(1M) は、SC フェイルオーバーメカニズムの状態を変更する機能です。
オプション	次のオプションがサポートされています。 force フェイルオーバーをスペア SC に強制します。スペア SC が利用可能であることが必要です。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> 注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。 <hr/>
	off フェイルオーバーメカニズムを使用不可にします。これにより、メカニズムが再び使用可能になるまでフェイルオーバーが行われません。
	on フェイルオーバーまたはオペレータの要求によって以前にフェイルオーバーを使用不可にしたシステムのフェイルオーバーを使用可能にします。on は、フェイルオーバーのみを再び使用可能にするようコマンドに指示します。フェイルオーバーを再び使用可能にできない場合は、後続の showfailover コマンドの使用により使用可能を妨げている現在のエラーを示します。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

これらのコマンドは正常に完了した場合は何も出力しません。アクションを実行できなかった場合に、エラーメッセージが表示されます。

使用例 1 – フェイルオーバーをオンにする

```
sc0:sms-user:>setfailover on
```

使用例 2 – フェイルオーバーをオフにする

```
sc0:sms-user:>setfailover off
```

使用例 3 – フェイルオーバーを強制する

```
sc0:sms-user:>setfailover force
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

showfailover(1M)

setkeyswitch(1M)

名前	setkeyswitch – 仮想キースイッチ位置の変更
形式	setkeyswitch -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> [-q] [-y -n] [on standby off diag secure] setkeyswitch -h
機能説明	<p>setkeyswitch(1M) は、仮想キースイッチの位置を指定した値に変更します。setkeyswitch は、ボードの電源の投入/停止とドメインの起動に使用します。詳細については、「オペランド」を参照してください。</p> <p>指定したドメインが自動システム回復 (ASR) ブラックリストファイルにボードを含んでいる場合は、エラーメッセージが表示されて setkeyswitch が続行されません。</p> <p>各仮想キースイッチの状態はシステムコントローラ (SC) の電源の再投入の間または pcd(1M) による電源供給の物理的電源再投入によって維持されます。showkeyswitch を使用して仮想キースイッチの現在の位置を表示します。</p>
オプション	<hr/> <p>注 - -y および -n は、setkeyswitch(1M) コマンドに対するオプションの引数です。オプションの引数の 1 つが指定されていない場合は、on、diag、または secure 位置から off または standby 位置に変更するときに setkeyswitch によって、確認プロンプトが表示されます。</p> <hr/> <p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>

- n 全てのプロンプトに自動的に「no」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されません。
- q 非出力。プロンプトを含むすべての stdout へのメッセージを抑制します。
- 単独で使用されると、-q はデフォルトですべてのプロンプトに対して -n オプションを指定します。
- y オプションまたは -n オプションのどちらかとともに使用すると、-q ではすべてのユーザープロンプトを抑制し、選択したオプションに基づいて自動的に「y」または「n」のどちらかで応答します。
- y 全てのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。プロンプトは、-q オプションとともに使用しない限り表示されません。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

- on off または standby 位置からは、on はドメインに割り当てられているすべてのボードの電源をオンにします (電源がオンになっていない場合)。それによりドメインがアクティブになります。
- diag 位置からは、on は位置が変更されるだけですが、次にドメインを再起動したときに post が冗長で起動されることなく diag レベルがデフォルト値に設定されます。
- secure 位置からは、on はドメインへの書き込みアクセス権を復元します。
- standby off 位置からは、standby はドメインに割り当てられているすべてのボードの電源をオンにします (電源がオンになっていない場合)。
- on、diag、または secure 位置からは、standby はオプションで確認プロンプトを表示し、ドメインが正常にシャットダウンされます。ボードの電源は入ったままになります。

setkeyswitch(1M)

off	<p>on、diag、または secure 位置からは、off はオプションで確認プロンプトを表示し、すべてのボードが低電源モードになります。</p> <p>standby 位置からは、off はすべてのボードを低電源モードにします。</p>
diag	<p>off または standby 位置からは、diag はドメインに割り当てられているすべてのボードの電源をオンにします (電源がオンになっていない場合)。次にドメインが on 位置にあるときのようにアクティブになりますが、post が冗長で起動され、diag レベルがデフォルト値に設定されます。</p> <p>on 位置からは、diag は位置が変更されるだけですが、次にドメインを再起動したときに post が冗長で起動され、diag レベルがデフォルト値に設定されます。</p> <p>secure 位置からは、diag はドメインへの書き込みアクセス権を復元して次にドメインを再起動したときに post が冗長で起動され、diag レベルがデフォルト値に設定されます。</p>
secure	<p>off または standby 位置からは、secure はドメインに割り当てられているすべてのボードの電源をオンにします (電源がオンになっていない場合)。次にドメインが on 位置にあるときのようにアクティブになりますが、secure 位置がドメインへの書き込みアクセス権を削除して、たとえば、flashupdate および reset が機能しなくなります。</p> <p>on 位置からは、secure は上記のようにドメインへの書き込みアクセス権を削除します。</p> <p>diag 位置からは、secure は上記のようにドメインへの書き込みアクセス権を削除して次にドメインを再起動したときに post が冗長で起動され、diag レベルがデフォルト値に設定されます。</p>

拡張機能説明	このコマンドを実行するには、指定したドメインに対するドメイン管理者特権が必要です。				
必要なグループ特権	詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。				
使用例	使用例 1 – ドメイン A のキースイッチのオン設定				
	<code>sc0:sms-user:> setkeyswitch -d A on</code>				
	使用例 2 – ASR ブラックリストファイルにボードを含むドメイン上のキースイッチの使用				
	<code>sc0:sms-user:>setkeyswitch -d A on</code>				
	SB0 is in the ASR Blacklist.				
終了ステータス	次の終了値が返されます。				
	0 正常に終了しました。				
	0 以外 エラーが発生しました。				
ファイル	このコマンドでは次のファイルが使用されます。				
	/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist				
	esmd によって除外されるコンポーネントの一覧。				
	<hr/> 注 – このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。 <hr/>				
属性	次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。				
	<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="500 1499 737 1549">属性タイプ</th> <th data-bbox="737 1499 977 1549">属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="500 1549 737 1608">Availability</td> <td data-bbox="737 1549 977 1608">SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	addtag(1M)、esmd(1M)、flashupdate(1M)、pcd(1M)、reset(1M)、showkeyswitch(1M)				

setobpparams(1M)

名前	setobpparams – ドメインの OpenBoot PROM 変数の設定
形式	setobpparams -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> <i>param=value</i> ... setobpparams -h
機能説明	<p>setobpparams(1M) を使用すると、ドメイン管理者は、setkeyswitch(1M) によって OpenBoot PROM に渡される仮想 NVRAM および REBOOT 変数を設定できます。-d オプションと <i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i> が必要です。変更内容を有効にするにはドメインを再起動する必要があります。</p> <p>このコマンドはエラー回復用であり、日常のシステム管理用ではありません。詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 4 章を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されます。</p> <hr/>
オペランド	<p>次のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>param=value</i> NVRAM および REBOOT 変数値。有効な変数は、次のとおりです。</p> <p> diag-switch? auto-boot? fcode-debug? use-nvramrc? security-mode</p>

セキュリティーモードを除くすべてに対して有効な変数値は次のとおりです。

```
true
false
```

セキュリティーモードに対して有効な変数値は次のとおりです。

```
none
command
full
```

各変数値の説明は次のとおりです。

```
none - パスワードは必要ありません (デフォルト)
command - boot(1M) と go 以外のすべてのコマンドでパスワードが必要
full - go 以外のすべてのコマンドでパスワードが必要
```

注 - セキュリティーパスワードを忘れないこと、セキュリティーモードを設定する前にセキュリティーパスワードを設定することが重要です。このパスワードを忘れた場合は、システムを使用することはできなくなります。システムを再び起動するにはベンダーのカスタマサポートサービスにお問い合わせください。security-mode およびその他の OpenBoot PROM 変数の詳細については、『OpenBoot 4.x Command Reference Manual』を参照してください。

注 - ほとんどのシェルでは、変数値を単一引用符で囲んで '?' が特殊文字として処理されるのを防ぎます。以下の例を参照してください。

拡張機能説明

必要なグループ特権

指定されたドメインについて、ドメイン管理者または設定者の特権を持っている必要があります。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

setobpparams(1M)

使用例 | 使用例 1 — ドメイン A に対する OpenBootPROM 変数 diag-switch のオン設定

```
sc0:sms-user:>setobpparams -d a 'diag-switch?=true'
```

使用例 2 — ドメイン A に対する OpenBootPROM 変数 security-mode の Full 設定

```
sc0:sms-user:>setobpparams -d a 'security-mode=full'
```

終了ステータス | 次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性 | 次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目 | addtag(1M)、setkeyswitch(1M)、showobpparams(1M)

名前	setupplatform - ドメインの使用可能構成要素リストの設定
形式	<pre>setupplatform [-d domain_id domain_tag [-a -r] location [location]...] setupplatform [-d domain_id domain_tag location [location]...] setupplatform [-d domain_id domain_tag -] setupplatform -h</pre>
機能説明	<p>setupplatform(1M) は、ドメインの使用可能構成要素リストを設定します。<i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> が指定されている場合は、ボードのリストを指定する必要があります。空のボードは '-' と指定できます。<i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> が指定されていない場合は、コマンドプロンプトで現在の値が "[]" 内に表示されます。パラメタに対して値が指定されていない場合は、現在の値が保持されます。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-a ドメインの使用可能構成要素リストにスロットを追加します。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag (1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/> <p>-r ドメインの使用可能構成要素リストからスロットを削除します。</p> <p>- 使用可能構成要素リスト全体を消去します。</p>

setupplatform(1M)

オペランド	次のオペランドがサポートされています。 <i>location</i> ボード位置で、スペースで区切ります。 次の <i>location</i> 形式が使用できます。 SB(0...17) IO(0...17)
拡張機能説明	
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。
使用例	setupplatform を実行した後は、setupplatform(1M) を使用して使用可能構成要素リストを表示します。 使用例 1 – すべてのドメイン用の使用可能構成要素リストの設定 sc0:sms-user:> setupplatform Available component list for domain domainA [SB3 SB2 SB1 IO5 IO4 IO3]? -r SB1 Are you sure[no]: (yes/no)? y Available for domain DomainB [SB6 SB4 SB1 IO3 IO2]? - Are you sure[no]: (yes/no)? y Available for domain C [SB7 SB5 IO8 IO7]? -a SB17 SB16 Available for domain D [SB9 SB8 SB4 SB2 IO6 IO5 IO1]? Available for domain E [SB0 IO0]? Available for domain F []? Available for domain G []? Available for domain H []? Available for domain I []? Available for domain J []? Available for domain K []? Available for domain L []? Available for domain M []? Available for domain N []? Available for domain O []? Available for domain P []? Available for domain Q []? Available for domain R []? sc0:sms-user:> showplatform -p available Available for domain DomainA: SB3 SB2 IO5 IO4 IO3 Available for domain DomainB: None None

Available for domain DomainC:
SB17 SB16 SB7 SB5
IO8 IO7

Available for domain D:
SB9 SB8 SB4 SB2
IO6 IO5 IO1

Available for domain E:
SB0
IO0

Available for domain DomainF:
None
None

Available for domain DomainG:
None
None

Available for domain DomainH:
None
None

Available for domain I:
None
None

Available for domain J:
None
None

Available for domain DomainK:
None
None

Available for domain L:
None
None

Available for domain M:
None
None

Available for domain N:
None
None

Available for domain O:
None
None

Available for domain P:
None
None

setupplatform(1M)

Available for domain Q:
None
None

Available for domain R:
None
None

使用例 2 – ドメイン engB 用の使用可能構成要素リストの SB0、IO1、IO2 のボードへの設定

```
sc0:sms-user:>setupplatform -d engB SB0 IO1 IO2
```

使用例 3 – engB 使用可能構成要素リスト内のすべてのボードの消去

```
sc0:sms-user:>setupplatform -d engB -
```

使用例 4 – SB0 および IO2 での engB 使用可能構成要素リストへのボードの追加

```
sc0:sms-user:>setupplatform -d engB -a SB0 IO2
```

使用例 5 – SB3 および IO3 での engB 使用可能構成要素リストからのボードの削除

```
sc0:sms-user:>setupplatform -d engB -r SB3 IO3
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、showplatform(1M)

名前	showboards – ボードの割り当て情報と状態の表示
形式	showboards [-d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>] [-v] showboards -h
機能説明	showboards(1M) は、ボードの割り当てを表示します。 <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> が指定されている場合、このコマンドでは指定ドメインにどのボードが assigned または available かを表示します。 -v オプションが使用されている場合、showboards では cpu、dpu、iobd、csb、exb、などの ドメイン構成ユニット (DCU) を含むすべてのコンポーネントとシステムコントローラ (SC) を表示します。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> 注 - 単一で使用します。 -h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。 <hr/>
	-v DCU を含むすべてのコンポーネントを表示します。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、指定されたドメインに対するプラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。 プラットフォーム管理者特権： ■ オプションが何も指定されていない場合、showboards では assigned または available な DCU を含むすべてのコンポーネントを表示します。

showboards(1M)

- *domain_id* | *domain_tag* が指定されている場合、showboards では指定ドメインに assigned または available な DCU に関する情報を表示します。他のドメインに assigned されている DCU は、表示されません。
- *-v* オプションが指定されている場合、showboards では、すべての assigned または available な DCU に関する情報を表示します。また、showboards ではその他すべてのコンポーネントに関する情報も表示します。
- *domain_id* | *domain_tag* および *-a* オプションが指定されている場合、showboards では指定ドメインに assigned または available な DCU に関する情報を表示します。また、showboards ではその他すべてのコンポーネントに関する情報も表示します。他のドメインに assigned されている DCU は、表示されません。

ドメイン管理者または構成者特権：

- オプションが何も指定されていない場合、showboards では assigned または available な DCU を含む、ユーザーが特権を持つすべてのドメイン用のすべてのボードを表示します。
- *domain_id* | *domain_tag* が指定されている場合、showboards では指定ドメインに assigned および available な DCU に関する情報を表示します。他のドメインに assigned されている DCU は、表示されません。Available DCU は、ドメインの使用可能構成要素リスト内にあるボードです。setupplatform(1M) および showplatform(1M) を参照してください。指定したドメインに対するドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権が必要です。
- このユーザーは *-v* オプションを利用できません。

Pwr フィールド内の状態

Pwr フィールドには、次の 3 つの値の中の 1 つが含まれます。

On	= フル電圧
Off	= 電圧なし
Min	= 電圧あり
Unk	= 不明。ボードの電源状態を判別できません。
—	= スロットが空で該当する電源の状態がありません。

Min は、ボードが使用されていることを示すのではなく、単にボード上で電圧が検出されたことを意味します。電源が入れられるまで使用しないでください。反対に、電源を切るまではシステムから取り外さないでください。

Board Status フィールドには、次の 4 つの中のいずれかの値が含まれます。

Active	= ボードはドメインに割り当てられ、POST を通過していません。
Assigned	= ボードはドメインに割り当てられています。
Available	= ボードはドメインに割り当てることができます。
—	= ドメイン割り当てまたはアクティビティがこのボードに適応していません。

Test Status フィールドには、次の 6 つの中のいずれかの値が含まれます。

Passed	= ボードが POST を通過しました。
Degraded	= ボードが degraded モードです。
Failed	= ボードが POST に失敗しました。
iPOST	= ボードが POST 中です。
Unknown	= ボードはテストされていません。
—	= このボードのテスト状態がありません。

Domain フィールドには、次の 4 つの中のいずれかの値が含まれます。

domain_id	= ドメインの ID。
domain_tag	= addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられた名前。
Isolated	= ボードはどのドメインにも割り当てられていません。
—	= ドメイン割り当てはこのボードには適用されません。

showboards(1M)

使用例

使用例 1 - プラットフォーム管理者用の showboards

```
sc0:sms-user:> showboards
```

Location	Pwr	Type of Board	Board Status	Test Status	Domain
SB0	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB1	On	CPU	Active	Passed	A
SB2	On	CPU	Active	Passed	A
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB7	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB9	On	CPU	Active	Passed	dmnJ
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB14	Off	CPU	Assigned	Failed	domainC
SB15	On	CPU	Active	Passed	P
SB16	On	CPU	Active	Passed	Q
SB17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO1	On	HPCI	Active	Passed	A
IO2	On	HPCI	Active	Passed	engB
IO3	On	HPCI	Active	Passed	domainC
IO4	On	HPCI	Available	Degraded	domainC
IO5	Off	HPCI	Available	Unknown	Isolated
IO6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO7	On	HPCI	Active	Passed	dmnJ
IO8	On	WPCI	Active	Passed	Q
IO9	On	HPCI	Active	Passed	dmnJ
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO12	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO14	Off	HPCI	Available	Unknown	Isolated
IO15	On	HPCI	Active	Passed	P
IO16	On	HPCI	Active	Passed	Q
IO17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR

使用例 2 – ドメイン B 用のプラットフォーム管理者用の showboards

次の例では、プラットフォーム管理者特権を持っていてドメインを指定した場合の showboards 出力を示します。出力には他のドメインに割り当てられているドメインは含まれません。

```
sc0:sms-user:> showboards -d b
```

Location	Pwr	Type of Board	Board Status	Test Status	Domain
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO2	On	HPCI	Active	Passed	engB
IO5	Off	HPCI	Available	Unknown	Isolated
IO6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO12	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO14	Off	HPCI	Available	Unknown	Isolated

使用例 3 – -v オプションを使用したプラットフォーム管理者用の showboards

次の例では、プラットフォーム管理者特権を持っていて -v オプションを使用した場合の showboards 出力を示します。このコマンドはすべてのコンポーネントを示します。

```
sc0:sms-user:> showboards -v
```

Location	Pwr	Type of Board	Board Status	Test Status	Domain
SC0	On	SC	Slave	-	-
SC1	On	SC	Master	-	-
PS0	On	PS	-	-	-
PS1	On	PS	-	-	-
PS2	On	PS	-	-	-
PS3	-	Empty Slot	-	-	-
PS4	Off	PS	-	-	-
PS5	On	PS	-	-	-
FT0	On	FT	-	-	-
FT1	On	FT	-	-	-
FT2	On	FT	-	-	-
FT3	On	FT	-	-	-

showboards(1M)

FT4	On	FT	-	-	-
FT5	-	Empty Slot	-	-	-
FT6	Off	FT	-	-	-
FT7	On	FT	-	-	-
CS0	On	CSB	-	-	-
CS1	On	CSB	-	-	-
EX0	On	EXB	-	-	-
EX1	On	EXB	-	-	-
EX2	On	EXB	-	-	-
EX3	On	EXB	-	-	-
EX4	On	EXB	-	-	-
EX5	On	EXB	-	-	-
EX6	-	Empty Slot	-	-	-
EX7	On	EXB	-	-	-
EX8	On	EXB	-	-	-
EX9	On	EXB	-	-	-
EX10	On	EXB	-	-	-
EX11	On	EXB	-	-	-
EX12	-	Empty Slot	-	-	-
EX13	-	Empty Slot	-	-	-
EX14	Off	EXB	-	-	-
EX15	On	EXB	-	-	-
EX16	On	EXB	-	-	-
EX17	On	EXB	-	-	-
IO1/C3V0	On	C3V	-	-	A
IO1/C5V0	On	C5V	-	-	A
IO1/C3V1	On	C3V	-	-	A
IO1/C5V1	On	C5V	-	-	A
IO2/C3V0	On	C3V	-	-	engB
IO2/C5V0	On	C5V	-	-	engB
IO2/C3V1	On	C3V	-	-	engB
IO2/C5V1	On	C5V	-	-	engB
IO3/C3V0	On	C3V	-	-	domainC
IO3/C5V0	On	C5V	-	-	domainC
IO3/C3V1	-	Empty Slot	-	-	domainC
IO3/C5V1	-	Empty Slot	-	-	domainC
IO4/C3V0	On	C3V	-	-	domainC
IO4/C5V0	On	C5V	-	-	domainC
IO4/C3V1	On	C3V	-	-	domainC
IO4/C5V1	On	C5V	-	-	domainC
IO5/C3V0	On	C3V	-	-	Isolated
IO5/C5V0	On	C5V	-	-	Isolated
IO5/C3V1	On	C3V	-	-	Isolated
IO5/C5V1	On	C5V	-	-	Isolated
IO7/C3V0	On	C3V	-	-	dmmJ
IO7/C5V0	On	C5V	-	-	dmmJ
IO7/C3V1	On	C3V	-	-	dmmJ
IO7/C5V1	On	C5V	-	-	dmmJ
IO8/C3V0	On	C3V	-	-	A
IO8/C5V0	On	C5V	-	-	A
IO8/C3V1	On	C3V	-	-	A
IO8/C5V1	On	C5V	-	-	A
IO9/C3V0	On	C3V	-	-	dmmJ
IO9/C5V0	On	C5V	-	-	dmmJ
IO9/C3V1	On	C3V	-	-	dmmJ
IO9/C5V1	On	C5V	-	-	dmmJ
IO10/C3V0	On	C3V	-	-	engB

showboards(1M)

IO10/C5V0	On	C5V	-	-	engB
IO10/C3V1	On	C3V	-	-	engB
IO10/C5V1	On	C5V	-	-	engB
IO11/C3V0	On	C3V	-	-	engB
IO11/C5V0	On	C5V	-	-	engB
IO11/C3V1	On	C3V	-	-	engB
IO11/C5V1	On	C5V	-	-	engB
IO14/C3V0	On	C3V	-	-	Isolated
IO14/C5V0	On	C5V	-	-	Isolated
IO14/C3V1	On	C3V	-	-	Isolated
IO14/C5V1	On	C5V	-	-	Isolated
IO15/C3V0	On	C3V	-	-	P
IO15/C5V0	On	C5V	-	-	P
IO15/C3V1	On	C3V	-	-	P
IO15/C5V1	On	C5V	-	-	P
IO16/C3V0	On	C3V	-	-	Q
IO16/C5V0	On	C5V	-	-	Q
IO16/C3V1	On	C3V	-	-	Q
IO16/C5V1	On	C5V	-	-	Q
SB0	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB1	On	CPU	Active	Passed	A
SB2	On	CPU	Active	Passed	A
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB7	On	CPU	Active	Passed	domainC
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB9	On	CPU	Active	Passed	dmnJ
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB14	Off	CPU	Assigned	Failed	domainC
SB15	On	CPU	Active	Passed	P
SB16	On	CPU	Active	Passed	Q
SB17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO1	On	HPCI	Active	Passed	A
IO2	On	HPCI	Active	Passed	engB
IO3	On	HPCI	Active	Passed	domainC
IO4	On	HPCI	Available	Degraded	domainC
IO5	Off	HPCI	Available	Unknown	Isolated
IO6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO7	On	HPCI	Active	Passed	dmnJ
IO8	Off	HPCI	Assigned	Unknown	A
IO9	On	HPCI	Assigned	iPOST	dmnJ
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO12	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO14	Off	HPCI	Available	Unknown	Isolated
IO15	On	HPCI	Active	Passed	P
IO16	On	HPCI	Active	Passed	Q
IO17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR

使用例 4 – ドメイン B、J、R に対する特権を持つドメイン管理者用の showboards

次の例では、ドメイン B、J、R に対するドメイン特権を持っている場合の showboards 出力を示します。showboards は、ドメイン B、J、R に assigned または available なボードの情報を表示します。他のドメインに assigned されているボードまたはドメイン B、J、R の使用可能構成要素リストに表示されないドメインは、表示されません。

```
sc0:SMS-user:> showboards
```

Location	Pwr	Type of Board	Board Status	Test Status	Domain
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB
SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB9	On	CPU	Active	Passed	dmnJ
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO2	On	HPCI	Active	Passed	engB
IO5	Off	HPCI	Available	Unknown	Isolated
IO6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO7	On	HPCI	Active	Passed	dmnJ
IO9	On	HPCI	Assigned	iPOST	dmnJ
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB
IO17	-	Empty Slot	Assigned	-	dmnR

使用例 5 – ドメイン B 用のドメイン管理者用の showboards

次の例では、showboards は、ドメイン B、J、R に対するドメイン特権を持っている場合の出力を示します。このコマンドは、指定したドメインに assigned または available な DCU のボードの情報を表示します。他のドメインに assigned されている DCU または指定したドメインの使用可能構成要素リストに表示されないドメインは、表示されません。

```
sc0:SMS-user:> showboards -d b
```

Location	Pwr	Type of Board	Board Status	Test Status	Domain
SB3	On	CPU	Active	Passed	engB
SB4	On	CPU	Active	Passed	engB

showboards(1M)

SB5	On	CPU	Active	Passed	engB
SB6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB8	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB10	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB11	Off	CPU	Available	Unknown	Isolated
SB12	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
SB13	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO0	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO2	On	HPCI	Active	Passed	engB
IO5	Off	HPCI	Available	Unknown	Isolated
IO6	-	Empty Slot	Available	-	Isolated
IO10	Off	HPCI	Assigned	Unknown	engB
IO11	Off	HPCI	Assigned	Failed	engB

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 無効なドメインが指定されました。
- 2 無効なコマンド行オプションが指定されました。
- 3 不正な数のドメインが指定されました。
- 4 ユーザーが有効な特権を持っていません。
- 5 内部エラーが発生しました。
- 6 ボード情報の取得中にエラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、setupplatform(1M)、showplatform(1M)

showbus(1M)

名前	showbus - アクティブドメイン内の拡張ボタンのバス構成を表示
形式	showbus [-v] showbus -h
機能説明	showbus(1M) は、アクティブドメイン内の拡張ボタンのバス構成を表示します。この情報は、スロット順序 EX0-EX17 で構成を表示するようデフォルト設定されます。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> 注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。 <hr/>
	-v 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。拡張ボタン構成に加えて、ドメイン、ドメインキースイッチ位置、スロット 0 およびスロット 1 ボード割り当てが表示されます。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	システム内の通信拡張ボタン (SOCX) のすべてのセットを表示するには、プラットフォームの管理者特権、オペレータ特権または保守特権が必要です。 ドメイン管理者または構成者が表示できるのは、自身が特権を持っているドメインに割り当てられている SOCX のみです。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 - すべてのドメインに対する showbus 表示

この表示はプラットフォーム管理者のデフォルトです。ドメイン管理者または構成者は、これを表示するにはすべてのドメインに対する特権を持っている必要があります。それ以外の場合は、ユーザーが特権を持っているドメインのみが表示されます。

```
sc0:sms-user:> showbus
Location  Data          Address      Response     SOCX
-----
EX0       CS0           CS1          CS0          0x0001
EX1       UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX2       UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX3       UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX4       CS0,CS1     CS0,CS1     CS0,CS1     0x14010
EX5       UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX6       UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX7       UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX8       UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX9       UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX10      UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX11      UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX12      UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX13      UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX14      CS0,CS1     CS0,CS1     CS0,CS1     0x14010
EX15      UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
EX16      CS0,CS1     CS0,CS1     CS0,CS1     0x14010
EX17      UNCONF       UNCONF      UNCONF      UNCONF
```

使用例 2 - -v を使用したすべてのドメインに対する showbus 表示

```
sc0:sms-user:> showbus -v
-----
SOCX:0x14010
-----
  Data:CS0,CS1
  Address:CS0,CS1
  Response:CS0,CS1
-----
Domain:A keyswitch:ON
Location:EX4 SB4:active O4 :active
Location:EX14          IO14:active
Location:EX16          IO16:active
```

showbus(1M)

```
-----  
SOCX:0x00001  
-----  
    Data:CS0  
    Address:CS1  
    Response:CS0  
-----  
Domain:B keyswitch:ON  
    Location:EX0 SB0:active IO0:active  
  
-----  
UNCONFIGURED  
-----  
Domain:A keyswitch:ON  
    Location:EX6 SB6:unknown
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

setbus(1M)

名前	showcmdsyc – 現在のコマンド同期リストの表示
形式	showcmdsyc [-v] showcmdsyc -h
機能説明	<p>showcmdsyc は、SC のフェイルオーバー後に再起動する必要があるコマンドまたはスクリプトを判別するためにスペアシステムコントローラ (SC) で使用されるコマンド同期リストを表示します。</p> <p>コマンド同期リストは <i>Descriptor</i>、<i>Identifier</i>、<i>Cmd</i> フォーマットで表示されます。</p> <p><i>Descriptor</i> 特定のスクリプトを表すコマンド同期記述子です。</p> <p><i>Identifier</i> 自動フェイルオーバーが発生した後にスクリプトを新しいメイン SC 上に再開可能なスクリプト内のマーカーポイントを識別します。識別子 -1 は、スクリプトがマーカーポイントを持っていないことを示します。</p> <p><i>Cmd</i> 再開するスクリプトの名前です。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。</p> <hr/> <p>-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。</p>
拡張機能説明	
必要なグループ特権	<p>このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。</p> <p>詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。</p>

showcmdsyc(1M)

使用例

使用例 1 - コマンド同期リストの例

```
sc0:sms-user:> showcmdsyc
```

```
DESCRIPTOR      IDENTIFIER      CMD
                0                -1      c1 a1 a2
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

cancelcmdsyc(1M)、initcmdsyc(1M)、runccmdsyc(1M)、
savecmdsyc(1M)

名前	showcomponent - コンポーネントのブラックリスト状態の表示
形式	showcomponent [-a -d <i>domain_tag</i> <i>domain_id</i>] [-v] [<i>location</i> ...] showcomponent -h
機能説明	<p>showcomponent(1M) は、指定したコンポーネントがプラットフォーム、ドメイン、または ASR ブラックリストファイルにリストされているかどうかを表示します。</p> <p>-a または -d オプションのいずれも指定していない場合は、showcomponent はプラットフォームブラックリストを表示します。<i>location</i> が指定されていない場合は、showcomponent では指定したブラックリスト内のすべてのコンポーネントを表示します。</p> <p><i>blacklist</i> は、POST が起動時に使用できないコンポーネントを一覧表示した内部ファイルです。POST はシステムを起動用に準備する前にブラックリストファイルを読み取り、OpenBoot PROM とともに正常にテストが完了したコンポーネントのみのリストを渡します。ブラックリストにあるファイルは除外されます。</p> <p>SMS では、ドメインボード用、プラットフォームボード用、内部自動システム回復 (ASR) ブラックリストの 3 つのブラックリストをサポートします。</p> <p>プラットフォームおよびドメインブラックリストの使用および編集に関する詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 7 章を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-a ASR ブラックリストを指定します。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。このオプションはドメインブラックリストを指定します。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag (1M) を使用してドメインに割り当てられる名前です。このオプションはドメインブラックリストを指定します。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p>

オペランド

注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。

-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。

次のオペランドがサポートされています。

location コンポーネントの場所。次のいずれかの形式で、スラッシュで区切って指定します。

```
board_loc/proc/bank/logical_bank
board_loc/proc/bank/all_dimms_on_that_bank
board_loc/proc/bank/all_banks_on_that_proc
board_loc/proc/bank/all_banks_on_that_board
board_loc/proc
```

```
board_loc/procs
```

```
board_loc/cassette
```

```
board_loc/bus
```

```
board_loc/paroli_link
```

location 引数が複数の場合は、スペースで区切ります。

location 形式は、オプションであり、特定の位置にあるボード上の特定のコンポーネントを指定するために使用されます。

たとえば、*location* が SB5/P0/B1/L1 の場合、SB5 にあるプロセッサ 0 上のバンク 1 の論理バンク 1 を示します。*location* が SB0/PP1 の場合、SB0 にあるプロセッサペア 1 を示します。*location* が CS0/ABUS1 の場合、CS0 にあるアドレスバス 1 を示します。

次の *board_loc* 形式が使用できます。

```
SB(0...17)
```

```
IO(0...17)
```

```
CS(0|1)
```

```
EX(0...17)
```

プロセッサ位置は、単一のプロセッサまたはプロセッサペアを示します。

1枚のCPU/メモリーボードでは、4つのプロセッサが使用できます。ボード上のプロセッサペアは、procs 0 と 1、および procs 2 と 3 です。

MaxCPU には、procs 0 と 1、および 1 つのみの proc ペア (PP0) の 2 つのプロセッサがあります。このボードに PP1 を使用すると、disablecomponent が終了し、エラーメッセージが表示されます。

次の *proc* 形式が使用できます。

P(0...3) PP(0|1)

次の *bank* 形式が使用できます。

B(0|1)

次の *logical_bank* 形式が使用できます。

L(0|1)

次の *all_dimms_on_that_bank* 形式が使用できます。

D

次の *all_banks_on_that_proc* 形式が使用できます。

B

次の *all_banks_on_that_board* 形式が使用できます。

B

次の *paroli_link* 形式が使用できます。

PAR(0|1)

hsPCI アセンブリには、ホットスワップ可能なカセットが含まれます。

showcomponent(1M)

拡張機能説明 必要なグループ特権

使用例

次の *hsPCI* 形式が使用できます。

C(3|5)V(0|1)

バス位置には、アドレス、データおよび応答の 3 つがあります。

次の *bus* 形式が使用できます。

ABUS|DBUS|RBUS (0|1)

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。ドメイン特権を持っている場合は、特権を持っているドメインに対してのみこのコマンドを実行することができます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例 1 – SB0 が ASR ブラックリストにあるかどうかの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -a SB0
Component SB0 is disabled: #High Voltage
```

使用例 2 – ドメイン B 内の 4 ボード/コンポーネントがブラックリストにあるかどうかの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -dB IO4/PP0 SB5 IO6/C5V0 EX7/ABUS0
Component IO4/PP0 is disabled:#High temp
Component SB5 is disabled:<no reason given>
Component IO6/C5V0 is NOT disabled.
Component EX7/ABUS0 is NOT disabled.
```

使用例 3 – ドメイン B 内の IO7 上の論理バンクがブラックリストに登録されているかどうかの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -dB IO7/P0/B1/L0
Component IO7/P0/B1/L0 is disabled:<no reason given>
```

使用例 4 – すべてのプラットフォームブラックリスト掲載コンポーネントの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent
Component SB0 is disabled:#High temp
Component SB3 is disabled:
Component IO2 is disabled. <no reason given>
```

使用例 5 – ドメイン B のブラックリストに含まれる全コンポーネントの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -dB
Component IO4/PP0 is disabled: #High temp
Component SB5 is disabled:<no reason given>
```

使用例 6 – ASR ブラックリストに含まれる全コンポーネントの表示

```
sc0:sms-user:> showcomponent -a
Component SB0 is disabled: #High temp
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/asr/blacklist
```

esmd によって除外されたコンポーネントのリスト。

注 – このファイルは内部で作成されて使用されます。手動で編集しないでください。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/platform/blacklist
```

除外されるプラットフォームコンポーネントの一覧。

```
/etc/opt/SUNWSMS/config/domain_id/blacklist
```

除外されるドメインコンポーネントの一覧。

showcomponent(1M)

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

enablecomponent(1M)、disablecomponent(1M)、esmd(1M)

名前	showdatasync - フェイルオーバーに対するシステムコントローラ (SC) のデータ同期状態の表示
形式	showdatasync [-l -Q] [-v] showdatasync -h
機能説明	showdatasync は、メイン SC からスペア SC に適用 (コピー) されたファイルの現在の状態を提供します。データ適用は、スペア SC 上のデータをメイン SC 上のデータと同期して、SC フェイルオーバーが発生した場合にスペア SC がメイン SC とともに最新の状態になっているようにします。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
注	注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
拡張機能説明	-l 現在のデータ適用リスト内にファイルを一覧表示します。表示される情報の詳細については、「拡張機能説明」の節を参照してください。 -Q 適用のため待ち行列に入れられているファイルを一覧表示します。各ファイル名には、ファイルへの絶対パスが含まれます。 -v 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。 ここでは、showdatasync コマンドによって表示される情報について説明します。 オプションを showdatasync コマンドとともに指定していない場合は、次の情報が表示されます。 File Propagation Status: Active File: Queued files: File Propagation Status データ同期の現在の状態を表示します。 ■ Active は、データ同期プロセスが使用可能になっていて、正常に機能していることを示します。

showdatasync(1M)

	<ul style="list-style-type: none">■ Disabled は、SC フェイルオーバーが使用不可になっているためにデータ同期プロセスが使用不可になっていることを示します。■ Failed は、SC 障害が検出されていても、データ同期プロセスがファイルをスペア SC に適用できないことを示します。
Active File	現在適用されているファイルの絶対パスまたはリンクがアイドル状態であることを示す - (ダッシュ) のどちらかを表示します。
Queued files	適用するファイルで、まだ処理されていないファイルの数を指定します。
-l オプションを showdatasync コマンドとともに指定した場合、データ適用リスト内の各エントリは <i>Time Propagated</i> , <i>Interval</i> , <i>File</i> の形式で表示されます。	
<i>Time Propagated</i>	ファイルがメイン SC からスペア SC に適用された最後の時刻を示します。
<i>Interval</i>	ファイルの変更をチェックする間隔を分単位で指定します。デフォルトの間隔は 60 分です。
<i>File</i>	適用されたファイルの絶対パスと名前を示します。
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。
	詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。
使用例	使用例 1 - データ同期の状態 <pre>sc0:sms-user:> showdatasync File Propagation State: ACTIVE Active File: - Queued files: 0</pre>

使用例 2 - データ同期リスト

```
sc0:sms-user:> showdatasync -l
TIME PROPAGATED          INTERVAL      FILE
Mar 23 16:00:00          60           /tmp/t1
```

使用例 3 - データ同期キュー

```
sc0:sms-user:> showdatasync -Q
FILE
/tmp/t1
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

setdatasync(1M)

showdate(1M)

名前	showdate – システムコントローラ (SC) またはドメインの日付と時刻の表示
形式	showdate [-d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>] [-u] [-v] showdate -h
機能説明	showdate (1M) は、SC の現在の日付と時刻を表示します。オプションで、showdate はドメインの時間を表示します。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> 注 – 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。 <hr/>
	-u グリニッジ標準時刻 (GMT) を使用して時刻を解釈して表示します。デフォルトでは該当地域のタイムゾーンが使用されます。 -v 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	SC の日付を表示するには、プラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守の特権が必要です。ドメインの日付を表示するには、指定したドメインに対するドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権が必要です。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。
使用例	使用例 1 – 太平洋標準時 (PST) での現在のローカル日付表示 sc0:sms-user:> showdate System Controller:Sat Feb 2 15:23:21 PST 2002

使用例 2 – GMT を使用した現在の日付表示

```
sc0:sms-user:> showdate -u
System Controller:Sat Feb 2 23:23:21 GMT 2002
```

使用例 3 – 太平洋標準時でのドメイン A の現在のローカル日付表示

```
sc0:sms-user:> showdate -d a
Domain a:Sat Feb 2 15:33:20 PST 2002
```

使用例 4 – GMT を使用したドメイン A の現在の日付表示

```
sc0:sms-user:> showdate -d a -u
Domain a:Sat Feb 2 23:33:20 GMT 2002
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、setdate(1M)

showdevices(1M)

名前	showdevices - システムボードデバイスおよび資源使用状況情報の表示
形式	<pre>showdevices [-v] [-p bydevice byboard query force] location [location...] showdevices [-v] [-p bydevice byboard query force] -d domain_id domain_tag showdevices -h</pre>
機能説明	<p>showdevices(1M) は、システムボード上の構成された物理デバイスおよびこれらのデバイスで利用可能な資源を表示します。使用状況情報は、システム資源をアクティブに管理しているアプリケーションおよびサブシステムによって提供されます。管理対象資源のオフライン照会を実行することによってシステムボード DR 操作の予測される影響を表示します。非管理対象のデバイスはデフォルトでは表示されません。-v オプションを使用する必要があります。</p> <p>showdevices は、1 つ以上の Sun Fire 15K ドメインからデバイス情報を収集します。このコマンドでは、dca(1M) をプロキシとして使用してドメインから情報を収集します。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。ドメイン内のすべての構成済みボードのデバイスおよび資源情報を表示します。</p> <p>-d <i>domain_tag</i> addtag (1M) を使用してドメインに割り当てられる名前です。ドメイン内のすべての構成済みボードのデバイスおよび資源情報を表示します。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>

- `-p` 特定のレポートを表示します。
- `-p` に対する有効な引数は次のとおりです。
- `bydevice` — リスト出力はデバイスのタイプ (CPU、メモリー、IO) によってグループ化されます。これはデフォルト設定です。
- `byboard` — リスト出力はシステムボードによってグループ化されます。デフォルトの出力はデバイスのタイプ (CPU、メモリー、IO) でグループ化された表形式です。
- `query` — システムボードを取り外した結果の予測を照会します。
- `force` — オフライン照会を強制します。資源消費プログラムは、システム資源の使用を破棄できるかどうかを予測するときに強制セマンティックを適用するよう要求されます。(cfgadm(1M) を参照してください)。
- `-v` すべての I/O デバイスを表示します。管理対象および非管理対象 I/O デバイスの両方が含まれます。管理対象デバイスはアクティブに管理されている資源をエクスポートします。非管理対象デバイスは物理的に構成されていますが、アクティブに管理されている資源をエクスポートしません。非管理対象デバイスの使用状況情報は利用できません。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

`location` ボード位置のリストで、スペースで区切ります。複数の `location` 引数を使用できます。

次の `location` 形式が使用できます。

SB(0...17)

IO(0...17)

拡張機能説明

`showdevice` のフィールドは次のとおりです。

`domain` タグまたは識別子

`board` ボード識別子

showdevices(1M)

CPU:

id	プロセッサ ID
state	プロセッサの状態
speed	CPU の周波数 MHz 単位
ecache	CPU キャッシュサイズ MB 単位

メモリー:

board mem	ボードのメモリーサイズ MB 単位
perm mem	ボード上の再配置不可能メモリー量 MB 単位
base address	ボード上のメモリーのベース物理アドレス
domain mem	システムメモリーサイズ MB 単位
board	ボード識別子

メモリーの消耗が進行している場合は、次の項目が利用できます。

target board	ターゲットボード識別子
deleted	すでに削除されているメモリー量 MB 単位
remaining	削除可能な残りのメモリー量 MB 単位

I/O デバイス:

device	I/O デバイスのインスタンス名
resource	管理対象資源名
usage	リソース使用状況インスタンスの説明
query	リソースのオフライン照会の結果

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、指定したすべてのボードに対するドメイン管理者特権または構成者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 - システムボード IO1 に対する showdevices

```
sc0:SMS-user:>showdevices IO1
IO Devices
-----
domain  location  device  resource                usage
A       IO1       sd3     /dev/dsk/c0t3d0s0      mounted filesystem "/"
A       IO1       sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1      dump device (swap)
A       IO1       sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1      swap area
A       IO1       sd3     /dev/dsk/c0t3d0s3      mounted filesystem "/var"
A       IO1       sd3     /var/run                mounted filesystem "/var/run"
```

使用例 2 - ドメイン A に対する showdevices

```
sc0:SMS-user:> showdevices -v -d A
CPU
----
domain  location  id    state  speed  ecache
A       C1        40    online 400    4
A       C1        41    online 400    4
A       C1        42    online 400    4
A       C1        43    online 400    4
A       C2        55    online 400    4
A       C2        56    online 400    4
A       C2        57    online 400    4
A       C2        58    online 400    4

Memory drain in progress:
-----
domain  location  board  perm  base          domain  target  deleted  remaining
domain  location  mem MB  mem MB  address       mem MB  board  mem MB  mem MB
A       C1        2048   723   0x600000     4096   C2    250    1500
A       C2        2048   0     0x200000     4096

IO Devices
-----
domain  location  device  resource                usage
A       IO1       sd0
A       IO1       sd1
A       IO1       sd2
A       IO1       sd3     /dev/dsk/c0t3d0s0      mounted filesystem "/"
A       IO1       sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1      dump device (swap)
A       IO1       sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1      swap area
A       IO1       sd3     /dev/dsk/c0t3d0s3      mounted filesystem "/var"
A       IO1       sd3     /var/run                mounted filesystem "/var/run"
A       IO1       sd4
A       IO1       sd5
A       IO1       sd6
```

使用例 3 – システムボード IO1 に対するオフライン照会の結果表示

```
sc0:SMS-user:> showdevices -p query IO1
Location IO1 - Domain A
=====
IO Devices
-----
device  resource                query  usage/reason
sd3     /dev/dsk/c0t3d0s0        fail   mounted filesystem "/"
sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1        fail   dump device (swap)
sd3     /dev/dsk/c0t3s0s1        fail   swap area
sd3     /dev/dsk/c0t3d0s3        fail   mounted filesystem "/var"
sd3     /var/run                 -      mounted filesystem "/var/run"
```

query フィールドは、資源を除去した結果の予測を表示します。マウントされたファイルシステム /var をオフラインにするのに失敗した場合は、照会がレイヤーマウントポイント /var/run に達することができなくなります。

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 無効なドメインが指定されました。
- 2 無効なオプションなどのコマンド行エラーが検出されました。
- 3 複数のドメインが指定されました。
- 4 pcd との通信中にエラーが発生しました。
- 5 ドメインとの通信中にエラーが発生しました。
- 6 デバイス情報の処理中にエラーが発生しました。
- 7 メモリー割り当ての失敗などの内部エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、dca(1M)、pcd(1M)

名前	showenvironment - 環境データの表示
形式	<pre>showenvironment [-d domain_id domain_tag] [-p temps volts currents fans powers faults...] [-v] showenvironment -h</pre>
機能説明	<p>showenvironment(1M) は、環境データ (温度、電圧など) を表示します。<i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> が指定されている場合、ユーザーがドメイン特権を持っている場合、そのドメインに関連している環境データが表示されます。ドメインが指定されていない場合は、そのユーザーに許可されるすべてのドメインデータが表示されます。</p>
	<hr/> <p>注 - ドメイン構成ユニット (DCU) (たとえば、CPU、I/O) のみがドメインに属します。ファントレー、バルク電源またはその他のボード (exb、csb) などに関連する環境データを表示するには、プラットフォーム特権が必要です。また、温度、電圧、電流、バルク電源状態、障害、およびファントレー状態の個々のレポートを <code>-p</code> オプションを使用して指定することもできます。<code>-p</code> オプションがない場合は、すべてのレポートが表示されます。</p> <hr/>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p><code>-d domain_id</code> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。</p> <p><code>-d domain_tag</code> <code>addtag (1M)</code> を使用してドメインに割り当てられるドメイン名です。</p> <p><code>-h</code> ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。<code>-h</code> に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>
	<p><code>-p</code> 特定のレポートを表示します。レポート引数が複数の場合は、コンマで区切ります。</p>

showenvironment(1M)

-p に対する有効な引数は次のとおりです。

temps — リスト出力は温度によってグループ化されます。

volts — リスト出力は電圧によってグループ化されます。

currents — リスト出力は電流によってグループ化されま
す。

fans — リスト出力はファンによってグループ化されます。

powers — リスト出力はバルク電源供給によってグループ化
されます。

faults — リスト出力は最適なスレッシュホールド内に収まらな
いすべてのコンポーネント読み取り値です。

注 - faults 引数はその他のレポート引数と一緒に使用されません。

-v 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。

Unit フィールドには、次の 3 つの値の中の 1 つが含まれます。

C 摂氏

V ボルト

A アンペア

Status フィールドには、次の 16 の状態のいずれかの値が含まれます。

温度測定値：

OVERLIMIT 制限超過

HIGH_CRIT 危険・高

HIGH_WARN 警告・高

LOW_CRIT 危険・低

拡張機能説明

LOW_WARN 警告・低

OK 最適

INVALID 測定失敗

電圧測定値：

HIGH_MAX 最高

LOW_MIN 最低

OK 許容範囲

INVALID 測定失敗

電流測定値：

OK 組み合わせコンポーネントの両方の測定値が互いの
10% 以内である

BAD 組み合わせコンポーネントの両方の測定値が互いの
10% 以内でない

INVALID 測定失敗

その他：

ON 電源オン

OFF 電源オフ

PRESENCE スロット 1 にホットプラグカードがある

FAIL 障害状態

HIGH 高速に設定

NORMAL 標準速度に設定

INVALID 測定失敗

AGE 測定時間

UNKNOWN 電源/ボードのタイプが unknown である

showenvironment(1M)

必要なグループ特権

ドメイン管理者特権または構成者特権を持つドメイン情報のみが表示されます。それ以外の場合は、プラットフォームの管理者、オペレータ、または保守特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。

使用例

使用例 1 – すべてのドメイン用の showenvironment 表示例

sc0:sms-user:> showenvironment

LOCATION	DEVICE	SENSOR	VALUE	UNIT	AGE	STATUS
SC at SC0	max1617	RIO Temp	31.00	C	23.4 sec	OK
SC at SC0	max1617	PCIB Temp	26.00	C	23.4 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	PS0 Temp	40.03	C	23.4 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	PS1 Temp	31.97	C	23.4 sec	OK
SC at SC0	sbbc	SBBC Temp	40.50	C	23.4 sec	OK
SC at SC0	cbh	CBH Temp	45.16	C	23.4 sec	OK
SCPER at SCPER0	max1617	AMB 0 Temp	22.00	C	24.1 sec	OK
SCPER at SCPER0	max1617	AMB 1 Temp	22.00	C	24.1 sec	OK
SCPER at SCPER0	max1617	AMB 2 Temp	22.00	C	24.1 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	1.5 VDC	1.46	V	24.7 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	3.3 VDC	3.26	V	24.7 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	24.7 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	5.0 VDC	5.01	V	24.7 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	+12.0 VDC	11.95	V	24.7 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	-12.0 VDC	-12.01	V	24.7 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	1.5 CVT0 VDC	1.59	V	24.7 sec	OK
SC at SC0	pcf8591	1.5 CVT1 VDC	1.60	V	24.7 sec	OK
SCPER at SCPER0	pcf8591	3.3 VDC HK	3.26	V	25.0 sec	OK
SCPER at SCPER0	pcf8591	5.0 VDC	5.04	V	25.0 sec	OK
SCPER at SCPER0	pcf8591	+12.0 VDC	12.55	V	25.0 sec	OK
SC at SC1	max1617	RIO Temp	36.00	C	21.8 sec	OK
SC at SC1	max1617	PCSB Temp	28.00	C	21.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	PS0 Temp	33.58	C	21.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	PS1 Temp	31.97	C	21.8 sec	OK
SC at SC1	sbbc	SBBC Temp	41.83	C	21.8 sec	OK
SC at SC1	cbh	CBH Temp	46.50	C	21.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	1.5 VDC	1.48	V	57.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	57.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	3.3 VDC HK	3.26	V	57.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	5.0 VDC	5.01	V	57.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	+12.0 VDC	11.88	V	57.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	-12.0 VDC	-11.82	V	57.8 sec	OK
SC at SC1	pcf8591	1.5 CVT0 VDC	1.72	V	57.8 sec	BAD
SC at SC1	pcf8591	1.5 CVT1 VDC	1.53	V	57.8 sec	BAD
SC at SC1	pcf8591	3.3 V_PS0	7.76	A	57.8 sec	BAD
SC at SC1	pcf8591	3.3 V_PS1	6.59	A	57.8 sec	BAD
SC at SC1	pcf8591	5.0 V_PS0	5.12	A	57.8 sec	BAD
SC at SC1	pcf8591	5.0 V_PS1	3.90	A	57.8 sec	BAD
CSB at CS0	max1617	AMB Top Temp	23.00	C	21.4 sec	OK

showenvironment(1M)

CSB at CS0	max1617	AMB Bot Temp	20.00	C	21.4	sec	OK
CSB at CS0	sbbc	SBBC Temp	31.83	C	21.4	sec	OK
CSB at CS0	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	57.5	sec	OK
CSB at CS0	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	57.5	sec	OK
CSB at CS0	pcf8591	2.5 VDC	2.52	V	57.5	sec	OK
CSB at CS0	pcf8591	3.3 VDC HK	3.26	V	57.5	sec	OK
CSB at CS1	max1617	AMB Top Temp	25.00	C	21.0	sec	OK
CSB at CS1	max1617	AMB Bot Temp	23.00	C	21.0	sec	OK
CSB at CS1	sbbc	SBBC Temp	33.83	C	21.0	sec	OK
CSB at CS1	pcf8591	1.5 VDC	1.50	V	57.3	sec	OK
CSB at CS1	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	57.3	sec	OK
CSB at CS1	pcf8591	2.5 VDC	2.50	V	57.3	sec	OK
CSB at CS1	pcf8591	3.3 VDC HK	3.26	V	57.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	5.0 VDC	5.01	V	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	+12.0 VDC	12.03	V	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	-12.0 VDC	-12.01	V	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	1.5 CVT0 VDC	1.88	V	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	1.5 CVT1 VDC	1.74	V	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	3.3 V_PS0	10.25	A	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	3.3 V_PS1	10.40	A	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	5.0 V_PS0	4.02	A	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	5.0 V_PS1	4.15	A	23.3	sec	OK
WPCI at IO8	max1617a	IOA0 Temp	46.00	C	39.9	sec	OK
WPCI at IO8	dx0	DX0 Temp	61.16	C	39.9	sec	OK
WPCI at IO8	dx1	DX1 Temp	56.49	C	39.9	sec	OK
WPCI at IO8	sdc	SDC Temp	67.16	C	39.9	sec	OK
WPCI at IO8	sbbc	SBBC Temp	41.16	C	39.9	sec	OK
WPCI at IO8	ar	AR Temp	65.82	C	39.9	sec	OK
WPCI at IO8	wci	WCI0 Temp	9.65	C	39.9	sec	OK
WPCI at IO8	wci	WCI1 Temp	7.71	C	39.9	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	+12 VDC	11.95	V	26.2	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	-12 VDC	-12.01	V	26.2	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	3.3 HK	3.26	V	26.2	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	26.2	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	1.5 VDC	1.48	V	26.2	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	2.5 VDC	2.49	V	26.2	sec	OK
WPCI at IO8	pcf8591	5.0 VDC	5.04	V	26.2	sec	OK
Schizo0.0	max1617a	Schizo 0 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo0.1	max1617a	Schizo 0 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
EXB at EX4	max1617	AMB Top Temp	28.00	C	28.8	sec	OK
EXB at EX4	max1617	AMB Bot Temp	25.00	C	28.8	sec	OK
EXB at EX4	sbbc	SBBC Temp	37.16	C	28.8	sec	OK
EXB at EX4	axq	AXQ Temp	27.16	C	28.8	sec	OK
EXB at EX4	sdim	SDIM Temp	21.37	C	28.8	sec	OK
EXB at EX4	sdise	SDISE Temp	19.54	C	28.8	sec	OK
EXB at EX4	sdisc	SDISC Temp	27.08	C	28.8	sec	OK
EXB at EX4	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	56.0	sec	OK
EXB at EX4	pcf8591	3.3 VDC	3.26	V	56.0	sec	OK
EXB at EX4	pcf8591	2.5 VDC	2.47	V	56.0	sec	OK
EXB at EX4	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	56.0	sec	OK
CPU at SB4	max1617	PROC 0 Temp	0.00	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	max1617	PROC 1 Temp	0.00	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	max1617	PROC 2 Temp	0.00	C	9.5	sec	OK

showenvironment(1M)

CPU at SB4	max1617	PROC 3 Temp	0.00	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	sdc	SDC Temp	56.49	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	ar	AR Temp	49.16	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	dx0	DX0 Temp	51.83	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	dx1	DX1 Temp	51.83	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	dx2	DX2 Temp	48.49	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	dx3	DX3 Temp	43.83	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	sbbc 0	SBBC 0 Temp	45.16	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	sbbc 1	SBBC 1 Temp	44.50	C	9.5	sec	OK
CPU at SB4	pcf8591	1.5 VDC	1.52	V	56.6	sec	OK
CPU at SB4	pcf8591	3.3 VDC	3.26	V	56.6	sec	OK
CPU at SB4	pcf8591	Core 0 Volt	-1.00	V	56.6	sec	HIGH_MAX
CPU at SB4	pcf8591	Core 1 Volt	1.12	V	56.6	sec	HIGH_MAX
CPU at SB4	pcf8591	Core 2 Volt	1.70	V	56.6	sec	OK
CPU at SB4	pcf8591	Core 3 Volt	1.13	V	56.6	sec	HIGH_MAX
Schizo0.1	max1617a	Schizo 0 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
Schizo1.0	max1617a	Schizo 1 Slot 0	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
EXB at EX1	--	--	--	--	--		UNKNOWN
SB1	--	--	--	--	--		UNKNOWN
IO3	--	--	--	--	--		UNKNOWN
EXB at EX6	max1617	AMB Top Temp	28.00	C	54.7	sec	OK
EXB at EX6	max1617	AMB Bot Temp	28.00	C	54.7	sec	OK
EXB at EX6	sbbc	SBBC Temp	35.16	C	54.7	sec	OK
EXB at EX6	axq	AXQ Temp	22.36	C	54.7	sec	OK
EXB at EX6	sdim	SDIM Temp	17.23	C	54.7	sec	OK
EXB at EX6	sdise	SDISE Temp	28.03	C	54.7	sec	OK
EXB at EX6	sdisc	SDISC Temp	-1.00	C	N/A		INVALID
EXB at EX6	pcf8591	1.5 VDC	1.50	V	55.4	sec	OK
EXB at EX6	pcf8591	3.3 VDC	3.26	V	55.4	sec	OK
EXB at EX6	pcf8591	2.5 VDC	2.47	V	55.4	sec	OK
EXB at EX6	pcf8591	3.3 VDC HK	3.28	V	55.4	sec	OK
CPU at SB6	max1617	PROC 0 Temp	43.00	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	max1617	PROC 1 Temp	0.00	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	max1617	PROC 2 Temp	0.00	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	max1617	PROC 3 Temp	0.00	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	sdc	SDC Temp	62.49	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	ar	AR Temp	55.16	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	dx0	DX0 Temp	57.16	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	dx1	DX1 Temp	55.16	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	dx2	DX2 Temp	55.83	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	dx3	DX3 Temp	53.83	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	sbbc 0	SBBC 0 Temp	51.83	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	sbbc 1	SBBC 1 Temp	49.16	C	5.1	sec	OK
CPU at SB6	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	56.0	sec	OK
CPU at SB6	pcf8591	3.3 VDC	3.30	V	56.0	sec	OK
CPU at SB6	pcf8591	Core 0 Volt	1.72	V	56.0	sec	OK
CPU at SB6	pcf8591	Core 1 Volt	1.13	V	56.0	sec	HIGH_MAX
CPU at SB6	pcf8591	Core 2 Volt	1.14	V	56.0	sec	HIGH_MAX
CPU at SB6	pcf8591	Core 3 Volt	1.13	V	56.0	sec	LOW_MIN
Schizo1.1	max1617a	Schizo 1 Slot 1	N/A	N/A	N/A		PRESENCE
EXB at EX12	max1617	AMB Top Temp	24.00	C	27.1	sec	OK
EXB at EX12	max1617	AMB Bot Temp	24.00	C	27.1	sec	OK
EXB at EX12	sbbc	SBBC Temp	35.16	C	27.1	sec	OK
EXB at EX12	axq	AXQ Temp	27.01	C	27.1	sec	OK

showenvironment(1M)

```

EXB at EX12      sdim      SDIM Temp      24.62      C      27.1 sec OK
EXB at EX12      sdisc     SDISC Temp     24.59      C      27.1 sec OK
EXB at EX12      sdisc     SDISC Temp     27.48      C      27.1 sec OK
EXB at EX12      pcf8591   1.5 VDC        1.51       V      55.3 sec OK
EXB at EX12      pcf8591   3.3 VDC        3.28       V      55.3 sec OK
EXB at EX12      pcf8591   2.5 VDC        2.47       V      55.3 sec OK
EXB at EX12      pcf8591   3.3 VDC HK     3.26       V      55.3 sec OK
FANTRAY  POWER  SPEED  FAN0  FAN1  FAN2  FAN3  FAN4  FAN5  FAN6
-----  -----
FT0      ON     HIGH   OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT1      ON     HIGH   OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT2      ON     HIGH   OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT3      ON     HIGH   OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT4      ON     HIGH   OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT6      ON     HIGH   OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
FT7      ON     HIGH   OK    OK    OK    OK    OK    OK    OK
POWER    UNIT   AC0    AC1    DC0    DC1    FAN0    FAN1
-----  -----
PS0      FAIL   FAIL   FAIL   ON     ON     OK      OK
PS1      FAIL   OK     OK     ON     ON     OK      OK
PS2      OK     OK     OK     ON     ON     OK      OK
PS4      OK     OK     OK     ON     ON     OK      OK
PS5      OK     OK     OK     ON     ON     OK      OK
POWER    VALUE  UNIT   STATUS
-----  -----
PS0
Current0  0.39   A      N/A
Current1  0.39   A      N/A
48VDC     0.39   V      N/A
PS1
Current0  8.36   A      N/A
Current1  5.97   A      N/A
48VDC     48.60  V      N/A
PS2
Current0  8.36   A      N/A
Current1  6.77   A      N/A
48VDC     48.80  V      N/A
PS4
Current0  7.57   A      N/A
Current1  7.17   A      N/A
48VDC     50.00  V      N/A
PS5
Current0  6.77   A      N/A
Current1  7.17   A      N/A
48VDC     49.40  V      N/A
CP at CP0  dmx0    DMX0 Temp    19.62      C      21.7 sec OK
CP at CP0  dmx1    DMX1 Temp    20.54      C      21.7 sec OK
CP at CP0  dmx3    DMX3 Temp    16.44      C      21.7 sec OK
CP at CP0  dmx5    DMX5 Temp    22.39      C      21.7 sec OK
CP at CP0  amx0    AMX0 Temp    25.22      C      21.7 sec OK
CP at CP0  amx1    AMX1 Temp    27.14      C      21.7 sec OK
CP at CP0  rmx     RMX Temp     20.54      C      21.7 sec OK
CP at CP0  darb    DARB Temp    25.70      C      21.7 sec OK
CP at CP1  dmx0    DMX0 Temp    17.41      C      21.3 sec OK

```

showenvironment(1M)

CP at CP1	dmx1	DMX1 Temp	33.03	C	21.3	sec	OK
CP at CP1	dmx3	DMX3 Temp	25.10	C	21.3	sec	OK
CP at CP1	dmx5	DMX5 Temp	18.74	C	21.3	sec	OK
CP at CP1	amx0	AMX0 Temp	25.98	C	21.3	sec	OK
CP at CP1	amx1	AMX1 Temp	18.71	C	21.3	sec	OK
CP at CP1	rmx	RMX Temp	21.00	C	21.3	sec	OK
CP at CP1	darb	DARB Temp	31.18	C	21.3	sec	OK
EXB at EX2	max1617	AMB Top Temp	26.00	C	59.3	sec	OK
EXB at EX2	max1617	AMB Bot Temp	25.00	C	59.3	sec	OK
EXB at EX2	sbbc	SBBC Temp	33.83	C	59.3	sec	OK
EXB at EX2	axq	AXQ Temp	23.75	C	59.3	sec	OK
EXB at EX2	sdim	SDIM Temp	20.46	C	59.3	sec	OK
EXB at EX2	sdise	SDISE Temp	21.85	C	59.3	sec	OK
EXB at EX2	sdisc	SDISC Temp	26.04	C	59.3	sec	OK
EXB at EX2	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	56.6	sec	OK
EXB at EX2	pcf8591	3.3 VDC	3.26	V	56.6	sec	OK
EXB at EX2	pcf8591	2.5 VDC	2.47	V	56.6	sec	OK
EXB at EX2	pcf8591	3.3 VDC HK	3.24	V	56.6	sec	OK
CPU at SB2	max1617	PROC 0 Temp	42.00	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	max1617	PROC 1 Temp	0.00	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	max1617	PROC 2 Temp	0.00	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	max1617	PROC 3 Temp	0.00	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	sdc	SDC Temp	57.83	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	ar	AR Temp	49.16	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	dx0	DX0 Temp	50.49	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	dx1	DX1 Temp	48.49	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	dx2	DX2 Temp	46.50	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	dx3	DX3 Temp	43.83	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	sbbc 0	SBBC 0 Temp	45.16	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	sbbc 1	SBBC 1 Temp	47.16	C	9.6	sec	OK
CPU at SB2	pcf8591	1.5 VDC	1.51	V	57.2	sec	OK
CPU at SB2	pcf8591	3.3 VDC	3.33	V	57.2	sec	OK
CPU at SB2	pcf8591	Core 0 Volt	1.73	V	57.2	sec	OK
CPU at SB2	pcf8591	Core 1 Volt	1.14	V	57.2	sec	HIGH_MAX
CPU at SB2	pcf8591	Core 2 Volt	1.12	V	57.2	sec	HIGH_MAX
CPU at SB2	pcf8591	Core 3 Volt	1.13	V	57.2	sec	LOW_MIN
HPCI at IO1	pcf8591	PS0 Temp	48.10	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	PS1 Temp	31.97	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	sdc	SDC0 Temp	67.82	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	ar	AR0 Temp	61.82	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	dx0	DX0 Temp	57.16	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	dx1	DX1 Temp	47.83	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	sbbc	SBBC Temp	37.16	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	max1617a	IOA 0 Temp	52.00	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	max1617a	IOA 1 Temp	43.00	C	48.7	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	1.5 VDC	1.52	V	23.3	sec	OK
HPCI at IO1	pcf8591	3.3 VDC	3.28	V	23.3	sec	OK

使用例 2 - ドメイン A の温度レポート

この例では、ドメイン A の IO6 および IO2 に MCPU が含まれていると想定しています。

```
sc0:SMS-USER:> showenvironment -p temps -d a
```

LOCATION	DEVICE	SENSOR	VALUE	UNIT	AGE	STATUS
MCPU at IO6	max1617	PROC 1 Temp	35.00	C	8.0 sec	OK
...			
MCPU at IO2	dx0	DX0 Temp	36.50	C	8.0 sec	OK
...		

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 無効なドメインが使用されました。
- 2 無効なコマンド行オプションが使用されました。
- 3 アクセス権が無効です。
- 4 内部エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)

showfailover(1M)

名前	showfailover - システムコントローラ (SC) のフェイルオーバー状態の管理または表示
形式	showfailover [-r] [-v] showfailover -h
機能説明	<p>showfailover(1M) は、SC フェイルオーバーメカニズムの状態を監視する機能を提供します。このコマンドでは、フェイルオーバーメカニズムの現在の状態を表示します。-r オプションを指定していない場合は、次の情報が表示されます。</p> <p>SC Failover: <i>state</i></p> <p>フェイルオーバーメカニズムは、次の 3 つの状態 (ACTIVE、DISABLED、FAILED) のいずれかになります。後述の「拡張機能説明」を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>
拡張機能説明	<p>-r SC の役割を MAIN、SPARE または UNKNOWN のいずれかで表示します。</p> <p>-v 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。</p> <p>フェイルオーバーメカニズム状態は次のとおりです。</p> <p>ACTIVE フェイルオーバーメカニズムが使用可能で正常に機能していることを識別します。</p> <p>DISABLED フェイルオーバーメカニズムがフェイルオーバーの発生またはオペレータの要求によって (たとえば、setfailover off) 使用不可になっていることを識別します。</p> <p>FAILED フェイルオーバーメカニズムがフェイルオーバーを妨げる障害を検出したことを識別します。</p>

また、showfailover ではフェイルオーバープロセスで監視されたネットワークインタフェースリンクのそれぞれの状態を表示します。表示形式は次のとおりです。

network i/f device name: [GOOD|FAILED]

障害の状態を記述した障害文字列が返されます。各障害文字列には、それぞれに関連付けられているコードがあります。次のコードと関連障害文字列が定義されています。

文字列	説明
None	障害はありません。
M-SC/S-SC EXT NET	メインおよびスペア SC の外部ネットワークインタフェースに障害が発生しました。
S-SC CONSOLE BUS	スペア SC のコンソールバスパスに障害が検出されました。
S-SC LOC CLK	スペア SC のローカルクロックに障害が発生しました。
S-SC CLK NOT PHASE LOCKED	スペア SC のクロックがメイン SC とフェーズロックされていません。
S-SC DISK FULL	スペア SC のシステムがいっぱいです。
S-SC IS DOWN	スペア SC が停止していて応答しません。
S-SC MEM EXHAUSTED	スペア SC のメモリー/スワップスペースが使い果たされました。
S-SC SMS DAEMON	スペア SC 上で少なくとも 1 つの SMS デーモンが開始または再開できませんでした。
No CSBS Powered on	少なくとも 1 つの CSB の電源がオンになっている必要があります。

showfailover(1M)

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権、プラットフォームオペレータ特権またはプラットフォーム保守特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。

使用例

使用例 1 — フェイルオーバー状態がすべてOKの場合の表示

```
sc0:sms-user:> showfailover
SC Failover: ACTIVE
hme0: GOOD
hme1: GOOD
hme2: GOOD
```

使用例 2 — スペア SC システムがフル

```
sc0:sms-user:> showfailover
SC Failover: FAILED
S-SC DISK FULL
hme0: GOOD
hme1: GOOD
hme2: GOOD
```

使用例 3 — SC 役割の表示

```
sc0:sms-user:> showfailover -r
SC: SPARE
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

setfailover(1M)

名前	showkeyswitch – 仮想キースイッチ位置の表示
形式	showkeyswitch -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> [-v] showkeyswitch -h
機能説明	showkeyswitch(1M) は、指定したドメインの仮想キースイッチの位置を表示します。各仮想キースイッチの状態はシステムコントローラ (SC) の電源の再投入の間または pcd(1M) による電源供給の物理的電源再投入によって維持されます。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> 注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。 <hr/>
	-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、指定されたドメインに対するプラットフォーム管理者、プラットフォームオペレータ、プラットフォーム保守、ドメイン管理者、またはドメイン設定者の特権が必要です。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。
使用例	使用例 1 – ドメイン A のキースイッチ状態 sc0:sms-user:> showkeyswitch -d A Virtual keyswitch position:ON

showkeyswitch(1M)

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、setkeyswitch(1M)、pcd(1M)

showlogs(1M)

m — プラットフォームメッセージログを表示するにはプラットフォームグループ特権が必要です。これは showlogs のデフォルトです。

c — ドメインコンソールログを表示するには **-d** オプションおよびドメインに対するドメイン特権が必要です。

s — ドメインシスログを表示するにはドメインに対するドメイン特権が必要です。システムコントローラ (SC) からドメイン以外のシステムに転送された syslog は、`/var/opt/SUNWSMS/adm/anonymous` に格納されます。

-v

冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。

拡張機能説明

必要なグループ特権

プラットフォームの管理者特権、オペレータ特権または保守特権を持っている場合は、プラットフォームメッセージログファイルを表示することができます。

ドメイン管理者/構成者特権を持っている場合は、特権を持っているドメインのログファイルのみを表示することができます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 — プラットフォームメッセージログの標準出力への出力

```
sc0:SMS-user:> showlogs
```

```
Aug 24 14:30:53 2000 xc8-sc0 hwad[104609]:[0 5751139758216 ERR SCCSR.cc 1347] g
etCrt - Client:104621.14 has locked - 167
Aug 24 14:30:53 2000 xc8-sc0 hwad[104609]:[0 5751170721148 ERR SCCSR.cc 1362] g
etCrt - Client:104621.14 about to unlock - 167.....
```

使用例 2 — ドメイン A メッセージログの標準出力への出力

```
sc0:sms-user:> showlogs -d A
```

```
Aug 15 14:28:05 2000 xc8-sc0 dsmd[106850]-A():[0 8500962546702 INFO Observers.cc 125]
DOMAIN_UP A event has been sent to SYMON, rc = 0.
Aug 15 14:28:05 2000 xc8-sc0 dsmd[106850]-A():[0 8500963756755 INFO DomainMon.cc 183]
Start monitoring domain A every 5 second....
```

使用例 3 — ドメイン A メッセージログに新しく追加された行の標準出力への出力

```
sc0:sms-user:> showlogs -d A -F
```

```
Aug 25 14:28:05 2000 xc8-sc0 dsmd[106850]-A():[0 8500960648900 INFO Observers.c
c 193] DOMAIN_UP A event has been sent to DXS, rc = 0.....
```

使用例 4 — ドメイン A コンソールログの標準出力への出力

```
sc0:sms-user:> showlogs -d A -p c
```

```
** Domain Server Shutting Down - disconnecting

** Domain Server Shutting Down - disconnecting

Sun Fire 15K system, using IOSRAM based Console
OpenBoot 4.0, 2048 MB memory installed, Serial #10000000.
Ethernet address 8:0:20:b8:2d:b1, Host ID:80a3e446.
```

使用例 5 — ドメイン sms2 syslog の標準出力への出力

```
sc0:sms-user:> showlogs -d sms2 -p s
```

```
Sep 7 13:51:49 sms2 agent[6629]:[ID 240586 daemon.alert] syslog
Sep 07 13:51:49 agent {received software termination signal}
Sep 7 13:51:49 sms2 agent[6629]:[ID 985882 daemon.alert] syslog
Sep 07 13:51:49 agent *** terminating execution ***
Sep 7 13:51:50 sms2 platform[22481]:[ID 345917 daemon.alert] syslog
Sep 07 13:51:50 platform *** terminating execution ***
Sep 7 14:49:07 sms2 platform[4309]:[ID 745356 daemon.alert] syslog
Sep 07 14:49:07 platform general parsing error
Sep 7 14:49:07 sms2 platform[4309]:[ID 334248 daemon.alert] syslog
Sep 07 14:49:07 platform file://localhost/scmonitor-d.x;flags=r0
Sep 7 14:49:07 sms2 platform[4309]:[ID 449452 daemon.alert] syslog
Sep 07 14:49:07 platform couldn't load file

...
```

showlogs(1M)

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

次のファイルがサポート使用されます。

`/var/opt/SUNWSMS/adm/platform/messages`

プラットフォームメッセージファイル

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/messages`

ドメインメッセージファイル

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/console`

ドメインコンソールファイル

`/var/opt/SUNWSMS/adm/domain_id/syslog`

ドメイン syslog ファイル

属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

`tail(1)`

名前	showobpparams - ドメインの OpenBoot PROM 起動パラメタの表示
形式	showobpparams -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> [-v] showobpparams -h
機能説明	showobpparams(1M) を使用すると、ドメイン管理者は、setkeyswitch(1M) によって OpenBoot PROM に渡される仮想 NVRAM および REBOOT パラメタを表示することができます。-d オプションと <i>domain_id</i> または <i>domain_tag</i> が必要です。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> 注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。 <hr/>
	-v すべての利用可能コマンド情報を表示します。
拡張機能説明	
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、指定したドメインに対するドメイン管理者または設計者の特権が必要です。 詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。
使用例	使用例 1 - ドメイン A の OpenBoot PROM パラメタの表示 sc0:sms-user:>showobpparams -d a auto-boot?=false diag-switch?=true fcode-debug?=false use-nvramrc?=false security-mode=none

showobpparams(1M)

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、setkeyswitch(1M)、setobpparams(1M)

名前	showplatform - 各ドメインのボード使用可能構成要素リストおよびドメイン状態の表示
形式	showplatform [-d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i>] [-p domains available ethernet] [-v] showplatform -h
機能説明	ドメインの使用可能構成要素リスト、ドメイン状態、および Ethernet アドレスを表示します。 <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> で特定のドメインを指定すると、そのドメインに関する情報のみが表示されます。ドメインと -p オプションを省略すると、特権を持つ各ドメインの使用可能構成要素リスト、ドメイン状態、および Ethernet アドレスが表示されます。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag (1M) を使用してドメインに割り当てられるドメイン名です。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
<hr/>	
注 -	単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。
<hr/>	
-p	特定のレポートを表示します。 -p に対する有効な引数は次のとおりです。 domains — リスト出力はドメインの状態によってグループ化されます。 available — リスト出力はドメインの使用可能構成要素リストによってグループ化されます。 ethernet — リスト出力はドメインの Ethernet アドレスによってグループ化されます。
-v	冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。

拡張機能説明

ドメインの状態は次のいずれかになります。

- Unknown — ドメイン状態が判別できません。Ethernet アドレスの場合には、当該ドメインの `idprom` イメージファイルが存在しないことを示します。購入先にご連絡ください。
- Powered Off — ドメインの電源がオフになっています。
- Keyswitch Standby — ドメインのキースイッチが STANDBY 位置になっています。
- Running Domain POST — ドメイン電源投入時自己診断が実行中です。
- Loading OBP — ドメインの OpenBoot PROM がロードされています。
- Booting OBP — ドメインの OpenBoot PROM が起動中です。
- Running OBP — ドメインの OpenBoot PROM が実行中です。
- In OBP Callback — ドメインが停止され OpenBoot PROM に戻されています。
- Loading Solaris — OpenBoot PROM が Solaris ソフトウェアをロードしています。
- Booting Solaris — ドメインが Solaris ソフトウェアを起動しています。
- Domain Exited OBP — ドメイン OpenBoot PROM が終了しました。
- OBP Failed — ドメイン OpenBoot PROM が失敗しました。
- OBP in sync Callback to OS — OpenBoot PROM が Solaris ソフトウェアに同期コールバックをしています。
- Exited OBP — OpenBoot PROM が終了しました。
- In OBP Error Reset — ドメインがエラー `reset` 状態のために OpenBoot PROM になっています。
- Solaris Halted, in OBP — Solaris ソフトウェアが停止し、ドメインが OpenBoot PROM になっています。
- OBP Debugging — OpenBoot PROM がデバッガとして使用されています。
- Environmental Domain Halt — 環境に起因する緊急事態によってドメインがシャットダウンしました。
- Booting Solaris Failed — OpenBoot PROM の実行中、起動に失敗しました。
- Loading Solaris Failed — OpenBoot PROM の実行中、ロードに失敗しました。
- Running Solaris — Solaris ソフトウェアがドメイン上で実行中です。
- Solaris Quiesce In-progress — Solaris ソフトウェアが休止されています。
- Solaris Quiesced — Solaris ソフトウェアが休止しました。
- Solaris Resume In-progress — Solaris ソフトウェアを再開しています。

- Solaris Panic — Solaris ソフトウェアがパニックになっています。パニックフローが開始されました。
- Solaris Panic Debug — Solaris ソフトウェアがパニックになり、デバッグモードに入っています。
- Solaris Panic Continue — デバッグモードを終了しパニックフローが継続しています。
- Solaris Panic Dump — パニックダンプが開始されました。
- Solaris Halt — Solaris ソフトウェアが停止しています。
- Solaris Panic Exit — Solaris ソフトウェアがパニックにより終了しました。
- Environmental Emergency — 環境的な緊急事態が検出されました。
- Debugging Solaris — Solaris ソフトウェアをデバッグしています。ハング状態ではありません。
- Solaris Exited — Solaris ソフトウェアが終了しました。
- Domain Down — ドメインがダウンしており、キースイッチが setkeyswitch によって ON、DIAG、または SECURE の位置に設定されています。
- In Recovery — ドメインで自動システム回復が実行中です。

必要なグループ特権

プラットフォームの管理者特権、オペレータ特権または保守特権を持っている場合は、showplatform ではすべてのドメインの使用可能構成要素リストおよびボード状態情報を表示します。それ以外の場合は、ドメイン管理者特権またはドメイン構成者特権を持つドメインの情報のみが表示されます。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 — すべてのドメインの使用可能構成要素リストおよびドメイン状態情報の表示

次の例には、Ethernet アドレスが UNKNOWN 状態のドメインが含まれています。この状態は、そのドメインに idprom ファイルが存在しないことを示します。購入先にご連絡ください。

```
sc0:sms-user:> showplatform

Available Component List for Domains:
=====
Available for domain newA:
      SB0 SB1 SB2 SB7
      IO1 IO3 IO6
```

showplatform(1M)

```
Available for domain engB:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain domainC:
    No System boards
    IO0 IO1 IO2 IO3 IO4

Available for domain eng1:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain E:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain domainF:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain dmnG:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain H:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain I:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain dmnJ:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain K:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain L:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain M:
    No System boards
    No IO boards

Available for domain N:
```

No System boards
No IO boards

Available for domain O:
No System boards
No IO boards

Available for domain P:
No System boards
No IO boards

Available for domain Q:
No System boards
No IO boards

Available for domain dmnR:
No System boards
No IO boards

Domain Configurations:

=====

DomainID	Domain Tag	Solaris Nodename	Domain Status
A	newA	-	Powered Off
B	engB	sun15-b	Keyswitch Standby
C	domainC	sun15-c	Running OBP
D	-	sun15-d	Running Solaris
E	eng1	sun15-e	Running Solaris
F	domainF	sun15-f	Running Solaris
G	dmnG	sun15-g	Running Solaris
H	-	sun15-g	Solaris Quiesced
I	-	-	Powered Off
J	dmnJ	-	Powered Off
K	-	sun15-k	Booting Solaris
L	-	-	Powered Off
M	-	-	Powered Off
N	-	sun15-n	Keyswitch Standby
O	-	-	Powered Off
P	-	sun15-p	Running Solaris
Q	-	sun15-q	Running Solaris
R	dmnR	sun15-r	Running Solaris

Domain Ethernet Addresses:

=====

Domain ID	Domain Tag	Ethernet Address
A	newA	8:0:20:b8:79:e4
B	engB	8:0:20:b4:30:8c
C	domainC	8:0:20:b7:30:b0
D	-	8:0:20:b8:2d:b0

showplatform(1M)

```
E      eng1      8:0:20:f1:b7:0
F      domainF  8:0:20:be:f8:a4
G      dmnG      8:0:20:b8:29:c8
H      -        8:0:20:f3:5f:14
I      -        8:0:20:be:f5:d0
J      dmnJ      UNKNOWN
K      -        8:0:20:f1:ae:88
L      -        8:0:20:b7:5d:30
M      -        8:0:20:f1:b8:8
N      -        8:0:20:f3:5f:74
O      -        8:0:20:f1:b8:8
P      -        8:0:20:b8:58:64
Q      -        8:0:20:f1:b7:ec
R      dmnR      8:0:20:f1:b7:10
```

使用例 2 — ドメイン **engB** の使用可能構成要素リストおよびドメイン状態の表示

```
sc0:sms-user:> showplatform -d engB
```

```
Available Component List for Domains:
```

```
=====
```

```
Available for domain engB:
```

```
SB4 SB5 SB6
```

```
IO4 IO5
```

```
Domain Configurations:
```

```
=====
```

```
DomainID  Domain Tag  Solaris Nodename  Domain Status
```

```
B          engB          sun15-b          Keyswitch Standby
```

```
Domain Ethernet Addresses:
```

```
=====
```

```
Domain ID  Domain Tag  Ethernet Address
```

```
B          engB          8:0:20:b4:30:8c
```

使用例 3 — ドメイン管理者用の **showplatform**

次の例ではドメイン管理者特権または構成者特権を持つすべてのドメイン、この場合はドメイン **engB**、**C**、**E**、**dmnJ** の使用可能構成要素リストおよび状態情報を表示します。

```
sc0:sms-user:> showplatform
```

```
Available Component List for Domains:
```

```
=====
```

```
Available for domain engB:
```

showplatform(1M)

```
SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 SB6
IO1 IO2 IO3 IO4 IO5 IO6 IO7

Available for domain C:
SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 SB6
IO1 IO2 IO3 IO4 IO5 IO6 IO7

Available for domain E:
SB1 SB2 SB3 SB4 SB5 SB6
IO1 IO2 IO3 IO4 IO5 IO6 IO7

Domain Configurations:
=====
DomainID      Domain Tag      Solaris Nodename  Domain Status
B             engB           sun15-b          Keyswitch Standby
C             domainC       sun15-c          Running OBP
E             eng1          sun15-e          Running Solaris
```

```
Domain Ethernet Addresses:
=====
Domain ID     Domain Tag      Ethernet Address
B             engB           8:0:20:b4:30:8c
C             domainC       8:0:20:b7:30:b0
E             eng1          8:0:20:f1:b7:0
```

使用例 4 - ドメイン engB の使用可能構成要素リストの表示

```
sc0:sms-user:> showplatform -d engB -p available
```

```
Available Component List for Domains:
=====
Available for domain engB:
SB4 SB5 SB6
IO4 IO5
```

使用例 5 - ドメイン engB のドメイン状態の表示

```
sc0:sms-user:> showplatform -d engB -p domains
```

```
Domain Configurations:
=====
DomainID      Domain Tag      Solaris Nodename  Domain Status
B             engB           sun15-b          Keyswitch Standby
```

showplatform(1M)

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 1 無効なドメインが指定されました。
- 2 無効なコマンド行オプションが指定されました。
- 3 不正な数のドメインが指定されました。
- 4 ユーザーが有効な特権を持っていません。
- 5 プラットフォーム構成デーモン (pcd(1M)) との通信中にエラーが発生しました。
- 6 ハードウェアアクセスデーモン (hwad(1M)) との通信中にエラーが発生しました。
- 7 タスク管理デーモン (tmd(1M)) との通信中にエラーが発生しました。
- 8 内部エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

addtag(1M)、hwad(1M)、pcd(1M)、setupplatform(1M)、tmd(1M)

名前	showxirstate - プロセッサにリセットパルスを送信後、CPU ダンプ情報を表示
形式	showxirstate -d <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> -f <i>filename</i> [-v] showxirstate -h
機能説明	showxirstate(1M) は、リセットパルスを送信後に CPU ダンプ情報を表示します。この保存状態ダンプは、異常なドメイン動作の原因を分析するために使用できます。showxirstate は、ドメイン内のすべてのアクティブプロセッサのリストを作成し、各プロセッサの保存状態情報を取得します。 <i>domain_id</i> <i>domain_tag</i> または <i>filename</i> が指定されていない場合、showxirstate はエラーを返します。
オプション	次のオプションがサポートされています。 -d <i>domain_id</i> ドメインの ID です。有効な <i>domain_id</i> は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。 -d <i>domain_tag</i> addtag(1M) を使用してドメインに割り当てられる名前。 -f <i>filename</i> 以前に生成された <i>xir_dump</i> を含むファイルの名前。ファイルの絶対パスを指定する必要があります。デフォルトは <code>/var/opt/SUNWSMS/adm/<i>domain_id</i>/dump</code> で、変更することはできません。 -h ヘルプ。使用方法を表示します。
	<hr/> 注 - 単一で使用します。-h と組み合わせて指定されたオプションは無視されます。 <hr/>
拡張機能説明	-v 冗長。すべての利用可能コマンド情報を表示します。
必要なグループ特権	このコマンドを実行するには、指定したドメインに対するドメイン管理者特権が必要です。 <i>xir_dump</i> ファイルの読み取りには特別な特権は必要ありません。

showxirstate(1M)

使用例

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第2章を参照してください。

使用例 1 – 1つのCPUを持つドメインAのダンプ情報の表示

```
sc0:SMS-user:> showxirstate -dA
```

```
Location:SB4/P0
```

```
XIR Magic   XIR Version 00415645 Buglevel 00000000  
XIR Save Total Size 0x58495253 bytes
```

```
ver       : 00000000.00000000  
tba       : 00000000.00000000  
pil       : 0x0  
y         : 00000000.00000000  
afsr      : 00000000.00000000  afar       : 00000000.00000000  
pcontext: 00000000.00000000  scontext: 00000000.00000000  
dcu       : 00000000.00000000  
dcr       : 00000000.00000000  
pcr       : 00000000.00000000  
gsr       : 00000000.00000000  
softint  : 0x0000
```

```
pa_watch: 00000000.00000000  
va_watch: 00000000.00000000  
instbp   : 00000000.00000000
```

```
tick: 00000000.00000000  tick_cmpr: 00000000.00000000  
stick: 00000000.00000000  stick_cmpr: 00000000.00000000
```

```
t1: 0
```

```
tt  tstate      tpc      tnpc  
0x00 0x0000000000 00000000.00000000 00000000.00000000  
0x00 0x0000000000 00000000.00000000 00000000.00000000  
0x00 0x0000000000 00000000.00000000 00000000.00000000  
0x00 0x0000000000 00000000.00000000 00000000.00000000  
0x00 0x0000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
```

```
Globals: R
```

Normal	Alternate	Interrupt	MMU
0 00000000.00000000	00000000.00000000	00000000.00000000	00000000.00000000
1 00000000.00000000	00000000.00000000	00000000.00000000	00000000.00000000
2 00000000.00000000	00000000.00000000	00000000.00000000	00000000.00000000
3 00000000.00000000	00000000.00000000	00000000.00000000	00000000.00000000

showxirstate(1M)

```
000
4 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
5 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
6 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
7 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000000 00000000.00000
000
```

```
wstate: 0x00
cansave: 0 cleanwin: 0
canrestore: 0 otherwin: 0
```

Register Windows:

Window 0

R Locals	Ins
0 00000000.00000000	00000000.00000000
1 00000000.00000000	00000000.00000000
2 00000000.00000000	00000000.00000000
3 00000000.00000000	00000000.00000000
4 00000000.00000000	00000000.00000000
5 00000000.00000000	00000000.00000000
6 00000000.00000000	00000000.00000000
7 00000000.00000000	00000000.00000000

Window 1

R Locals	Ins
0 00000000.00000000	00000000.00000000
1 00000000.00000000	00000000.00000000
2 00000000.00000000	00000000.00000000
3 00000000.00000000	00000000.00000000
4 00000000.00000000	00000000.00000000
5 00000000.00000000	00000000.00000000
6 00000000.00000000	00000000.00000000
7 00000000.00000000	00000000.00000000

Window 2

R Locals	Ins
0 00000000.00000000	00000000.00000000
1 00000000.00000000	00000000.00000000
2 00000000.00000000	00000000.00000000
3 00000000.00000000	00000000.00000000
4 00000000.00000000	00000000.00000000
5 00000000.00000000	00000000.00000000
6 00000000.00000000	00000000.00000000
7 00000000.00000000	00000000.00000000

Window 3

R Locals	Ins
0 00000000.00000000	00000000.00000000
1 00000000.00000000	00000000.00000000
2 00000000.00000000	00000000.00000000

showxirstate(1M)

```
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

Window 4

```
R Locals          Ins
0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

Window 5

```
R Locals          Ins
0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

Window 6

```
R Locals          Ins
0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

Window 7

```
R Locals          Ins
0 00000000.00000000 00000000.00000000
1 00000000.00000000 00000000.00000000
2 00000000.00000000 00000000.00000000
3 00000000.00000000 00000000.00000000
4 00000000.00000000 00000000.00000000
5 00000000.00000000 00000000.00000000
6 00000000.00000000 00000000.00000000
7 00000000.00000000 00000000.00000000
```

nest_save_ptr: 00000000

showxirstate(1M)

```
XIR Nest Version 00000000 Buglevel 00000000
XIR Nest nest_count 0 save_block 88

tick: 00000000.00000000
stick: 00000000.00000000

tl:73
tt  tstate      tpc          tnpc
0x00 0x000000000000 00000000.00000000 00000000.00000000
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

reset(1M)

smsbackup(1M)

名前	smsbackup – SMS 環境のバックアップ
形式	smsbackup <i>directory_name</i> smsbackup -h
機能説明	<p>smsbackup(1M) は、SMS の運用環境を維持するファイルの cpio(1) アーカイブを作成します。完全かつ正確なバックアップを作成するには、smsbackup を実行する前に SMS を停止してください。SMS を手動で開始および停止する方法については、『System Management Services (SMS) 1.2 インストールマニュアルおよびご使用の手引き』を参照してください。</p> <p>メイン SMS 環境が、たとえば、ドメインのシャットダウンなどで変更されたときには、smsbackup をもう一度実行してシステムコントローラ用の現在のバックアップファイルを維持する必要があります。</p> <p>バックアップファイルの名前は sms_backup.XX.cpio です。XX はバックアップが行われたアクティブなバージョンを示します。</p> <p>SMS バックアップファイルを smsrestore(1M) コマンドを使用して復元します。</p> <p>エラーが発生した場合、smsbackup は /var/sadm/system/logs が存在する場合には /var/sadm/system/logs/smsbackup に、存在しない場合には /var/tmp にエラーメッセージを書き込みます。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>
オペランド	<p>次のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>directory_name</i> バックアップファイルが作成されるディレクトリの名前。このファイルは、ユーザーが読み取り、書き込み特権を持っているシステム、接続されているネットワークまたはテープデバイスのどのディレクトリにでも配置できます。</p>

directory_name が指定されていない場合は、バックアップファイルは /var/tmp 内に作成されます。*directory_name* は、ファイルの絶対パス名を必要としません。

指定された *directory_name* は UFS ファイルシステムとしてマウントされる必要があります。TMPFS ファイルシステムを /tmp のように指定すると、smsbackup が失敗します。*directory_name* が UFS ファイルシステムとしてマウントされているかどうか分からない場合は、**/usr/bin/df -F ufs *directory_name*** と入力します。UFS ファイルシステムからディレクトリ情報が返されます。その他のタイプのファイルシステムでは、警告が返されます。

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 — /var/opt/SUNWSMS/bkup への SMS のバックアップ

```
sc0:sms-user:> smsbackup /var/opt/SUNWSMS/bkup
```

使用例 2 — テープデバイス 0 への SMS のバックアップ

```
sc0:sms-user:> smsbackup /dev/rmt/0
```

使用例 3 — TMPFS システムへの SMS のバックアップ

```
sc0:sms-user:> smsbackup /tmp
ERROR:smsbackup fails to backup to /tmp, a TMPFS
file system.Please specify a directory that is
mounted on a UFS filesystem.
ABORT:
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

smsbackup(1M)

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

/var/sadm/system/logs/smsbackup smsbackup ログファイル

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

smsrestore(1M)

名前	smsconfig – SMS 環境の構成
形式	<pre> smsconfig -m smsconfig -m I1 [domain_id sc] smsconfig -m I2 [sc0 sc1] smsconfig -m L [sc] smsconfig -g smsconfig -a -u username -G admn oper svc platform smsconfig -r -u username -G admn rcfg domain_id smsconfig -l domain_id platform smsconfig -h </pre>
機能説明	<p>smsconfig(1M) は、MAN デーモン、mand(1M) で使用されるホスト名および IP アドレス設定を構成および変更します。各ネットワークに対して、smsconfig はネットワーク内で 1 つ以上の <i>interface</i> 指定を単独で設定できます。デフォルトで、smsconfig は 3 つすべての内部エンタープライズネットワークの構成を行います。</p>
<hr/> <p>注 – MAN ネットワークを構成したり、構成を変更した場合、新しい構成を反映するには SC を再起動する必要があります。</p> <hr/>	
<p>個々のネットワークを構成するには、コマンド行に <i>net_id</i> を付加します。管理ネットワーク <i>net_id</i> は、I1、I2、および L が指定されます。エンタープライズネットワーク内の単一の <i>interface</i> を目的の <i>interface</i> と <i>net_id</i> の両方を指定することによって構成します。一方の SC で smsconfig -m を使ってネットワーク構成に変更を加えた場合には、もう一方の SC にも必ず同じ変更を加えてください。ネットワーク構成が、他方の SC に自動的に反映されることはありません。</p>	
<p>セキュリティ上の理由によって、SMS は起動時に適切な <i>ndd</i> 変数を設定し、転送、ブロードキャスト、およびマルチキャストを無効化します。</p>	

smsconfig は、SMS によって使用される UNIX グループを構成してユーザー特権を記述します。SMS では、各 SC にローカルにインストールされたデフォルトの UNIX グループセットを使用します。smsconfig を使用すると、-g オプションを使用してこれらのグループをカスタマイズできます。詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 インストールマニュアルおよびご使用の手引き』を参照してください。

smsconfig は、ユーザーを SMS グループに追加してドメインおよびプラットフォーム管理特権を構成します。smsconfig は、アクセス制御リスト (ACL) 属性を SMS ディレクトリに設定します。

注 - /etc/group SMS ファイルエントリを手動で編集してユーザーを追加または削除しないでください。ユーザーアクセスに障害が発生します。

オプション

次のオプションがサポートされています。

- a ユーザーを SMS グループに追加して、ドメインまたはプラットフォームディレクトリへの読み取り、書き込みおよび実行アクセス権を指定します。有効な *username*、SMS グループおよび該当する場合は *domain_id* を指定する必要があります。
- G admn|rcfg SMS ドメイン管理者または再構成者を示します。すべてのグループは大文字と小文字を区別しません。
- G admn|oper|svc SMS プラットフォームの管理者、オペレータまたは保守担当者を示します。すべてのグループは大文字と小文字を区別しません。
- g SMS によって使用される UNIX グループを構成してユーザー特権を記述します。
- h ヘルプ。使用方法を表示します。

注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。

- l 指定した SMS ドメインまたは platform へのアクセス権を持つすべてのユーザーをリストします。
- m すべてのエンタープライズネットワークおよび外部コミュニティ用のすべてのインタフェースを構成します。
- m I1 エンタープライズネットワーク I1 用のすべてのインタフェースを構成します。ネットワーク指定は大文字と小文字を区別しません。net_id として NONE を指定すれば、任意のドメインを I1 ネットワーク構成から除外できます。この方法による除外は、I1 ネットワークのみで有効です。
- m I2 エンタープライズネットワーク I2 用のすべてのインタフェースを構成します。ネットワーク指定は大文字と小文字を区別しません。
- m L 外部コミュニティネットワーク用のすべてのインタフェースを構成します。ネットワーク指定は大文字と小文字を区別しません。
- r ユーザーを SMS グループから削除して、ドメインまたはプラットフォームディレクトリへの読み取り、書き込みおよび実行アクセス権を取り消します。有効な username、SMS グループおよび該当する場合は domain_id を指定する必要があります。
- u *username* ユーザーのログイン名を示します。

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

- domain_id* ドメインの ID です。有効な *domain_id* は、A ~ R で、大文字と小文字を区別しません。
- platform Sun Fire 15K プラットフォームおよびプラットフォーム専用ディレクトリを指定します。
- SC, SC0, SC1 Sun Fire 15K SC 用のインタフェース指定。インタフェース指定は大文字と小文字を区別しません。

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 – 初期設定

MAN ネットワーク内のすべてのインタフェースを構成する必要があります。この例では、IPv4 を使用した 3 つすべてのエンタープライズネットワークを設定するために必要なすべてのプロンプトを示します。IPv6 ネットワークの例は若干異なり、netmasks と /etc/ipnodes のプロンプトが表示されず、/etc/hosts の部分も変更されています。

フェイルオーバー、hme0、および eri1 での外部ネットワークの IP アドレスは、各 SC で一意である必要があります。浮動 IP アドレスは、各 SC で同じです。

デフォルトでは、I1 ネットワーク設定はそのネットワーク用に入力されたベースネットワークアドレスから派生されます。net_id として NONE を指定すれば、任意のドメインを I1 ネットワーク構成から除外できます。詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 インストールマニュアルおよびご使用の手引き』を参照してください。

MAN ネットワークがすでに設定されている場合は、必ず SC を再起動してください。

```
sc0:# smsconfig -m

The platform name identifies the entire host machine to the SMS
software.The platform name occupies a different name space than
domain names (hostnames of bootable systems).

What is the name of the platform this SMS will service? sun15

Configuring the External Network for Community C1

Do you want to define this Community? [y,n] y
Enter NICs associated with community C1 [hme0 eri1]:[Return]

Enter Logical/Floating IP hostname for community C1 [sun15-sc-C1]:[Return]
Enter IPMP IP address for sun15-sc-C1: 10.1.1.50
Enter Netmask for community C1: 255.255.255.0

Enter IPMP hostname for community C1 failover address [sun15-sc0-C1-failover]:[Return]
Enter IPMP IP address for sun15-sc0-C1-failover: 10.1.1.51
```

Enter IPMP hostname for hme0 [sun15-sc0-hme0]:**[Return]**
 Enter IPMP IP address for sun15-sc0-hme0: **10.1.1.52**

Enter IPMP hostname for eri1 [sun15-sc0-eri1]:**[Return]**
 Enter IPMP IP address for sun15-sc0-eri1: **10.1.1.53**

Hostname	IP Address (platform=sun15)
-----	-----
sun15-sc-C1	10.1.1.50
sun15-sc0-C1-failover	10.1.1.51
sun15-sc0-hme0	10.1.1.52
sun15-sc0-eri1	10.1.1.53

Do you want to:

- 1) Accept these network settings.
- 2) Edit these network settings.
- 3) Delete these network settings and go onto the next community? [y,n] **y**

Configuring the External Network for Community C2

Do you want to define this Community?[y,n] **n**

Configuring I1 Management Network - 'I1' is the Domain to SC MAN.
 MAN I1 Network Identification

Enter the IP network number (base address) for the I1 network: **10.2.1.0**
 Enter the netmask for the I1 MAN network [255.255.255.224]:**[Return]**

Hostname	IP Address (platform=sun15)
-----	-----
netmask-i1	255,255,255,224
sun15-sc-i1	10.2.1.1
sun15-a	10.2.1.2
sun15-b	10.2.1.3
sun15-c	10.2.1.4
sun15-d	10.2.1.5
sun15-e	10.2.1.6
sun15-f	10.2.1.7
sun15-g	10.2.1.8
sun15-h	10.2.1.9
sun15-i	10.2.1.10
sun15-j	10.2.1.11
sun15-k	10.2.1.12
sun15-l	10.2.1.13
sun15-m	10.2.1.14
sun15-n	10.2.1.15
sun15-o	10.2.1.16
sun15-p	10.2.1.17
sun15-q	10.2.1.18
sun15-r	10.2.1.19

Do you want to accept these network settings?[y,n] **y**

Configuring I2 Management Network - 'I2' is for SC to SC MAN.
 MAN I2 Network Identification

Enter the IP network number (base address) for the I2 network: **10.3.1.0**
 Enter the netmask for the I2 MAN network [255.255.255.252]:**[Return]**

smsconfig(1M)

```
Hostname          IP Address (platform=sun15)
-----          -
netmask-i2       255,255,255,252
sun15-sc0-i2     10.3.1.1
sun15-sc1-i2     10.3.1.2

Do you want to accept these settings? [y,n] y
Creating /.rhosts to facillitate file propagation ... done.

MAN Network configuration modified!
Changes will take effect on next reboot.

The following changes are about to be applied to the "/etc/hosts" hosts file.
-----
ADD: 10.2.1.2    sun15-a #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.3    sun15-b #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.4    sun15-c #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.5    sun15-d #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.6    sun15-e #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.7    sun15-f #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.8    sun15-g #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.9    sun15-h #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.10   sun15-i #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.11   sun15-j #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.12   sun15-k #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.13   sun15-l #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.14   sun15-m #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.15   sun15-n #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.16   sun15-o #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.17   sun15-p #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.18   sun15-q #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.19   sun15-r #smsconfig-entry#
ADD: 10.2.1.1    sun15-sc-i1 #smsconfig-entry#
ADD: 10.1.1.50   sun15-sc-C1 #smsconfig-entry#
ADD: 10.1.1.51   sun15-sc0-C1-failover #smsconfig-entry#
ADD: 10.1.1.52   sun15-sc0-hme0 #smsconfig-entry#
ADD: 10.1.1.53   sun15-sc0-eril #smsconfig-entry#
ADD: 10.3.1.1    sun15-sc0-i2 #smsconfig-entry#
ADD: 10.3.1.2    sun15-sc1-i2 #smsconfig-entry#
-----

Update the hosts file, "/etc/hosts", with these changes?[y,n] y
Hosts file "/etc/hosts" has been updated.

The following information is about to be applied to the "/etc/netmasks" file.
-----
ADD network: 10.1.1.50, mask: 255.255.255.0
ADD network: 10.2.1.0, mask: 255,255,255,224
ADD network: 10.3.1.0, mask: 255.255.255.252
-----

Update the netmasks file, "/etc/netmasks", with these changes?[y,n] y
Netmasks file "/etc/netmasks" has been updated.

sc#
```

使用例 2 - I2 ネットワークの構成

```

sc0:# smsconfig -m I2

Configuring I2 Management Network - 'I2' is for SC to SC MAN
Which System Controller are you configuring [choose 0 or 1]: 0.

Hostname          IP Address (platform=sun15)
-----
netmask-i2        255,255,255,252
sun15-sc0-i2      10.3.1.1
sun15-sc1-i2      10.3.1.2

Do you want to accept these network settings?[y,n] n

MAN I2 Network Identification

Enter the IP network number (base address) for the I2 network: 172.16.0.0

Enter the netmask for the I2 MAN network [ 255.255.255.252 ]:[Return]

Hostname          IP Address (platform=sun15)
-----
netmask-i2        255.255.255.252
sun15-sc0-i2      172.16.0.1
sun15-sc1-i2      172.16.0.2

Do you want to accept these network settings?[y,n] y

Creating /.rhosts to facillitate file propagation ... done.

MAN Network configuration modified!
Changes will take effect on the next reboot.

The following changes are about to be applied to the "/etc/hosts" hosts file.
-----
ADD: 172.16.0.1    sun15-sc0-i2 #smsconfig-entry#
ADD: 172.16.0.2    sun15-sc1-i2 #smsconfig-entry#
-----
Update the hosts file, "/etc/hosts", with these changes?[y,n] y
Hosts file "/etc/hosts" has been updated.

The following information is about to be applied to the "/etc/netmasks" file.
-----
ADD network:172.16.0.0, mask:255.255.255.252
-----
Update the netmasks file, "/etc/netmasks", with these changes?[y,n] y
Netmasks file "/etc/netmasks" has been updated.

sc#

```

使用例 3 - SC から I1 ネットワーク上のドメイン B での内部ホスト名および IP アドレスの構成

```

sc0:# smsconfig -m I1 B

Enter the MAN hostname for DB-I1 [ sun15-b ]: domainB-i1
I could not automatically determine the IP address of domainB-i1.

Please enter the IP address of domainB-i1: 10.2.1.20

You should make sure that this host/IP address is set up properly in
the /etc/inet/hosts file or in your local name service system.

Network:I1 (DB-I1) Hostname:domainB-i1 IP Address: 10.2.1.20

Do you want to accept these settings?[y,n] y

Creating /.rhosts to facillitate file propagation ... done.

MAN Network configuration modified!
Changes will take effect on the next reboot.

The following changes are about to be applied to the "/etc/hosts" hosts file.
-----
ADD:10.2.1.20 domainB-i1 #smsconfig-entry#
-----
Update the hosts file, "/etc/hosts", with these changes?[y,n] y
Hosts file "/etc/hosts" has been updated.

sc#

```

使用例 4 - ドメイン D を I1 ネットワークから除外する

```

sc0: # smsconfig -m I1 D

Enter the MAN hostname for DB-I1 [ sun15-b ]: domainB-i1
I could not automatically determine the IP address of domainB-i1.

Please enter the IP address of domainB-i1: NONE

You should make sure that this host/IP address is set up properly in
the /etc/inet/hosts file or in your local name service system.

Network: I1 (DB-I1) Hostname: domainB-i1 IP Address: NONE

Do you want to accept these settings? [y,n] y

Creating /.rhosts to facillitate file propagation ... done.

MAN Network configuration modified!
Changes will take effect on the next reboot.

The following changes are about to be applied to the "/etc/hosts" hosts file.

```

```

-----
ADD: NONE    domainB-11 #smsconfig-entry#
-----

Update the hosts file, "/etc/hosts", with these changes? [y,n] y
Hosts file "/etc/hosts" has been updated.

sc#

```

使用例 5 - デフォルト以外のグループの構成

この例では、すべてのドメイン管理者とドメイン再構成者グループがデフォルトのグループのままになります。

```

sc0:# smsconfig -g
1) Edit current configuration
2) Restore default groups
3) Quit
Select one of the above options: 1

```

NOTE: In order to configure a new group the group must already exist.

The Platform Administrator group has configuration control, a means to get environmental status, the ability to assign boards to domains, power control and other generic service processor functions.

Enter the name of the Platform Administrator group [platadm]? **zeus**

The Platform Operator group has a subset of the platform privileges, limited generally to platform power control and platform status

Enter the name of the Platform Operator group [platoper]? **poseidon**

The Platform Service group possesses platform service command privileges in addition to limited platform control and platform configuration status privileges

Enter the name of the Platform Service group [platsvc]? **kronos**

The Domain Administrator group possesses domain control and status, and console access privileges (for the respective domain), but does not possess platform wide control or platform resource allocation privileges.

```

Enter the name of the Domain A Administrator group [dmnaadm]? [Return]
Enter the name of the Domain B Administrator group [dmnbadm]? [Return]
Enter the name of the Domain C Administrator group [dmncadm]? [Return]
Enter the name of the Domain D Administrator group [dmndadm]? [Return]
Enter the name of the Domain E Administrator group [dmneadm]? [Return]
Enter the name of the Domain F Administrator group [dmnfadm]? [Return]
Enter the name of the Domain G Administrator group [dmngadm]? [Return]
Enter the name of the Domain H Administrator group [dmnhadm]? [Return]
Enter the name of the Domain I Administrator group [dmniadm]? [Return]
Enter the name of the Domain J Administrator group [dmnjadm]? [Return]
Enter the name of the Domain K Administrator group [dmnkadm]? [Return]
Enter the name of the Domain L Administrator group [dmnladm]? [Return]
Enter the name of the Domain M Administrator group [dmnmadm]? [Return]
Enter the name of the Domain N Administrator group [dmnnadm]? [Return]

```

smsconfig(1M)

```
Enter the name of the Domain O Administrator group [dmnoadmin]? [Return]
Enter the name of the Domain P Administrator group [dmnpadmin]? [Return]
Enter the name of the Domain Q Administrator group [dmnqadmin]? [Return]
Enter the name of the Domain R Administrator group [dmnradmin]? [Return]
```

The Domain Reconfiguration group possesses a subset of the Domain Administration group privileges. This group has no domain control other than board power and reconfiguration (for the respective domain).

```
Enter the name of the Domain A Reconfiguration group [dmnarcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain B Reconfiguration group [dmnbrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain C Reconfiguration group [dmncrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain D Reconfiguration group [dmndrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain E Reconfiguration group [dmnercfg]? [Return]
Enter the name of the Domain F Reconfiguration group [dmnfrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain G Reconfiguration group [dmngrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain H Reconfiguration group [dmnhrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain I Reconfiguration group [dmnircfg]? [Return]
Enter the name of the Domain J Reconfiguration group [dmnjrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain K Reconfiguration group [dmnkrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain L Reconfiguration group [dmnlrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain M Reconfiguration group [dmnmrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain N Reconfiguration group [dmnnrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain O Reconfiguration group [dmnorcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain P Reconfiguration group [dmnprcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain Q Reconfiguration group [dmnqrcfg]? [Return]
Enter the name of the Domain R Reconfiguration group [dmnrrcfg]? [Return]
Configuration complete.
```

Select one of the above options:

- 1) Edit current configuration
- 2) Restore default groups
- 3) Quit Select one of the above options: **3**

sc#

使用例 6 — ドメイン管理者グループへのユーザーの追加とドメイン B ディレクトリへのアクセス権の構成

有効なユーザー名と有効な SMS グループおよびドメインを指定する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G admn B
fdjones has been added to the dmnbadmin group.
All privileges to domain B have been applied.
```

使用例 7 – ドメイン構成者グループへのユーザーの追加とドメイン C ディレクトリへのアクセス権の構成

有効なユーザー名と有効な SMS グループおよびドメインを指定する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G rcfg C
fdjones has been added to the dmnCrcfg group.
All privileges to domain C have been applied.
```

使用例 8 – プラットフォームディレクトリへのアクセス権の構成

有効なユーザー名と有効な SMS グループおよびプラットフォームを指定する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -a -u jtd -G svc platform
jtd has been added to the platsvc group.
All privileges to the platform have been applied.
```

使用例 9 – ドメイン C ディレクトリへのアクセス権を持つユーザーの表示

```
sc0:# smsconfig -l C
fdjones
shea
```

使用例 10 – プラットフォームディレクトリへのアクセス権を持つユーザーの表示

```
sc0:# smsconfig -l platform
fdjones
jtd
```

使用例 11 – ドメイン C ディレクトリへのユーザーアクセス権の削除

有効なユーザー名と有効な SMS グループを指定する必要があります。ユーザーがドメインへのアクセス権を持つ複数のグループに属している場合は、ディレクトリアクセスを取り消す前にすべてのグループから削除する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -r -u fdjones -G rcfg C
fdjones has been removed from the dmnCrcfg group.
fdjones belongs to the dmnCadmn group
Access to domain C remains unchanged.
```

```
sc0:# smsconfig -r -u fdjones -G admn C
fdjones has been removed from the dmnCadmn group.
All access to domain C is now denied.
```

使用例 12 — 無効なグループ名を使用した構成

有効な SMS グループを指定する必要があります。

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G staff D
ERROR:group staff does not exist
ABORTING.
```

使用例 13 — グループと指定の組み合わせ

正しい領域指定とともにグループ名を指定する必要があります。admн グループは、どちらの指定でも機能します。

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G rcfg platform
ERROR:group rcfg cannot access the platform
ABORTING.
```

```
sc0:# smsconfig -a -u fdjones -G oper D
ERROR:group oper cannot access a domain
ABORTING.
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

次の構成ファイルが必要です。

/etc/hostname.scman0

MAN Ethernet インタフェースファイル

/etc/hostname.scman1

MAN Ethernet インタフェースファイル

/etc/opt/SUNWSMS/config/MAN.cf

MAN デーモン構成ファイル

注 — MAN.cf は、内部 SMS システムファイルであり、サンの担当者以外は変更してはなりません。

属性

次の属性の説明については、attributes(5)を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSr

関連項目

mand(1M)

smsconnectsc(1M)

名前	smsconnectsc – 遠隔 SC コンソールへのアクセス
形式	smsconnectsc [-y n] smsconnectsc -h
機能説明	<p>smsconnectsc は、停止した遠隔 SC にアクセスするためにローカル SC から遠隔 tip コンソールセッションを作成します。</p> <p>smsconnectsc は、ローカル SC にログインした際に、ローカル SC のポート B を遠隔 SC の RS-232 ポート A に接続するビットを有効化します。遠隔 SC は、停止中の SC です。いったん tty 接続が有効になると、smsconnectsc は、遠隔 SC に対する tip コンソールセッションを呼び出します。tip コンソールセッションを使用して、遠隔 SC で必要な処理を行うことができます。</p> <p>smsconnectsc が実行されるのは、遠隔 SC への外部接続が行われていない場合です。遠隔 SC からポート A への外部接続がアクティブである場合、smsconnectsc は失敗して、セッションがハングする可能性が非常に高くなります。終了するには、~. と入力します。</p> <p>セッションを終了する場合には、telnet か rlogin のどちらかを使用してローカル SC にログインしたかによって、方法が異なります。後述の「拡張機能説明」を参照してください。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/> <p>-n すべてのプロンプトに自動的に「no」と応答します。</p> <p>-y すべてのプロンプトに自動的に「yes」と応答します。</p>

拡張機能説明

使用法

smsconnectsc によって開始された tip コンソールウィンドウでは、行の先頭のチルド (~) は、tip コンソールで次のアクションを指示するエスケープ記号と解釈されます。

- ~. によって、tip セッションが切断されます。

telnet を使用してローカル SC にアクセスしている場合は tip セッションが切断され、ローカル SC にログインしたままになります。

rlogin を使用してローカル SC にアクセスしている場合は、tip セッションが切断され、rlogin セッションも切断されます。

注 - チルドは、ピリオドを入力するまでは画面に表示されません。

- ~. によって tip セッションが切断されます。

~. は、rlogin に対してのみ機能します。telnet を使用してローカル SC にアクセスしている場合は、「~.: コマンドが見つかりません。」というエラーメッセージが表示されます。

rlogin を使用してローカル SC にアクセスしている場合は tip セッションが切断され、ローカル SC にログインしたままになります。

注 - 最初のチルドは、画面に表示されません。2 番目のチルドは、ピリオドを入力するまでは表示されません。

rlogin は、チルドが新しい行の先頭に使用されている場合でも、チルド-エスケープのシーケンスを処理します。行の先頭でチルドシーケンスを送信する必要があり、rlogin を使用する場合は、2 つのチルド(最初のチルドはエスケープで、2 番目は rlogin に対するチルド)を使用します。もうひとつの方法としては、rlogin の実行中に、行の先頭にチルドを入力しないようにします。kill -9 コマンドを使用してコンソールセッションを終了すると、smsconnectsc コマンドが実行されたウィンドウまたは端末は、raw モードになり、ハングしたように見えます。このような状況を回避するには、^j と入力し、次に stty sane、さらに ^j と入力します。

smsconnectsc(1M)

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、プラットフォーム管理者特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 – ローカル SC から停止した遠隔 SC へ遠隔接続する

次の例では、ローカル SC を sc1、遠隔 SC を sc0 とします。ローカル SC に、プラットフォーム管理者としてログインします。

```
sc1:sms-user:> smsconnectsc
TTY connection is OFF.
About to connect to other SC.
Do you want to continue (yes/no)? y
connected
sc0:sms-user:>
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

rlogin(1M)、rlogin(1M)、tip(1M)

名前	smsrestore – SMS 環境の復元
形式	smsrestore <i>filename</i> smsrestore -h
機能説明	<p>smsrestore(1M) は、SMS の操作環境を smsbackup(1M) によって作成されたバックアップファイルから復元します。smsrestore を使用して、SMS ソフトウェアが新しいディスクにインストールされた後に SMS 環境を復元します。</p> <p>smsrestore を実行する前にフェイルオーバを無効にして SMS を停止します。smsrestore の実行後、必要に応じて SMS を開始し、フェイルオーバを有効化します。SMS を手動で開始および停止する方法については、『System Management Services (SMS) 1.2 インストールマニュアルおよびご使用の手引き』を参照してください。</p> <p>エラーが発生した場合は、smsrestore がエラーメッセージを /var/sadm/system/logs/smsrestore に書き込みます。</p> <hr/> <p>注 - メイン SMS 環境が、たとえば、ドメインのシャットダウンなどでバックアップファイルの作成後に変更された場合、システムコントローラ用の現在のバックアップファイルを維持するには smsbackup(1M) をもう一度実行する必要があります。</p> <hr/>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されません。</p> <hr/>

smsrestore(1M)

オペランド

次のオペランドがサポートされています。

filename smsbackup(1M) によって作成されたバックアップファイルの名前です。指定されたファイルが現在のディレクトリにない場合は、*filename* にはファイルのフルパスを含んでいる必要があります。このファイルは、システム、接続されているネットワークまたはテープデバイスのどこにでも配置できます。*filename* が指定されていない場合は、エラーが表示されます。

拡張機能説明

必要なグループ特権

このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。

詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。

使用例

使用例 1 – SMS の復元

```
sc# smsrestore sms_backup.1.0.cpio
```

使用例 2 – テープデバイス 0 からの SMS の復元

```
sc# smsrestore /dev/rmt/0/sms_backup.1.0.cpio
```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

0 正常に終了しました。

0 以外 エラーが発生しました。

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

```
/var/sadm/system/logs/smsrestore
```

smsrestore ログファイル

属性

次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。

属性タイプ	属性値
Availability	SUNWSMSop

関連項目

smsbackup(1M)

名前	smsversion - アクティブな SMS ソフトウェアのバージョンを他のインストール済みバージョンに変更
形式	<pre>smsversion new_version</pre> <pre>smsversion -t</pre> <pre>smsversion -h</pre>
機能説明	<p>smsversion(1M) を使用すれば、インストール済みの連続する 2 つのバージョンの SMS を切り替えることができます。</p> <p>コマンド行引数をすべて省略した場合、smsversion は対象のシステムコントローラに正しくインストールされている各バージョンの SMS のリストを表示します。このリストから任意のバージョンを選択すると、smsversion は現在の構成環境のコピーを保存し、選択されたバージョンの有効化に必要なすべてのソフトウェアリンクの切り替えを実行します。有効化するバージョンは、smsversion のコマンド行で指定することも可能です。</p> <p>smsversion による切り替え処理が完了すると、選択したバージョンの SMS がアクティブになります。smsversion によって自動保存された構成を復元するには、smsrestore(1M) を使用します。切り替え前のバージョンを、smsversion による切り替えで自動的に復元することはできません。</p> <p>切り替え前の構成を復元する手順：</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ smsrestore を実行する前に、フェイルオーバーを無効化して SMS を停止します。 ■ smsrestore を実行します。 <hr/> <p>注 - 復元したバックアップの作成後に、smsconfig -m でネットワーク構成が変更されている場合は、ここで smsconfig -m を実行して再起動してください。</p> <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネットワーク構成に変更がなければ、ただちに SMS を開始してフェイルオーバーを有効化できます。SMS を手動で開始および停止する方法については、『System Management Services (SMS) 1.2 インストールマニュアルおよびご使用の手引き』を参照してください。

smsversion(1M)

	<p>smsversion の実行中にエラーが発生すると、エラーメッセージが /var/sadm/system/logs/smsversion に出力されます。</p>
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-h ヘルプ。使用方法を表示します。</p> <hr/> <p>注 - 単一で使用します。-h に追加して指定されたオプションは無視されま す。</p> <hr/>
オペランド	<p>-t 現在アクティブな SMS のバージョンを表示して終了します。</p> <p>次のオペランドがサポートされています。</p> <p><i>version_number</i> 新たに有効化する SMS のバージョン (リリース番号)</p>
拡張機能説明	
必要なグループ特権	<p>このコマンドを実行するには、スーパーユーザー特権が必要です。</p> <p>詳細については、『System Management Services (SMS) 1.2 管理者マニュアル』の第 2 章を参照してください。</p>
使用例	<p>使用例 1 - 1 つのバージョンの SMS がインストールされている場合</p> <p>SMS の 1 つのバージョンのみがインストールされているときにアクティブバージョンを表示して終了します。</p> <pre>sc# smsversion -t 1.2</pre> <p>使用例 2 - アクティブな SMS のバージョンを切り替える</p> <p>対象のシステムコントローラにインストールされている SMS の各バージョンが表示されます。アクティブでない任意のバージョンを選択し、切り替えを実行します。</p> <p>バージョンを切り替える前に、必ず SMS を停止してください。</p> <pre>sc# smsversion smsversion: Active SMS version < 1.1 > smsversion: SMS version 1.1 installed smsversion: SMS version 1.2 installed Please select from one of the following installed SMS versions. 1) 1.1</pre>

```

2) 1.2
3) Exit
Select version: 2
You have selected SMS Version 1.2

Is this correct? [y,n] y
smsversion: Upgrading SMS from <1.1> to <1.2>.
To move to a different version of SMS an archive of
critical files will be created. What is the name of
the directory or tape device where the archive will be
stored? [/var/tmp][return]

smsversion: Backup configuration file created: /var/tmp/sms_backup.1.1.cpio
smsversion: Switching to target version <1.2>.
smsversion: New Version <1.2> Active
smsversion: Active SMS version < 1.2 >
To use the previous SMS configuration settings type:
smsrestore /var/tmp/sms_backup.1.1.cpio

NOTE: When switching to another SMS version,
the user must choose (via use of smsrestore) to restore the
configuration settings from the previously active version.

```

使用例 3 - 使用中の SMS より古いバージョンに切り替える

古いバージョンに切り替えるには、コマンド行引数でバージョンを指定します。

```

sc# smsversion 1.1
smsversion: Active SMS version < 1.2 >
You have requested SMS Version 1.1

Is this correct? [y,n] y
smsversion: Downgrading SMS from <1.2> to <1.1>.
smsversion: SMS version 1.1 installed
To move to a different version of SMS an archive of
critical files will be created. What is the name of
the directory or tape device where the archive will be
stored? [/var/tmp][return]

smsversion: Backup configuration file created: /var/tmp/sms_backup.1.2.cpio
smsversion: Switching to target version <1.1>.
smsversion: New Version <1.1> Active
smsversion: Active SMS version < 1.1 >
To restore previous the SMS configuration setting type:
smsrestore /var/tmp/sms_backup.1.2.cpio

```

終了ステータス

次の終了値が返されます。

- 0 正常に終了しました。
- 0 以外 エラーが発生しました。

smsversion(1M)

ファイル

このコマンドでは次のファイルが使用されます。

`/var/sadm/system/logs/smsversion`

smsversion ログファイル

属性

次の属性の説明については、`attributes(5)` を参照してください。

属性タイプ	属性値
Aailability	SUNWSMSop

関連項目

`smsbackup(1M)`、`smsrestore(1M)`

名前	ssd – SMS 起動デーモン				
形式	ssd [-f <i>startup_file</i>] ssd [-i <i>message</i>]				
機能説明	<p>ssd(1M) は、SMS のすべての主要デーモンおよびサーバーを起動、停止、および監視します。オプションを指定しないで実行すると、ssd は、ssd が開始および監視するデーモンおよびサーバーをリストする <i>ssd_start</i> ファイルから読み取ります。</p> <p>このプログラムを手動で起動しないでください。ssd(1M) は、Solaris ソフトウェア実行コントロールスクリプトで自動的に起動され、再起動のために定期的に監視されます。</p>				
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-f <i>startup_file</i> デフォルトの <i>ssd_start</i> ファイルの代わりにこのファイルを使用します。</p> <p>-i <i>message</i> プラットフォームログファイルに通知メッセージを書き込みます。sms 起動スクリプトによって指定および使用されます。</p>				
ファイル	<p>次のファイルがサポートされています。</p> <p><i>/etc/opt/SUNWSMS/startup/ssd_start</i> ssd 用のデフォルト起動ファイル</p> <p><i>/etc/opt/SUNWSMS/startup/sms</i> SMS 用のデフォルト起動ファイル</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				

tmd(1M)

名前	tmd – タスク管理デーモン				
形式	tmd [-t <i>number</i>]				
機能説明	<p>tmd(1M) は、SMS のスケジュールなどのタスク管理サービスを提供します。このサービスの目的は、ハードウェアテストおよび構成ソフトウェアの同時起動中に発生する衝突の数を削減することです。</p> <p>このデーモンは ssd(1M) によって自動的に起動されます。コマンド行から手動で起動しないでください。</p>				
オプション	<p>次のオプションがサポートされています。</p> <p>-t <i>nubmer</i> このオプションを使用すると、指定した数の同時起動を抑制できます。値は整数で 1 以上でなければなりません。</p> <hr/> <p>注 - デフォルト値を変更すると、システムの機能に不正な影響を与えることがあります。サンのサービス担当者から指示された場合以外は、このパラメタを修正しないでください。</p> <hr/>				
終了ステータス	<p>次の終了値が返されます。</p> <p>0 正常に終了しました。</p> <p>0 以外 エラーが発生しました。</p>				
属性	<p>次の属性の説明については、attributes(5) を参照してください。</p> <table border="1" data-bbox="474 1293 953 1402"> <thead> <tr> <th>属性タイプ</th> <th>属性値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Availability</td> <td>SUNWSMSop</td> </tr> </tbody> </table>	属性タイプ	属性値	Availability	SUNWSMSop
属性タイプ	属性値				
Availability	SUNWSMSop				
関連項目	ssd(1M)				